東方學報 京都第66册（1994）：380—271頁

ソグド文字で表記された漢字音

吉田　豐

はじめに …… 380
Ⅰ　ソグド語文獻中にみられる漢語の要素 …… 378
Ⅱ　ソグド文字で表記された漢文佛典 …… 367
Ⅲ　ソグド文字で表記された漢語の發音 …… 357
　1　表の説明
　2　聲母
　3　韻母
　4　資料の時代
Ⅳ　ウイグル語に導入された漢字音に關する2・3の問題點 …… 322
　1　資料の問題
　2　不規則な對應
　3　いわゆる「ウイグル字音」の問題
Ⅴ　敦煌出土の俗文書中の漢字音の檢討 …… 308
Ⅵ　おわりに …… 305

附錄1　TⅡT の漢字音 …… 285
附錄2　Mainz の漢字音 …… 283
附錄3　ソグド語の音韻體系と文字 …… 280

はじめに

ソグド人と中國人との接觸は古く，遲くとも後漢時代にはソグド商人が，盛んに中國を訪れていたことが知られている(1)。その過程で當然言語の接觸も行われ，接觸に伴う借用や2言語併用などの現象もみられたであろう。しかし，このようなごく古い時代の言語接觸の證據は，檢證できる形では後世まで殘されなかった。中國を表す cyn（<秦）(2)や長安を示す 'xwmt'n（<咸陽？）(3)を，數少ない例としてあげることができるかもしれない。だがこれらは，あくまでも固有名詞であり，西方に傳わった中國の地名として，必ずしも借用語と見なすことはできないであろう。

現在残されているソグド語文獻で見る限り，ソグド語に導入され定着した漢語からの借用語は非常に少ない。異論なく定着していたといえるものとしては，'ym'wtsy[4]「鸚鵡」（<鸚鵡子），mk'「墨」（<墨），myw「虎」（<猫），tym「宿屋」（<店），p'n「ものを書きつける板」（<板），šnk「升」（<升）をあげることができるだろう。これらがソグド語に定着していたことは，それらが中央アジアの他の言語にも導入されていることから知られる。mk'，tym，p'n は，古代トルコ語にもみられる[5]。'ym'wtsy については，トカラ語 A に yāmutsi が在證されている[6]。また漢語の「升」が，中央アジアの諸言語に借用されたことについては，Sims-Williams and Hamilton が詳しく論じている[7]。

一方 myw と同源の語はトカラ語 B mewiyo にみられ，Lüders は漢語からの借用語だとした[8]。これに對して Bailey は，コータン語の muyi「虎（十二支の名稱）」を論じた際，ソグド語形及びトカラ語 B の形式に言及し，これらはコータン語形と同源であり，漢語からの借用語ではないと主張した[9]。異系統の言語に類似の形式が在證されることから，ここでは Lüders の說を支持しておきたい。ただ，4～6世紀頃のものと考えられるインダス河上流のソグド語碑文中に myw は既に見いだされるので，借用されたとすれば非常に早い時期であったことになる[10]。

上記の5語は他の言語にも在證されることから，それらが漢語から直接ソグド語に導入されたものではなく，所謂文化語彙として中央アジアで流布していた可能性も考慮しておく必要があるであろう。なお，「小錢」を意味する pny が，漢語の分からの借用であるとするむきもあるが[11]，これについては梵語の paṇa-「小錢」から借用されたとする Henning の說が採用されるべきである[12]。

これらの5語以外に，どれほどの漢語がソグド語に定着していたかを知ることは困難である。なぜなら多くの場合，漢語に由來する形式は限られた文脈に1度しか現れないからである。さらに後期の俗文獻中には，古代トルコ語の要素とともに漢語の要素が見つかる場合がある。下のⅠ章及びⅤ章でも論じるように，この種の文獻中の漢語の形式は，古代トルコ語文獻中のそれと基本的に同じであり，それらが本來どの言語に導入されていたのかを決定することは容易ではない。

以下の各章でソグド文字で表記された漢語を扱うが，資料としてはソグド語文獻中の漢語の要素と，ソグド文字で音寫された漢文佛典を用いる。これらは全體としてそれほど量が多いわけではなく，ソグド語文獻の解明や，漢語音韻史の資料の擴大に著しく貢獻することにはならない。しかし，ソグド語文獻中の漢語の要素に關する總合的研究を提出することは，ソグド語の研究が始まって以來ほぼ90年を經た現在に至るまで一度も試みられなかったことであり，その意義は小さくないと信じる[13]。

I　ソグド語文獻中に見られる漢語の要素

ソグド語文獻に見られる漢語を，文獻ごとにリストする。中にはほぼ確實に漢語を表記したものと考えられるのに，對應する漢語を特定できない形式がある。そのような場合でも將來比定されることを期待して，形式だけは收錄することにした。なお文獻はほぼ時代順に配列されている。

1　Ancient Letters (A. D. 312–313)[1]

Ancient Letter II には，當時の中國の諸都市の名稱がソグド文字によって表記されている。それらは Henning と Harmatta によって比定された[2]。

'nkp' (AL II, 13, 16): 鄴 ngi̯ap[3]

cwcn (AL II, 5): 酒泉 tsi̯ə̯u dzʿi̯wän[4]

kc'n (AL II, 6, 35): 姑藏 kuo dzʿâng

kmzyn (AL II, 8): 金城 ki̯əm źiäng

漢語の地名であるものの，未比定あるいは確實な比定ができていないものは，次のとおりである。

kwr'ynk (AL II, 8)

n'yn'ymh (AL II, 15)

*δry'ny (AL II, 19)

kr''cyh (AL II, 40)

これらのうち kwr'ynk について，古代書簡を最初に校訂した Reichelt は，kr'wr'n (AL VI, 5)「樓蘭」と同じ地名であると考えた[5]。しかし Hennning は手紙の內容と，樓蘭のような重要な地名が 2 樣に綴られることは考えにくいという理由で，Reichelt の說を退けた。Henning 自身は金城の東にあった都市の名前だろうとするものの，具體的な提案は行っていない[6]。一方 Harmatta は何の論證もせずに Huai-yang 淮陽 (γwăi i̯ang) にあてた[7]。上古音の *gʿwɐr di̯ang を參考にしたものと思われるが，彼の古代書簡についての年代論（2 世紀末のものとする）は否定されており，上古音に基づいた比定そのものにも問題がある。今は不明の地名としておく。

n'yn'ymh は，明らかに鄴と並置された地名である。Harmatta は，n'yn'y'h と讀み，Nan-yang 南陽 (nâm i̯ang) にあてた。しかしその後彼の讀みは退けられている[8]。

*δry'ny は破損部にあり，必ずしも確實な讀みではない。またこれが地名であるという確證もない。Henning は δrw'ny「敦煌」と讀んだ。(δ)ry'ny は Harmatta の讀みで，彼は Li-yang

に比定したが，どのような具體的地名を考えているのか明らかではない。

kr''cyh は位格の冠詞 'wy を伴い，地名である可能性が高い。Harmatta は Ki-cheng をあてはめるが，これについても注釋が施されていないので，彼の意圖した漢字は不明である[9]。

最後に AL II の日附の部分に見られる cyrδsw''n について述べておく必要がある。Henning は，これは酒泉を表記したものだと考えていた[10]。これに對して Harmatta は，中國語で "the current cycle of sixty" を意味する tsï lu-sün (上古音 *ts'ir l̥u(k)-z̥uěn) の音寫だとした[11]。彼は對應する具體的な漢字を提出していないが，茲六旬（或は巡）を意圖したのではないかと考えられる。しかし榎によれば，そのような漢字の表現の存在は疑わしいという[12]。

この語の解釋について最終的な結論を下したのは Grenet and Sims-Williams で，彼らによれば cyrδsw''n は當時のサマルカンド王の名前である。cyrδ の部分は，ソグド語の人名の構成要素として別に存在する cirθ（<古代イラン語 *čiθra-「種，血統」）であり，sw''n は古代イラン語の *savāna-「繁榮」に遡るものと考えられる[13]。

2　インダス河上流チラス附近の碑文（4－6 世紀）[14]

myw[15]: 猫 m̥jäu

3　ブグト碑文（6 世紀後半）

この碑文についての研究は Kljaštornyj and Livšic によって行われた[16]。保存狀態が劣惡で，彼らの解讀には必ずしも信頼を置くことはできないが[17]，彼らが漢語を表記したとするのは次の 3 語である。

kwts'tt' (B1, 1): ?

*snkwn[18] (B2, 2, 8): 將軍 tsj̥ang kj̥uən

trxw'n (B2, 2, 7, B3, 4): 達官 d'ât kuân

Kljaštornyj and Livšic によれば，kwts'tt' は碑文建立當時の中國の皇帝の名前或は年號であると考えられるが，適切な漢語を見いだし得ないという。snkwn は 2 度現れるが，どちらも殆ど破損した部分を，校訂者たちが補ったものであり，ブグト碑文にこの形式が存在するかどうかは疑わしい。もしこの復元が正しいとすれば，snkwn/s'nkwn の最も早い例となるだろう[19]。

trxw'n が古代トルコ語の稱號である tarqan に對應するものであることは Kljaštornyj and Livšic も指摘している。また trxw'n という -w- を伴う形式は，tarqan の語源が漢語の達官であるとする羽田亨の說を補强するものとして，護雅夫の言及するところである[20]。tarqan の語源が達官であるかどうかについては，未だに贊否兩論があるようだが[21]，本碑文の trxw'n は達官を寫したものとして問題がないので，護說に從っておく。

4　アスターナ出土の女奴隷賣買契約文書（639年）[22]

この契約文書には，次のような漢語の要素がみられる。

'wt' (4)[23]: ?

c'n (4): 張 ṭ̯ang

w''n (1): 王 ji̯wang

y'ncyw (1): 延壽 i̯än źi̯ə̯u

y'nsy'n (3, 6, 9, verso 1): ?

文書の日附の部分に現れた麴氏高昌國の年號 y'ncyw 延壽と w''n 王の比定はほぼ確實である。また c'n-kwtr「c'n 姓」という表現と，類似の x'nkwtr'y「康姓」及び ''n-kwtr'k「安姓」（下記5參照）との比較から，c'n が漢語の姓を表し，高昌國の有力氏族であった張氏に對應するものであることも受け入れられるであろう[24]。

'wt' は奴隷の買い主である僧侶の y'nsy'n の父親の名前で，張姓と考えられるので，やはり漢語の人名であると推定される。この推定が正しければ，y'nsy'n も漢人僧の名前ということになる。しかし殘念ながらどちらにも適切な漢字を當てはめることができない[25]。

5　佛典（8世紀頃）[26]

ソグド佛典中には，次のような漢語形が見いだされる。

''n (Intox 35): 安 ·ân

'n'wγt'r' s'm myx s'm pwδ'y (SCE 558–59): 阿耨多羅三藐三菩提 ·â nuok[27] tâ lâ sâm mâk sâm b'uo d'iei

'ym'wtsy (SCE 144, 315, 352): 鸚鵡子 ·ɛng mi̯u tsi

δyw (SCE 165): 蓼 lieu

mk' (P2 951): 墨 mək

myw (P2 635 et passim): 猫 mi̯äu

p'tsy'w (Dhy 344): 芭蕉 pa tsi̯äu

pyp'n (SCE 154): 屁板 p'i pwan[28]

s'm (SCE 138, 169): 簪 tsa̯̣m

tm'wx (SCE 155): 啄木 tuk muk

x'n (P8 167): 康 k'âng[29]

x'y 'nkwyn (Intox 34): 開元 k'ə̯̣i ngi̯wɐn

xwncwyh (P8 175): 公主 kung tśi̯u

これらのうち，最後の xwncwyh は佛典の奥書の中の廻向の部分に現れる女性の人名である。qunčuy (xwncwy) は古代トルコ語においても，しばしば女性の名前として用いられている。從

って漢語からの借用語というより，トルコ名を持ったソグド人であったか，トルコ族出身の女性であったのだろう[30]。

なお SCE には，上に收錄したもの以外に kyc'kh (166)「うじ蟲」があり，これを蛐蟮 kiwok źiän の音寫形とみなすむきもあるが，漢語との乖離が著しく，ここには敢えて加えなかった。實際 kyc'kh はソグド語本來の語形と考えて不都合はない[31]。

5.1 梵語音譯語の表記

上記の 'n'wγt'r' s'm myx s'm pwδ'y は，梵語の anuttara-samyak-saṃbodhi- の漢字による音譯語に基づいている。このように梵語の音譯語をさらにソグド文字で表記しているものが，ソグド佛典には何例かみられる。その場合別に直接梵語に由來する形式が存在することもある。例えば上の例には，'nwtr'y'n sm'yksmpwδy という形式も別に知られている[32]。このような漢字による音譯語に基づいた形式も，ソグド語中の漢語の要素と見なされるだろう。ただし，この種の資料には注意すべき特徴があり，安易に漢字音をソグド文字で表記したものと見なすわけにはいかない。例えば上の例でも，耨の音寫形 n'wγ にはむしろ *'nt'wγ が期待されるし，提の音寫形 δ'y にはむしろ *t(')y が豫想される[33]。また 'wt'nwr (STii 10, 51) は，uttarakuru- の音譯語欝單越 ·iuət tân jiwɐt に由來するが[34]，漢語の入聲の韻尾 -t は，欝では -t(或はゼロ)で，越では -r で表記されている。これは明らかに，原語への配慮から爲されたものである[35]。從ってこの種の形式は，ソグド文字によって表記された他の漢字音と同列に扱うべきではない。上に 'n'wγt'r' s'm myx s'm pwδ'y だけをとりあげ收錄したのは，單にこの形式ではいくつかの音節を分綴し，漢字音を表記しようとする志向性が他のものに比較して高いからである。

便宜のために，下に漢字による音譯語を下敷にした，或はそれらに影響されたと考えられる語をリストしておく。なお［ ］内の形式は，別に在證される梵語に由來する語形である[36]。

1 ''m(')yt', ''m't'[37] (passim): 阿彌陀 (Skt. amitābha-, amitāyus-) ·â mjię d'â
2 'n'wγt'r' s'm myx s'm pwδ'y（上記參照）
3 'wt'nwr（上記參照）
4 cnp(')wδn (Dhy 212, 215): 閻浮壇 (Skt. jāmbūnada-, Pkt. jabodaṇa-) iäm b'iəu d'ân
5 cwδ'yk' (SCE 199) [c'wtyšk' (L93, 25)]: 樹提伽 (Skt. jyotiṣka-) źiu d'iei g'ia
6 cympwδ'y (STii 10, 53) [cnpwδβyp (Dhy 111, 119; P15, 26)]: 閻浮提 (Skt. jambudvīpa-) iäm b'iəu d'iei
7 δ'p't (SCE 186): 壇越 (Skt. dānapati-) d'ân jiwɐt
8 δ(')wt' (Dhu passim): 頭陀 (Skt. dhūta-) d'əu d'â
9 k'wy'ny (Dhy 115) [kwy'n' (STii 10, 53)]: 瞿耶尼 (Skt. godānīya-, Pkt. goyāna-, goyānīya-) g'iu ia ńi

10 kyδy' (SCE 2) [cf. zyt (Henning, 1940, 62)]: 祇陀 (Skt. jeta-) g'jię d'â

11 mnc'wyšyr(')y (Vim passim) [mncwšry (P5, P6, P8); mwnc(w)šry (P9)]: 文殊師利 (Skt. mañjuśrī-) mi̯uən źi̯u ṣi lji

12 p'r'myr (Kudara and Sundermann, 1988, 179, n. 20) [p'r(')myt (passim)]: 波羅蜜 (Skt. pāramitā-) puâ lâ mi̯ĕt

13 pk'β'm (passim): 薄迦梵 (Skt. bhagavat-) b'âk ka b'i̯wɐm

14 pwδ'y (passim): 菩提 (Skt. bodhi-) b'uo d'iei

15 pwrp'δyš (Dhy 113): 弗婆提 (Skt. pūrvavideha-) pi̯uət b'uâ d'iei

16 pwšp'δ'y (STii 10, 52): 弗婆提 (Skt. pūrvavideha-) pi̯uət b'uâ d'iei

17 sywpwδ(')y, sypwδy[38] (passim): 須菩提 (Skt. subhūti-) siu b'uo d'iei

上の例のうち，2，3，5，10，12，13，17が漢語形に基づいたものであることは異論がないだろう[39]。しかしそれら以外の形式については，若干の注釋が必要である。1の ''m(')yt' は文脈から明らかに阿彌陀佛を表しており，この如來の漢語の名前によってしかソグド語の形式は説明できない[40]。

4の cnp(')wδn について，Sims-Williams はプラークリット形に由來するとするが，彼自身が典據とする Brough の著書において，Brough 自身はプラークリット形に基づいた漢語形を仲介してソグド語に導入されたものだとしている[41]。筆者はこの Brough の考えに從った。同樣に，6の cympwδ'y を Sims-Williams はプラークリット形に由來するとしているが，Müller and Lentz は漢語形に基づいたものと考えている[42]。この語には梵語形に基づく cnpwδβyp が別に2種類の佛典で在證されている。一般にプラークリット形に由來する形式は，ソグド語に定着する傾向があるので，この場合1度しか在證されない cympwδ'y を定着形であるとは認め難く，漢語形をベースにした一時的な語形と見なした[43]。

δ'p't は漢語形とも梵語形とも著しく異なるが，梵語形を知らない譯者が，漢語の形式を參考にして考案した不完全な梵語形だと考えた。δ(')wt' は Skt. dhŭta- によく似ており，敢えて漢語形に由來するものと見なす必要はないようにも思われる。しかし，この語が現れる經典では，何故 δ(')wt' と呼ばれるかを説明する件 (Dhu 270–277) で，sry「頭」という語が引用されている。これは漢語の音寫形「頭陀」を前提にして初めて説明できるので，δ(')wt' は漢語形をベースにしたものと考えた。

9の k'wy'ny が漢語形の瞿耶尼に由來することは，Benveniste が指摘し Asmussen も支持している[44]。ただしこの場合，パーリ語形 goyānīya- との類似性から，これに似た形式を持つプラークリットから借用された可能性も排除できない。さらに厄介なことに，ソグド語には kwy'n' (STii 10, 53) という語形も知られている。しかもこれは k'wy'ny の場合と異なり，漢文原典の瞿陀尼の譯として用いられている。ただ k'wy'ny はともかく，kwy'n' の方が漢語形で

はなくプラークリット形に由來し，ソグド語に定着していた可能性を支持するのは，在證される漢語形（俱耶尼，瞿陀尼，瞿耶尼，俱伽尼[45]）は，どれも尼 ńi で終わり -n' とは一致しないこと，コータン語に借用された ggoyāna-[46] と，ウイグル佛典中に見られる gavyanadivip[47] から，中央アジアに goyāna- というプラークリット形が流布していたことが推測されることである。MacKenzie は k'wy'ny を kwy'n' のヴァリアントであるとみなし，どちらもソグド語に定着した形式であるとした[48]。從って彼は，k'wy'ny は漢語形に基づく形式とは認めていないことになる。筆者は k'wy'ny は，漢語の瞿耶尼をベースにしたものであり，kwy'n' の方はプラークリットから借用され定着していた形式と考える。

11の mnc'wyšyry は Vim に限定され特殊であり，mncwšry と比較して末尾の -šyry は漢語形を原語として想定すれば說明が容易である[49]。また -c'wy- の部分は，音譯漢字の殊 źju の介母 ị と主母音 u が融合して前舌の圓唇母音として發音されていたと考えれば，合理的に說明できるだろう[50]。

14の pwδ'y を菩提に基づくものと考えたのは，漢語の須菩提に由來することが分かっている sywpwδ'y の -pwδ'y と同一の形式であるからである。形式だけからなら Skt. bodhi- に由來するのか漢語形に基づいたものかの判斷は困難である[51]。

15の pwrpδ'yš についても，Benveniste は梵語形ではなく漢語形に基づくものとしている[52]。特に -p- は，漢語の婆 (b'uâ) によって容易に說明できる。一方語末の -š は，ソグド語譯者が弗婆提の原語に deśa- が含まれていると誤解したことによるのであろう[53]。MacKenzie はこの語形の原語として pūrvadeśa- を想定した[54]。しかしこの語は單に「東方の國」を意味するだけであって，sumeru- 山の東方の國である弗婆提 (pūrva-videha-) とは全く別の語である[55]。

MacKenzie はまた16の pwšp'δ'y は pwrp'δ'yš の corrupted spelling であるとし，pwrpδ'yš がソグド語に定着した形式だと考えている。一方 Müller and Lentz は，どちらの形式も容易に說明できないとして，その由來の究明を放棄している[56]。筆者は pwšp'δ'y も漢譯原典中の弗婆提の原語を知らなかった譯者が，漢語形をもとに誤った梵語形を復元したのではないかと考える[57]。少なくとも p' 及び δ'y は，婆提から簡單に說明できる。

上で收錄した語形の多くは，漢文佛典の飜譯に際して一時的に導入されたものであるが，中にはソグド語に定着したものもある。''myt', pk'β'm, pwδ'y 及び sywpwδ'y がその例である。何故これらの形式だけが，漢語を仲介してソグド語に導入されたかに答えるには，文化史的背景の考察が必要であろう。例えば，阿彌陀佛を表す ''myt' が梵語ではなく漢語形に由來する背景には，阿彌陀佛に對する信仰が中國で特別の展開をみせたことがあったのだろう[58]。

最後に僧侶の集團 (bhikṣu-saṃgha-) を意味する pwrsnk について述べておく。これが借用語であることには疑いがないが，その語源については檢討を要する。ウイグル語に bursang という同じ意味の語があり，問題のソグド語形と無關係であったとは考えられない。ウイグル語

形に關しては，漢語の佛僧に由來するとする說が有力である[59]。この說が正しいとすれば，ソグド語形も同樣に說明されるであろう。またウイグル語とソグド語との關係を考慮すれば，bursang は pwrsnk から借用された可能性が高い[60]。

bursang (<Sogd. pwrsnk) を佛僧 (b'i̯uət səng<*buddhasaṃgha-) からの借用とみなすことには，いくつかの問題がある。第一に佛は輕唇音を聲母とする文字なので，初頭には p- ではなく β- が期待される。無論この點は，漢語の側で輕唇音化が起こる以前に借用されたと考えれば問題がない[61]。第二に，語源として言及される漢語の佛僧も梵語の原語とされる buddha-saṃgha- も在證されない。ちなみに「僧侶の集團」を意味する梵語形は bhikṣu-saṃgha- である。

ソグド形 pwrsnk に對しては Bailey によって提案された語源がある。彼はコータン語の bilsaṃgga- 同樣 pwrsnk も bhikṣusaṃgha- に對應する中期インド語形に由來するものだとして，コータン語の -l- 及びソグド語の -r- は，-*ž- (<-*γž-<-*xš-<-kṣ-) によって說明されるとした。またソグド語形の母音 -w- は，ニヤ出土のカローシュティー文書中にみられる bhukṣu-saṃgasya のような，bhi- のかわりに bhu- を持つ中期インド語形に由來すると考えた[62]。

pwrsnk の佛僧語源說の問題點を考慮して，筆者は Bailey の說を採用することにする。殘る問題はウイグル語 burxan「佛陀」の語源である。bursang と同樣に burxan の bur も佛に由來するとする說が有力である[63]。つまり全體を「佛という王」を意味する複合語とみなす說である[64]。bursang の bur- と同じように burxan の bur- も，梵語の bhikṣu- に由來すると考えるか，或は從來通り burxan は漢語とトルコ語の複合語とみなすべきか，筆者には分からない[65]。ちなみにソグド語では「佛陀」に對して pwt- (<Skt. buddha) を用いており，burxan の語源を考えるうえで參考にならない。

6 マニ教文獻

マニ教文獻が書かれた絕對年代を決定することは困難である[66]。マニ教の布教史及びトルファンにおける資料のあり方から總合的に判斷して，8–11世紀，特に9・10世紀頃のものとするのが適當だろう[67]。マニ教ソグド語文獻中の漢語形は多くない。tyšyng（大乘）の例を除けば，すべて曆の斷片 (M115) からのものである。なおマニ教文獻にはソグド文字で書れたものの他に，マニ文字で表記されたものがある。下に引用する例では c'yδ'n 以外は，マニ文字によるものである。マニ文字の轉寫と音價の關係に關しては，附錄を參照されたい[68]。

tyšyng (BBB d 1): 大乘 d'âi dź'i̯ang

myw (M 115): 猫 mi̯äu

'yr (M 115): 乙 ·i̯ět

bw (M 115): 戊 mə̯u

jym (M 115): 壬 ńźi̯əm

kwy (M 115): 癸 kjwi

kyy (M 115): 己 kji

pyy (M 115): 丙 pi̯wɐng

syn (M 115): 辛 si̯ĕn

ṯyy (M 115): 丁 tieng

x̌'p (M 115): 甲 kap

x̌yy (M 115): 庚 kɐng

c'yδ'n (L 120): 齋壇 tṣăi d'ân[69]

6.1 マニ教中世ペルシア語文獻

トルファン出土のマニ教文獻中，中世ペルシア語で書かれた文書にも若干漢語形が見いだされる。これらの文獻は中世ペルシア語で書かれてはいるものの，實際にはこの地にいたソグド人或はトルコ人が書いたものである。從ってここでは，それらも收錄しておくことにする。ただしここで問題にするのは，M1（一般に Maḫrnāmag と呼ばれる）及び IB6371 (=TⅡD135) の2點だけである。どちらもマニ教經典の書寫の費用を喜捨した，東ウイグル可汗國の有力者の名前と稱號をリストした奥書の部分である[70]。M1 は保義可汗（808–821）の時代に書かれたものと考えられている[71]。一方 IB6371 は，牟羽可汗（759–779）の名稱を含んでおり，その時代に遡るであろう[72]。

2つの文獻中の漢語の要素は，稱號と人名に分類して收錄するのが便利である。稱號の多くは別に古代トルコ語文獻に在證されており，大概 Müller 自身よって比定されている。注意すべきは，これらが基本的にトルコ語に入った借用語であって，必ずしもイラン語の要素ではない點である。また人名の比定は極めて困難で，漢語の人名らしい響きのものをリストするにとどまる。

稱號[73]

''mγ' (M1, 112): 押衙 ·ap nga[74]

c'ngšyy (IB 6371): 長史 d̂'i̯ang ṣi

cygšyy (IB 6371; M1, 27): 刺史 ts'i̯äk ṣi

fwšyy (M1, passim): 副使 p'i̯ə̯u ṣi

fwṯwšy (M1, 76): 副都司？[75] p'i̯ə̯u tuo ṣi

p'nxw'n (M1, 106–7): 判官 p'uân kuân

s'ngwn (passim): 將軍 tsi̯ang ki̯uən

syl'ng (M1, 83): 侍郎？[76] źi lâng

syrtwš, syrṯwšyy (M1, 47, 73): 節度使[77] tsiet d'uo ṣi

ṯ'y (M1, 37, 47): 大[78] d'âi

ṯ'yšy (M1, 90): 大師[79] d'âi ṣi

ṯrx'n (passim): 達官[80] d'ât kuân

ṯwṯwγ (M1, 27), ṯwṯwx (IB 6371): 都督[81] tuo tuok

xwncwy, xwnjwy (M1, passim): 公主 kung tśi̯u

人名

''njyrkyy (M1, 113): 安日○ ·ân ńźi̯ĕt ＿

''nl'w (M1, 114): 安○ ·ân ＿

jym (M1, 90): 任 ńźi̯əm

l' (M1, 95): 羅 lâ

l'jyẖ (M1, 103): 羅○ lâ ＿

ly (M1, 103): 李 lji

lywk l'ṯ' (M1, 103): ○○○ ＿＿＿

lywl'ng (M1, 78): 劉○ li̯ə̯u ＿

p'wk (M1, 106): ○ ＿

p'ws'ng (M1, 122): 保藏 pâu dz'âng

syw syw (M1, 139): 繡繡 si̯ə̯u si̯ə̯u

ṯ'ng (M1, 94): 唐 d'âng

ṯsw (M1, 83, 106): 曹 dz'âu

w'syndn (M1, 122): ○○○ ＿＿＿

ここに提案した人名の漢字の比定はどれも試案の域を出ず，すべてに疑問符（？）を附すべき性質のものである。これらのうち p'ws'ng の漢字形は Müller によって提案された[82]。syw syw には sndws という人名が先行している。sndws は「絹（或は錦）の着物」を意味するので[83]，高田時雄氏の示唆に従って，繡繡に比定した。上にはあげなかったが，M1, 46–47 にみられる qwnkyy (ṯ'ys'ngwn syrtwš) は配列から判断して，漢語である可能性がある。また p'x (M1, 66) や cwngwy (M1, 109) も漢語かもしれない。なお，Müller が漢語の名前かもしれないと考えた šymgwn (M1, 83) は，Sims-Williams によってセム系の名前であるサイモンであることが明らかにされている[84]。

7 キリスト教文獻

キリスト教ソグド語文獻の絶對年代についても不明である。出土地である Bulayïq にあったキリスト教の僧院では，近世ペルシア語の文獻も殘されており，このこととトランスオクシア

ナへのキリスト教の傳播を考慮すれば，マニ教文獻同様8-11世紀，特に9・10世紀のものと考えられるだろう。敦煌出土のキリスト教ソグド語文獻や，Bulayïq の出土の文獻にみられるトルコ語の要素もそのことを支持するだろう(85)。

漢語の借用語としては，次の2語が知られている。上で述べたように，これらはソグド語に定着した語彙であった。キリスト教文獻のほとんどはシリア文字で書かれており，下の2語も同様である。ソグド語を表記するシリア文字の音價については，附錄を參照されたい。

tym (STi 36: 2, 5): 店 tiem

p'n (STi 49: 1): 板 pwan(86)

8　敦煌出土の漢語の數詞

敦煌出土のチベット語文書 Pelliot tibetain 1895A 及び同1689の裏面には，1から30までの漢語の數詞がソグド文字で表記されている。ただし9及び10の部分は完全に破損していて，その形式を回收することができない。この文書は Hamilton によって詳しく研究されている(87)。Hamilton は用いられた字體が10世紀のソグド語及びウイグル語文書のそれと似ていることを指摘しているので，これを10世紀前後の文書と考えて差し支えないであろう。

奇妙なことにこの數詞の表では，1から8までの數字の末尾に漢語では説明できない要素の -' (') が附加されている。これはソグド文字によるソグド語の數詞の表記に影響された裝飾的な要素だとする説と，日附を表す漢語の數詞に序數詞を名詞化するソグド語の接尾辭が附加されたものだとする説がある(88)。いずれにせよソグド語の影響であると考えられていて，その考えは正しいであろう(89)。

しかしこの文書がソグド人によって書かれたかどうかについては，即斷できない。最近9-10世紀頃のものと考えられる，敦煌出土のソグド語文獻がいくつか發表された。これらを發表した Sims-Williams and Hamilton によれば，そこには古代トルコ語の強い影響がみられ，當時の民族融合の結果であるという(90)。ソグド語の古代トルコ語に對する威信 (prestige) を考慮すれば，ソグド語使用者がトルコ語の要素を導入したというより，トルコ語を母國語とする人間がソグド語を使った結果とみなす方が適切であろう。ここで問題にする文書も，これらの文獻と同様に，文章語としてのソグド語に精通したトルコ人によるものと考えるべきではなかろうか。Ⅲ章でも論じるように，漢語の日母 (ńź-) を š- で表記するという一見奇妙な事態も，トルコ語の影響と考えれば説明できるが，ソグド語を母國語とする話者によるものと想定した場合には，説明が困難である。

下に Hamilton の飜字を引用する。ただしここでは一般的なソグド文字の飜字法に從って，s と š を區別しておいた。また破損部の表記法も，彼のものを改め，(丸括弧) は部分的な，[角括弧] は完全な破損部を表すものとした。

'yr'	: 一 ·i̯ĕt
šy'	: 二 ńźi
s'm'	: 三 sâm
s[y]''	: 四 si
γwβ'	: 五 nguo
lwk'	: 六 li̯uk
syr'	: 七 ts'i̯ĕt
(p'r')	: 八 pwăt
(š)[y](p 'yr)	: 十一 źi̯əp ·i̯ĕt
šym šy	: 十二 źi̯əp ńźi
šyp s'm	: 十三 źi̯əp sâm
šyp zy	: 十四 źi̯əp si
(š)ym γwy	: 十五 źi̯əp nguo
(šy)m (l)yγ	: 十六 źi̯əp li̯uk
šyp (c)yr	: 十七 źi̯əp ts'i̯ĕt
šyp p'r	: 十八 źi̯əp pwăt
šyp kyw	: 十九 źi̯əp ki̯ə̯u
šyšyp	: 二十 ńźi źi̯əp
šyšyp 'yr	: 二十一 ńźi źi̯əp ·i̯ĕt
šyšym z-y	: 二十二 ńźi źi̯əp ńźi
šyšyp s'm	: 二十三 ńźi źi̯əp sâm
šyšyp sy	: 二十四 ńźi źi̯əp si
šyšyp γw	: 二十五 ńźi źi̯əp nguo
šyšyp lwk	: 二十六 ńźi źi̯əp li̯uk
šyšyp syr	: 二十七 ńźi źi̯əp ts'i̯ĕt
šyšyp p'r	: 二十八 ńźi źi̯əp pwăt
šyšyp kyw	: 二十九 ńźi źi̯əp ki̯ə̯u
s'mšyp	: 三十 sâm źi̯əp

9　焉耆出土の木簡

黄文弼『新疆考古發掘報告』北京（1983）圖版27には焉耆明屋溝北遺址出土の木簡2點を掲載している(91)。これらは2點とも送り狀のようなものと思われるが，中に2語漢語らしいものが含まれている。これらは字體から判斷して10世紀頃のものと考えられる。

c'ntsy (a recto 2): 盞子（？）tṣǎn tsi

tswn (b verso 1): 寸（？）tsuən

10　その他

ロシア科學アカデミー東洋學研究所ペテルブルグ支部が所藏するソグド語の2斷片(L47+48)は，藥學文獻の斷簡である。そこにはšnkという單位が見いだされる。これは漢語の升śjəngからの借用語であると考えられている[92]。またベルリンにあるソグド語とウイグル語の對譯語彙中のpylyrは，漢語の篳篥pi̯ĕt li̯ĕtに遡るとされる[93][94]。

Ⅱ　ソグド文字で表記された漢文佛典

1　金剛五禮

1.1　漢文テキストの校訂

舊西ベルリンの國立圖書館 (Staatsbibliothek) が保管するトルファン文書のうち，Mainz 160[1] 及び Mainz 624 は，同一の貝葉本の斷片で兩者は接合することが可能である。本來の分類番號TIDから察すると，ドイツ・トルファン探檢隊が第1回の探檢（1902–3）の際に高昌故城において發見したものである。Mainz 160 の方は極小斷片で，Mainz 627 の右端の一部にあたる（寫眞版參照）。文書のサイズは，ソグド文字を横書きとみて，横 25.0 cm，縱 12.0 cm である。

この寫本は正書體 (formal script) のソグド文字で書かれてはいるが，內容はソグド語ではなく，漢文佛典をソグド文字によって音寫したものである。筆者は音寫された佛典が，現在は敦煌出土の寫本にのみ殘されている禪宗文獻の一つの『金剛五禮』[2]であることを發見した。ただし，この佛典は表の第2行で始まり，裏の第7行で終わっており，殘りは別のテキストである。おそらく，『金剛五禮』を含む他の敦煌文書と同樣に，この貝葉本も禪宗文獻を集めた連寫本の一部であったのであろう。

音寫本のテキストを提出する前に，敦煌出土の『金剛五禮』の漢文寫本を校訂し，クリティカルテキストと，寫本の系統圖を提示しておく。『金剛五禮』を含む漢文寫本には，筆者の調査した範圍では次の12點が存在する：S1674, 4173, 4712(以上スタイン本), P2975, 3559(=3664), 3645, 3792, 4597（以上ペリオ本），鳥29，乃74，衣37（以上北京本），Φ176（レニングラード本）。

テ キ ス ト

0. [a]金剛[b]五禮[cd]
1. 一心[e]敬禮清淨眞如無[f]去無來[g]不生不[h]滅
2. 寂然常住[i]湛[j]意[k]恆安[l]千佛共尊[m]十方同境[n]
3. 恆沙功德[o]非色非心[p]南無[q]法身[r]釋迦牟尼
4. 佛[s]
5. 一心[t]敬禮毗盧遮那[u]千葉[v]蓮[w]華四智[y]珍[z]寶
6. 德[aa]山無[bb]極[cc]願[dd]海無邊[ee]積行[ff]三[gg]祇[hh]累[ii]功十地
7. 廣[jj]照[kk]法界體[ll]滿虛空南無[mm]報[nn]身[oo]釋迦牟尼
8. 佛[pp]
9. 一心敬禮如來生[qq]地雪山之[rr]北香山之[ss]東
10. 城[tt]號迦維[uu]姓釋迦氏[vv]父[ww]名淨飯[xx]母[yy]號[zz]摩[A]耶
11. 十九出家三十成[B]道南無[C]化身[D]釋迦牟尼
12. 佛
13. [E]一心[F]敬禮[G]金剛般若[H]波羅蜜多微妙甚深[I]
14. 生諸佛身[J]滅凡夫罪無人無我聲空色空[K]
15. 苦[L]惱蓋纏[M]因茲[N]永息[O]南無金剛[P]般若波羅
16. 蜜多甚深法藏
17. [E]一心[Q]敬禮舍[R]衞城南[S]須[T]達[U]園中祇陀林下
18. 如來精舍[V]衆聖[W]禪房[X]於此[Y]伽藍[Z]說斯[AA]般[BB]若
19. 我今恭[CC]敬憶[DD]念世[EE]尊南無金剛[FF]般[GG]若波羅
20. 蜜多[HH]甚[II]深[JJ]法藏

ヴァリアント

a. 姚和尙（金剛…）：P3559；金剛五禮→ナシ：S1674

b. 光：P2975，3792

c. （…五禮）文：P3559，3645，4957；（…五禮）讚：P2975；（…五禮）一本：鳥29；（…五禮）本：P3792

d. 一心奉敬：P3792

e. （一心）滿：S4173，4712，鳥29，乃74，Φ176

f. なし：P3792

g. （無來）寂（不生…）：P4597

h. ナシ：P3792

i. 信：P4597

j. 但：S1674，4712，P3559；堪：P3645；滔：P3792

k. ナシ：S4712；矣：衣37；（堪意）虚空：P3645

l. 然：S1674

m. 遵：S1674，P3559，衣37

n. 行：S1674；敬：P2975，3792，4597，鳥29，衣37；意：P3559；同境→化佛：P3645

o. 得：P3645

p. 非色非心→非心非色：P3645

q. （南無）清淨：P2975，3645，3792，鳥29，Φ176

r. 法身→身：P3645；本師：S1674，P3559，衣37；（法身）同名：P2975

s. 釋迦牟尼佛→毗盧遮那佛：Φ176

t. （一心）滿：鳥29

u. （…遮那）佛：S1674，4173，P3645；毗盧遮那→盧遍那：P3792

v. 業：P2975；乘：P3559

w. 連：P2975

y. 枝：P3645，3792，鳥29

z. 眞：P3792

aa. 得：S1674，P3559，3645，3792，衣37

bb. 望：P3645，鳥29

cc. 敬：P2975；境：P3645；遊：P4597；邊：衣37

dd. 湧：S1674；願→頂用：P3559；願海無邊→ナシ：衣37

ee. 込：P3559

ff. 積行→借幸：P3792

gg. 二：P3792

hh. 歸：P2975

ii. 壘：S1674；累功→敬禮剛：P2975；累功→理廣：P3792

jj. 光：P3559，3792，衣37

kk. 充：S1674，P3559，衣37；超：S4173，4712，P3792，鳥29；起：P4597，乃74，Φ176；胎：P2975

ll. 聽：P3792；體滿虚空→ナシ：P3645

mm. （南無）圓滿：S4173，P2975，3645，3792，鳥29，乃74

nn. 寶：S1674，4712，P2975，3645，3792，鳥29，乃74

oo. （…身）本師：S1674，P3559，衣37；（…身）同名：S4173，P2975，乃74

pp. 釋迦牟尼佛 → 盧舍那佛：Φ176

qq. 十：衣37

rr. 至：S4173，鳥29，乃74，Φ176

ss. 至：S4173，鳥29，乃74

tt. 成：S1674，P3559，3792

uu. 惟：P3559；衞：鳥29；迦維 → 加爲：P2975；迦維 → 加盈：P3792

vv. 姓釋迦氏 → ナシ：S4173，P2975，3645，3792，4597，鳥29，乃74，Φ176；姓釋迦氏 → 姓示釋迦：P3559

ww. 少：P3645；父 → 母火：P3792

xx. 淨飯 → 淨梵：P2975；淨飯 → 諸梵：P3792

yy. 母 → ナシ：P3792

zz. 越：S1674；日：P3559；名：P3645

A. 磨：S4173

B. 城：P2975

C. （南無）千百：P2975，3645，3792；（南無）千百億：鳥29，Φ176

D. （化身）本師：S1674，P3559，衣37；（化身）同名：P2975，3645，3792，鳥29，Φ176；化身 → 佛身：乃74

E. 衣37では，2つのセクションの順序が逆になっている。

F. （一心）滿：鳥29

G. 禮 → ナシ：P3792

H. 金剛般若 → 微妙金剛般若：S1674，P3559；金剛般若 → 甚深妙法金剛般若：衣37；金剛般若 → 金光不若：P3792

I. 微妙甚深 → ナシ：S1674；微妙甚深 → 不可思議：P3559，衣37

J. 生諸佛身 → 生活化身：P3559；生諸佛身 → 生諸寂：P3645

K. 色空 → ナシ：P2975，3792

L. 煩：P3645

M. 故：P3792

N. 慈：P2975，鳥29；資：P3559

O. 寂：S4173，P3645 (?)，4597，鳥29，乃74，Φ176；永息 → 如誦：P2975

P. 金剛 → ナシ：S1674，P3559，衣37；金光（若！）：P3792

Q. （一心）滿：鳥29

R. 捨：P3792

S. 男：P2975；南→ナシ：P4597

T. 失：P2975；悉：P3792，鳥29

U. （須達）陀：P3645

V. 捨：P3792；如來精舍→ナシ：P3645

W. 衆聖→聖衆：S1674，P3559；世衆：P3645；種善：P3792

X. 堂：P3792

Y. 於此→於彼：S1674，P3559；於此→因此：P2975；於此→如來依此：P3792

Z. 伽藍→ナシ：S4173，P2975，3645，3792，4597，鳥29，乃74，Φ176

AA. 思：S1674，P3559；此：P2975；欺：P3972

BB. 不：P3792

CC. 共：S1674，P3559

DD. 追：S1764；退：P3559

EE. 聖：鳥29

FF. 金剛→ナシ：S1674，P3559，衣37；金剛→金光：P2975，3792

GG. 不：P3792

HH. 多→ナシ：P3792

II. 其：P4597

JJ. 深→ナシ：P3792

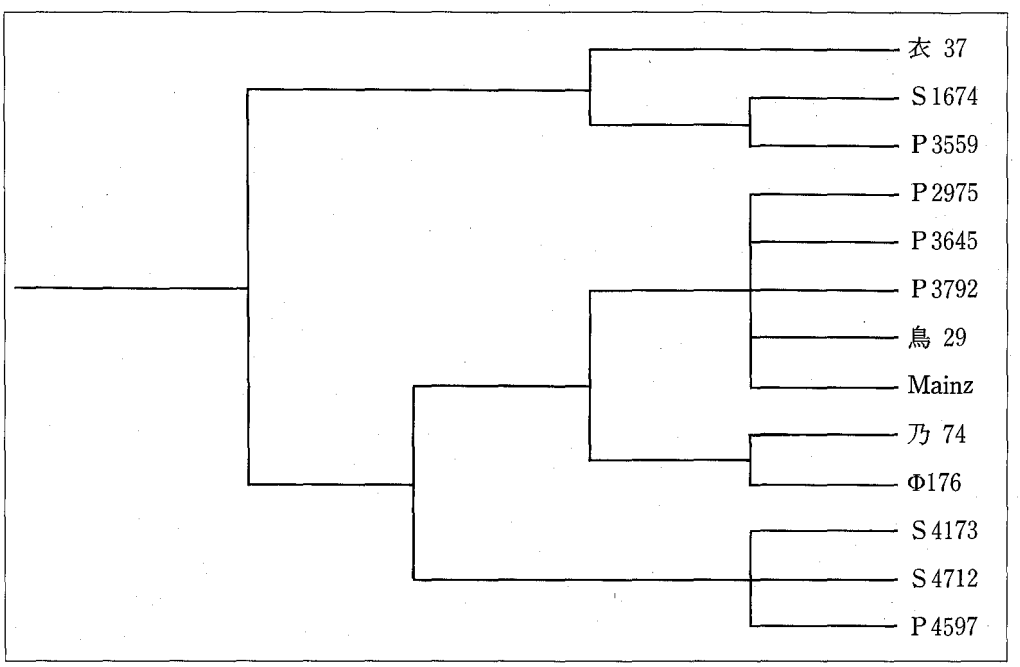
寫本の系統圖

『金剛五禮』のこれらの12種の寫本は，テキストの異同をもとに，いくつかのグループに下位分類することができる。まず r，oo，D で「法師」を持つ3寫本，S1674，P3559，衣37を一まとめにすることができる。このグループは，殘りの寫本と（ア）m で「遵」を持つ，（イ）P，FF で「金剛」を缺く，（ウ）Z で「伽藍」を持つ，（エ）vv の一句を持つ點で異なっている。このグループはまた kk で共通して「充」を示す。S4712 は最初の3分の一程度しか殘っていないが，kk で「充」ではなく「超」を持つので，これら3寫本と同じグループには分類できない。

これらの3寫本の中では，衣37が H，Y で他の2つとは異なる。また最後2つのセクションの順序がこの寫本だけ逆になっている。一方で，vv では P3559 が，I では S1674 が他の2つと異なっている。從って，衣37が他の2つと異なる點は多いものの，後者を衣37と對峙させるべきかどうかに關しては疑問が殘る。

殘りの9寫本では，P2975, 3645, 3792, 鳥29の4つが共通した特徴を示す，q, mm, nn, C, D 參照。乃74と Φ176 はこのグループと似た特徴を持つが，すべての點で一致するわけではない。特に Φ176 は，s と pp で他の11寫本と異なっている。殘りの S4173, 4712, P4597 については，他の寫本とは特に密接な關係を示さない。

上述したことをまとめて，下に寫本の系統圖を示す。下に示すテキストから明らかなとおり，Mainz160＋Mainz624（以下に Mainz と畧す）は，P2975, 3645, 3792, 鳥29のグループに屬するので，ここでは便宜的上この寫本も系統圖の中に加えておいた。



1.2　Mainz の校訂

下に Mainz のテキストを提示する。テキスト中の［角括弧］は完全な破損部を，（丸括弧）は文字の一部が殘っていることを示す。（……）は，文字の殘畫から推定される字數を表す。便宜のために行間に對應する漢字を添えておいた。對應する漢字の認定には，上掲のクリティカルテキストとヴァリアントを參考にした。なお補助記號を附けた k 及び r は，各々文字 k 及び r に下に文字 r に似た小さな文字が添えてある。

Marginal text

0　w'šw^{a}
　和尙？

Recto

1 [ ](.)my xw ṛy [ ]
? ? ?

2 (.)[’](ys)[ym kyṛy tsy tsy cy]n (ẓ)w βw kw βw (ṛ)[’y]
一心 敬禮 清 淨 眞 如 無 去 無 來［不生不滅寂然］

3 šw cw[ ](. .)tsw šy βw (t)wnk (k)[ ]
常 住 ［湛意恆安千佛共］ 尊（？）十 方 同 境［恆沙］

4 xwnk t’k[n’m](w tsy) tsy β’p šyn (t)[wnk my š’k’]
功 德 ［非 色 非 心 南］無 清 淨 法 身 ［同 名 釋迦牟尼］

5 βr ·· ’ysym^{b} [kyṛ]y p(y)[tsy](n) yyp ṛyn xw[’]
佛 一心［敬］禮 毗［盧遮那千］ 葉 蓮 華［四智珍寶］

6 t’k š’n βw kyk ḳwyn x’y βw pyn tsyk xy s’m ḳy (ṛwy) [xwnk šyp ty xw]
德 山 無 極 願 海 無 邊 積 行 三 祇 累 ［功 十 地 廣］

7 β^{c} cyw β’p x’y ty m’n kw ẍwnk n’mw w[y]n m’n p’(w š)[yn š’k’]
照 法 界 體 滿 虛 空 南無 圓 滿 報［身 釋迦 牟尼佛］

8 ’ysym [kyṛ]y ẕw ṛ’y šy ty swyr š’n cy p’k[ ]
一心［敬］禮如 來 生 地 雪 山 之 北［香山之東城號］

9 ẍ’ wy βw (m)[y t](s)y β’m^{d} pw my p’y’ šyp (ky)[w]
迦 維 父 名 淨 梵 母 名摩耶 十 九［出家三十成道］

Verso

1 n’mw tsyn (p’)[x?]ny^{e} xw’ šyn twnk my š’k(’)[ ]
南無 千 百 ? 化 身 同 名 釋迦［牟尼佛一心敬禮］

2 kym ẍw [p’ẕ]’ p’ṛ’ pyr t’ šym šym β(wy)[^{f}]
金 剛［般若］波羅蜜多 甚 深 微［妙生諸佛身滅］

3 β’m βw tswy βw γ’ βw ẕyn šy ẍwnk š’k ẍwnk[ ]
凡 夫 罪 無我 無 人 聲 空 色 空［苦惱蓋纏因茲］

4 wy syk n’mw kym ẍw p’ẕ’ p’ṛ’ pyr t’ šym šym β(’p)[tsw ’ysym]
永 息 南無 金 剛般若波羅 蜜 多 甚 深 法［藏 一心］

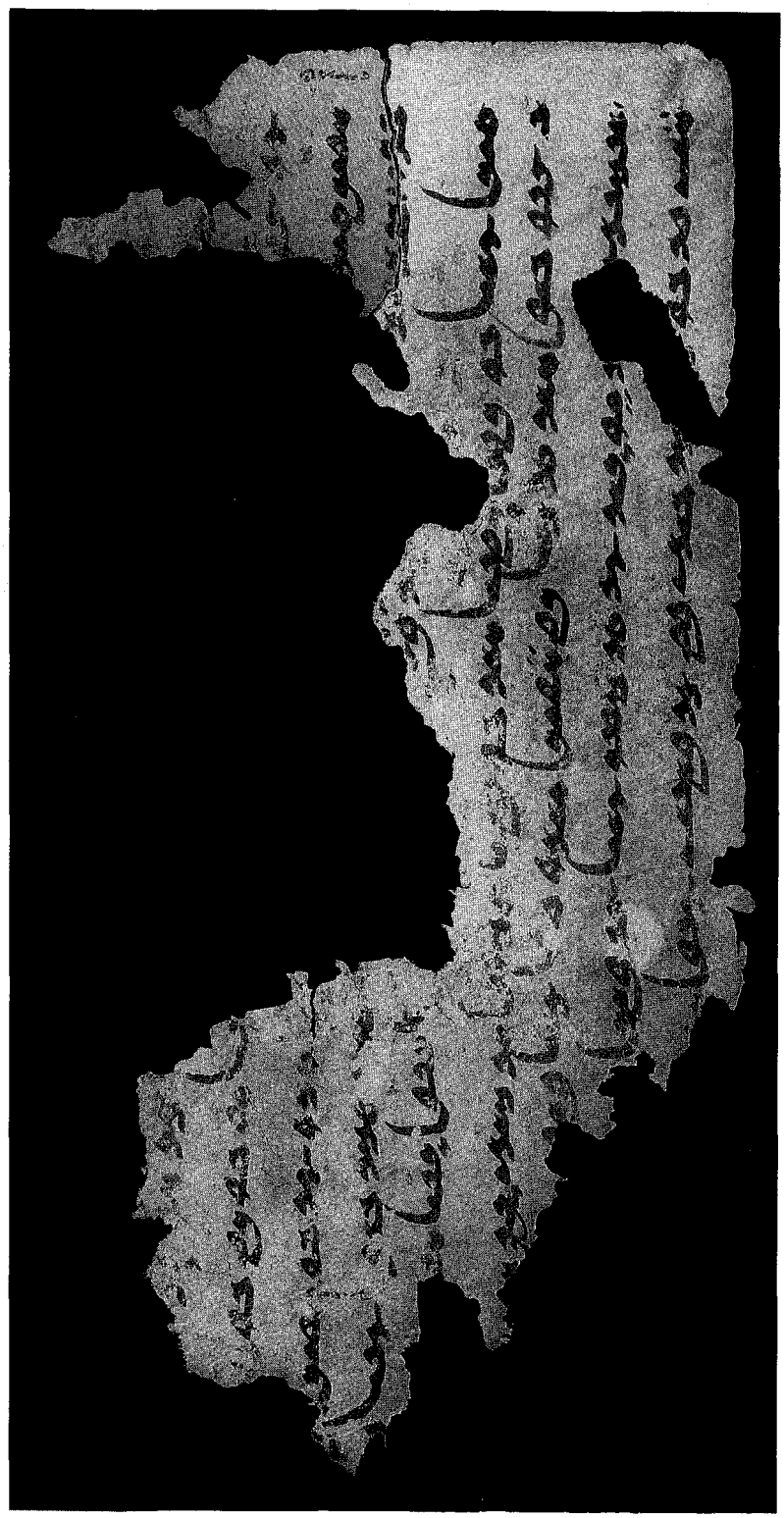
5 kyṛy š’wy šy [n](’)m sy[w cwn]k ky t’ ṛym x(’)[ ]
敬禮 舍衞 城［？？］ 南 須［ 達 園 中］ 祇 陀 林 下［精舍禪］

6 βw ẕw ṛ(’)[y šwyr]sy p’ẕ’ p’ṛ’ p(y)[r t’ šym]
房 如 來 ［於 此 伽 藍 說］斯般若波羅 蜜 多 甚

7 šym β(’)[p š]y tswn ẍ(’)[y n’]mw kym[ẍw]
深 法［藏 我 今 恭 敬 憶 念 世］ 尊 ? 南無 金［剛］

8 p[’ẕ](’ p)[’ṛ’ pyr t’ šym šym β’p tsw]^{g} t’w cw ky(m)[ ]
般若 波［羅 蜜 多 甚 深 法 藏］ 道 場 金 ［剛］

9 [ ]x’[ ](.) nk (t)y xw(nk) [ ]
? ? ? ?



[a]Mainz 160 の右端に小さく書かれている；[b]βr··'ysym の部分は，2つの斷片の接合部に當り，讀みは必ずしも確なわけではない；[c]β'p を書こうとして誤りに氣附き β だけを書き，次に正しい cyw を書いた。その際 β を消し忘れたもの；[d]「飯」ならば β'n が豫想される。ヴァリアント「梵」を參考にした；[e]或いは wy；[f]β('y) とも讀める；[g]t'w までは空欄である。ここで『金剛五禮』が終わったことを示すのだろう。

2　So 14830 (＝T II Toyoq 1)

この寫本（以下にTⅡTと畧す）は，正書體のソグド文字で音寫された7行のテキストと，各音寫形の右側に後で書き添えられた漢字からなる。文書のサイズはソグド文字を横書きとみて，横 28 cm，縱 9.5 cm である。ただし實際にはソグド文字は縱書きされていたらしく，添えられた漢字は縱に書かれている。漢字の佛典は『大乘起信論』からの引用を含んでいるものの，テキスト全體を比定することは今のところできていない。この文書に關しては，百濟康義と Sundermann による共同研究が豫定されており，テキストの校訂などはそれに讓ることにする。ただしこの資料は，ソグド文字表記の漢字音を研究する上では必須のものなので，下記の表中に別に欄を設けておいた。この文書から回收される漢字音については附錄も參照されたい。なおこの寫本では非常に多くの補助記號が用いられているので，それらを說明しておく必要がある。下にそれらを列擧する：

(β)：β の下に補助記號を附けた文字は他でも知られており，有聲音 [β] と區別して無聲音 [f] を表す[3]。

(x̣)：x 或は γ の下に補助記號を附けた文字は，ソグド語文獻では Nīlakaṇṭha-dhāraṇī にみられる[4]。そこでは梵語の h が x 或は x̣ で表記されている。梵語の聲門摩擦音の h を表すには，軟口蓋摩擦音に對應する文字 x では不都合と考えて，補助記號を附けたのであろう。ただしこの補助記號を終始一貫して使うことはなかったようだ。一方ウイグル文字でも文字 x (＝q) の上に1點ないし2點を附けた文字や，x の下に1點を附けた文字は知られている[5]。この文字は有聲音 [γ] と區別して無聲の [x] 或は [q]（軟口蓋の閉鎖音）を表す場合と，摩擦音 [γ] 及び [x] と區別して無聲の閉鎖音を表す場合があったようだ[6]。本資料では，摩擦音と區別して特に閉鎖音を表していると考えられる。詳しくは下記Ⅲ章參照。

(k)：文字 k の上に補助記號（2點）を附けた文字は P26 に在證される。これは有聲音と區別して無聲音 [k] を表すものと考えられている[7]。しかし本文書では逆に有聲音を示している。

(ḳ)：文字 k の下に補助記號を附けた文字は他では知られていない。閉鎖音を表すことは確かだが，その實態は必ずしも明確ではない。筆者の解釋については下記參照。

(p)：文字 p の下に補助記號を附けた文字も，他では知られていない。この文字の正確な

音價も明らかではない。なお下記參照。

(ṗ)：文字 p の上に補助記號を附けた文字は，他でも知られている。ただしこの場合には2種類の發音がある。一つは，マニ教文獻に見られるもので，文字 p の上に1點或は2點を施して [f] を表す[8]。もう一つは，佛典に1例在證される。文字 p の上に1點を施したもので，有聲閉鎖音 [b] を示す[9]。本文書のものは明らかに後者と同じで，有聲閉鎖音 [b] を表している。

(ṛ)：文字 r の下に補助記號（ここでは小さく書かれた文字 r）を附けて [l] を示すことは，ソグド文字でもウイグル文字でも普通に行われることで問題がない[10]。

(y)：文字 y の下に補助記號を附けた文字は他では知られていない。どのような音價を持つか明らかではない。

(ẓ)：文字 z の下に補助記號を施した文字は，[n] と區別して [z, ž] を示す場合と，[n] 及び [z] と區別して [ž] を表す場合がある[11]。この文書では日母を表記するために用いられ，この聲母は8世紀には [ž] と發音されていたことが知られているので，後者の場合だと考えられる。

3　その他

上で扱った2點以外にも，ソグド文字で表記された漢文佛典は知られている。大谷探檢隊將來の1點は既に紹介した[12]。その他にも若干の斷片が見つかっている。筆者に知られているのは次のとおりである：

(1) ドイツ・トルファン探檢隊將來

So 10675 (＝ MIK197 ＝TID): 26.0 cm×11.0 cm の貝葉本（接合可能な2斷片からなる）。表裏各9行ずつ。漢文佛典の比定はできていない。

(2) 大谷探檢隊將來

西域文化資料 Nos. 1123, 1129, 2135, 2803a, 5735, 5746, 5747, 5758：これらはすべて小斷片で同一文書の離れである。表は正書體のソグド文字で書かれた佛典で，その紙背を利用したものである。どちらも原典の比定はできていない[13]。

Ⅲ　ソグド文字で表記された漢語の發音

1　表の說明

ここでは，上のⅠ・Ⅱ節で收錄された漢語の表記を整理し，その背後にある漢語の發音の問題を扱う。整理に際しては，Ⅰ・Ⅱで收錄したもの以外に，『慈恩傳』のウイグル語譯中にみえる漢字音も參考にすることにした。ウイグル文字で表記された漢字音は，資料の時代や地域

が類似するだけでなく，文字體系が基本的に同じであることからも，當然參考にすべきものである。實際下でも明らかになるとおり，『金剛五禮』の中の漢字音寫形は，基本的にウイグル文字で表記されたものと同じである。

ウイグル語文獻は，公表されたものだけでも膨大な量にのぼり，それらの中の漢語形を網羅的に扱うことは，筆者のような門外漢には不可能である。幸いウイグル語文獻中の漢字音については，D. Sinor, B. Csongor，庄垣内正弘，高田時雄，G. Kara による專論があり，それらによって大約は把握できる(1)。特に庄垣内のものは，漢語の要素を多く含む『慈恩傳』のウイグル語譯中の漢字音を，未發表の部分まで含め，文字轉寫の形で提出しており，ソグド文字による音寫形との比較を容易にしてくれる(2)。下の表の中に提出したのは，この庄垣内の研究から引用したものであり，筆者自身が寫本にあたって讀みを確認する作業は行っていない。ただしソグド文字表記との比較を容易にするために，彼の飜字の b, d, q, v を各々 p, δ, x, β に改めた(3)。また誤植と考えられるものは，表の中には含めていない。この點については下のⅣ章の說明も參考にされたい。

下にソグド文字で表記された漢字音を整理した表を示す。表は漢語の音韻研究の一般的方法にならって，聲母及び韻母の順に配列してある。準據した中古音は，『切韻』の反切によって Karlgren が再構したものである(4)。ただし Karlgren の再構形では區別されていないが，輕唇音と重唇音の別は重要なので，本稿では兩者を別々に扱った。

この種の資料を扱う場合，時代や地域を考慮すれば，むしろ 8 世紀後半の長安音に基づいたとされる『慧琳音義』(783–807年撰述）の反切から推定される韻母の體系や，9–10世紀の敦煌で書かれたチベット文字表記の漢文文獻をもとに，羅常培や高田時雄が再構した當時の敦煌における發音と比較すべきかと思われる(5)。しかしこれら後の時代の發音は，基本的に『切韻』の體系から組織的な變化を經て成立したものと考えられ，我々の資料もそのような『切韻』以後の變化を知る手がかりになるものなので，敢えて『切韻』の體系に準據して整理した。もちろん必要に應じて，Karlgren の再構形に對する修正や，これら後の時代の發音に言及することにする。

表についての注釋では，ソグド文字による漢字音の音寫形を，ソグド文字の音價や當時の漢字音を參考にして說明する。注は原則として TⅡT 及び Mainz に對するものであるが，Ⅰ章で收錄したものについても言及する。ただしⅠ章で扱った漢字音は時代の點でも，表記の面でも均質性を缺くことには留意されたい。

2 聲母

2.1 重唇音（表 1）

幫 (p)，滂 (p') 及び並 (b') 母には等しく文字 p が用いられている。ソグド文字では，閉鎖音

表1

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
幇 p	謗 p'nk 不 pr	般 p' 波 p' 報 p'(w) 北 p'k 百 (p')[x] 邊 pyn	芭 p'(5)* 板 p'n(5) p'n(7) 丙 pyy(6) 八 p'r(8) (p'r')(8)	百 pyx 本 pyn 碑 py
滂 p'	怖 pw		屁 py(5) 判 p'n(6.1)	破 p'
並 b'	薄 'p'x 菩 pw	毗 p(y)	菩 pw(5)	婆 p' 蒲 pw 毗 py
明 m	明 m'ynk	滿 m'n 名 my	藐 myx(5) 鵡 m'w(5) 墨 mk'(5) 木 m'wx(5) 猫 myw(2, 5, 6)	門 myn 銘 my 明 my
	滅 'nṗ'yr 魔 'nṗ' 昧 'nṗ'y	摩 p' 母 pw 蜜 pyr	戊 bw(6)	馬 p' 戊 pw 摩 p'

*( )中の數字は，Ⅰ章のセクション名を示す。以下同様。

について，有聲・無聲及び有氣・無氣を區別することができないので，この表記からこれらの聲母が當時互いに區別されていたかを推定することはできない。ただ下でも述べるように，TⅡTでは明母の脱鼻音化により發生した有聲閉鎖音をṗで表記しており，このことから並母が有聲音ではなかったことが推測される。また摩擦音では全濁音の無聲化は明瞭である上に，8世紀後半以降の他の資料でも全濁音は無聲化しているので(6)，この資料でも全濁の閉鎖音は無聲化していたと考えられる。

不は『廣韻』の反切に從えば輕唇音化するはずであるが，TⅡT の表記は明らかに重唇音あることを示している。同様の現象はチベット文字資料及びブラーフミー文字資料にも見られる(7)。

TⅡT の怖 pw 及び薄 'p'x にみられる表記 p と 'p の意圖する音價は不明である。前者は有

氣音を聲母とする文字なので，有氣性を表そうとしたものとも考えられるが，他の有氣音聲母には類似の補助記號は見られない[8]。'p に關しては，群母の字である懃 'kyn に類似の表記が見られる。薄も懃も全濁音なので，全濁音がまだ他の聲母に完全に合流していなかったことを示すものかもしれない[9]。ただし全濁音聲母においても例外的な事例であることは強調しておかなければならない。

明母は，TⅡT では m- と 'nṗ- によって，Mainz では m- と p- によって音寫されている。これは唐代の長安及び西北地方で起こったいわゆる脱鼻音化現象の現れである。この變化では，鼻音の聲母 m-, n-, ŋ- は弱い鼻音の入りわたりを持った有聲閉鎖音 (^{m}b-, ^{n}d-, ^{ŋ}g-) に變化した。ただし鼻音を韻尾に持つ字では，逆行同化によって鼻音性が保持されることが多かった[10]。TⅡT の 'nṗ- は明らかに鼻音の要素を殘している[11]。さらに補助記號によって，有聲の閉鎖音を區別して表記しようとしている。一方 Mainz では，ウイグルと同樣文字 p- だけを用いる。これは有聲閉鎖音 [b] を表したものと考えられ[12]，鼻音要素を失っている點で TⅡT より發展した段階に屬している。m- で表記されるのはどちらの資料でも，後に鼻音が續く場合である。これもウイグルやチベット文字資料と一致する[13]。

その他の欄の戊 bw は，[p] と [b] を區別できるマニ文字による表記であり，正しく有聲音で

表 2

	TⅡT	Mainz	そ の 他	ウ イ グ ル
非 f	誹 βy 方 β'nk	法 β'p 方 βw 夫 βw 父 βw		坊 βw 府 βw 封 βwnk
敷 f'			副 fw(6.1)	
奉 v	佛 βr	佛 βr 梵 β'm 凡 β'm 房 βw		馮 βwnk 輔 βw 符 βw
微 ŋ	文 βn 網 β'nk 微 βy	無 βw 微 β(wy) 無 mw		文 βyn 武 βw 無 βw 問 βyn

あったことがわかる。m- で表記されたものは，どれも脱鼻音化以前に導入された借用語と見なすことができる[14]。ただし藐 myx は梵語音譯語中の例であり，脱鼻音化の考察の對象にはなり得ないだろう。

2.2 輕唇音（表2）

非，奉，微母の例が知られている。TⅡT では非・奉に對して β を，微に對して β を用いる。ソグド文字の β は本來無聲音も有聲音も示し得るので，特に無聲音を表す際には補助記號を用いることが知られている。從って β は [f] を，β は [v] を表していたに違いない。Mainz は兩者を區別せず一樣に β を用いるが，微母では有聲音を表していたと考えられる。このことは他の資料とも一致する[15]。ちなみに非母と奉母の發音が異なっていたとしても，ソグド文字では區別できなかったであろう。高田によれば，非・敷・奉の3聲母は合流して [f] になっていたと考えられるという[16]。

無 mw は例外であるが，どれも梵語音譯語の南無 n'mw (<Skt. namo) の場合であり，異とするに及ばない。

2.3 舌頭音（表3）

端・透・定母はすべて t- で表記されている。これは重唇音におけると同樣，漢語の側の音韻變化と，ソグド文字の表音上の制約から豫想される事態である[17]。泥母は，TⅡT では n- あるいは 'nt- で表記されている。'nt- は脱鼻音化を示すもので，-t- は [d] と發音されていたに違いない。ただこの場合，ṗ や k の場合と異なり，單なる t と區別する補助記號が附けられなかった理由は不明である。ソグド文字でソグド語を表記する場合，'nt という文字列が頻繁に現れることと關係があるのかもしれない。念 'nt'ym では，鼻音の韻尾を持つにもかかわらず脱鼻音化が起こっている。この種の例外はチベット文字資料にも見られる[18]。Mainz の南 n' は梵語音譯語の南無 n'mw の例であり，問題にならない。その他の欄の提 δ'y も，梵語音譯語の例である。

來母の字はすべて ṛ (=l) で表記されていて問題がない。TⅡT の六 rywγ に補助記號がみえないのは，單に不注意によるものである。その他の欄の梵語音譯字の羅 r' は問題にならないが，蓼 δyw には注が必要である。ソグド文字の δ は，比較的古い層のインド語からの借用語では [l] を表記するために用いられることが知られており[19]，この場合も δ は [l] を寫していたことになる。從って蓼 δyw は，比較的に古い借用語であると判斷できる。

2.4 舌上音（表4）

舌上音（知・徹・澄母）と正齒音（照・穿母）は，チベット文字資料では合流している[20]。

表3

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
端 t	多 t' 當 t'nk 得 tk	多 t' 德 t'k	多 t'(5) 啄 t-(5) 丁 tyy(6) 都 tw(6.1) 督 twx(6.1) twγ(6.1) 店 tym	東 twnk 敦 twn 德 tyk 帝 δy
透 t'	他 t'	體 ty		太 t'y 臺 t'y 統 twnk
定 d'	道 t'w	地 ty 同 twnk	達 tr(3) tr(6.1) 提 δ'y(5) 度 tw(6.1) 壇 δ'n(6) 大 ty(6) t'y(6.1)	寶 tyw 徒 tw 殿 tyn 達 δ'r
泥 n	能 nnk 念 'nt'ym 乃 'nt'y	南 n' [n](')m	耨 n'wγ(5)	南 n'm 寧 ny
來 l	來 ṛ''y 論 ṛwn 利 ṛy 離 ṛy 亂 ṛw'n 六 ṛywγ rywγ	羅 ṛ' 來 ṛ'y 禮 ṛy 林 ṛym 蓮 ṛyn 累 (ṛwy)	羅 r'(5) 蓼 δyw(5) 六 lwk(8) lwk'(8) (l)yγ(8)	流 lyw 臚 lw 蓮 lyn

ソグド文字資料では，これらの聲母の漢字は少ないが，どのグループも c- で表記されていて，兩者は合流していた考えられる。その他の欄の張 c'n は，639年の契約文書に現れる例で，この時期に既に知母が照母とよく似た發音であったことが分かる。なお，全濁音及び次清音の扱

表4

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
知 ť		中 [cwn]k	張 c'n(4)	張 cw 貞 cy 中 cwnk
徹 ť'				超 c'w 褚 cww
澄 d̂'	長 c''nk 重 tcwnk	住 cw	長 c'ng(6.1)	宅 cyx 鄭 cy 陳 cyn 重 tsw
娘 ń				

いは他の閉鎖音聲母と同様である。

TⅡT の重 tcwnk は奇妙な表記である。tc- は [tč-] と表記したことになり，単なる c-[č-] とどのような差異があるのか不明である。ただ正齒音の種も tcwnk と表記されている點は注目される。發音のなんらかの差異を表そうとしたものであろうが，その意圖するところは必ずしも明らかではない。庄垣内は，ウイグルの例外的形式である重 tsw をこれと關連づけ，重の聲母が澄母中では他と異なった性質を持っていたものと考えた[21]。

2.5 齒頭音（表5）

精・清・從の3聲母がすべて ts- で表記されている。全濁音の無聲化と，ソグド文字の表音上の制約から期待されるとおりの音寫形である。その他の欄で，この聲母が c-, ts-, s- で表記されているのは，[ts] がソグド語の音韻體系には通常存在しない音であることに由來する。この外來の音は，借用語においては [ts] のまま發音されるか，[ts] に最も近い他の音 [č] あるいは [s] によって代用されるかしたのであろう[22]。なお Ancient Letter II の泉 cn 及び藏 c'n（どちらも從母）の c- は，有聲音 [dz] を表していたものと考えられる。この時期に漢語の全濁音が，無聲化していたとは考えられない。

心母は s- で表記されていて問題がない。邪母の例は存在しないが，無聲化して心母と區別がなくなっていたであろう。ウイグル文字の表記はそのことを證明している[23]。その他の欄の四 zy は，ウイグルにおけると同様の散發的な有聲化の例と考えられる[24]。

表5

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
精 ts	增 tsnk 精 tsynk	積 tsyk 尊 tsw(?) tswn 千 tsyn	酒 cw(1) 將 sn(2) s'n(6.1) 子 tsy(5) 蕉 tsy'w(5) 簪 s'm(5) 節 syr(6.1)	宗 tswnk 蔣 tsw 子 tsy 晉 tsyn 晉 δsyn 子 δsy 宗 swnk 子 sy
清 ts'	七 tsyr 切 ts'y 此 [t](s)y	清 (tsy)	刺 cyg(6.1) 七 syr(8) syr'(8) (c)yr(8)	草 ts'w 錯 ts'x
從 dz'	罪 tsw'y 漸 ts'ym tsym	罪 tswy 淨 tsy	泉 cn(1) 藏 c'n(1)	奘 tsw 慈 tsy 秦 tsyn
心 s	四 sy 薩 s'r 死 sy 心 sym 修 syw 三 s'm 信 syn	雪 swyr 三 s'm 須 sy[w] 斯 sy 息 syk 心 sym	辛 syn(6) 三 s'm(5) s'm(8) s'm'(8) 四 sy(8) zy(8) s[y]''(8)	三 s'm 孫 swn 蕭 syw 宣 tswyn
邪 z				序 sww 遂 swy 寺 sy tsy

2.6 正齒音・齒上音（表6）

照・穿母が知・徹母と合流したことについては上で述べた。例外的な表記である種 tcwnk についても上記を參照されたい。その他の欄の主 jwy は宮主 xwnjwy にみられるもので，借用の後先行の n に同化して有聲化したものと考えられる[25]。

表6

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
照 tś	障 cy''nk 者 c' 諸 cw 之 cy 至 cy 專 cwyn 種 tcwnk	之 cy 照 cyw 眞 [cy]n	主 cwyh(5) jwy(6.1) cwy(6.1)	章 cw 志 cy 周 cyw
穿 tś'				昌 cw
神 dź'	神 šyn		乘 šyng(6)	實 šyr 乘 šynk
審 ś	深 šym 世 šy'y 少 š'yw 說 šw'yr	身 šyn 深 šym 聲 šy 世 [š]y 舍 š' 釋 š'		審 šwyn 書 šw 聲 šy
禪 ź	常 šy'nk 十 šyp 甚 š'ym 成 š'ynk 是 šy	尙 šw 常 šw 城 šy 甚 šym 十 šy šyp	十 šyp(8) šym(8) 城 zyn(1) 壽 cyw(4)	禪 šyn 常 šww 侍 šy
日 ńź	若 ẓy'γ 二 ẓy 如 ẓyw	若 ẓ' 如 ẓw 人 ẓyn	壬 jym(6) 二 šy(8) šy'(8) ẓ-y(8)	如 žw 壬 žym 仍 žynk 人 yyn
疏 ṣ	生 š'nk 所 š	生 šy 山 š'n 色 š'k	師 šy(6.1) 史 šyy(6.1) 使 šyy(6.1)	山 š'n 沙 š' 雙 šwnk 沙 ž'
莊 tṣ			齋 c'y(6)	齋 c'y
初 tṣ'				懺 c'm
牀 dẓ'				賾 šyx 士 šy

高田によれば，チベット文字資料では，審・禪・神母は合流して ś [ɕ] になった。また疎・牀母は ṣ [ʂ] になった[26]。ソグド文字資料では，牀母の例はみられないが，他の4聲母はすべて š によって表記されている。ソグド文字ではおそらく [ɕ] と [ʂ] は區別できないので，この資料から，5聲母がすべて合流していたのか，あるいはなお2系列の區別があったのかは判斷できない[27]。

照母と莊母及び穿母と初母の區別の有無については，高田はそれがあったとする。ソグド文字資料には莊・初母の例がないために速斷はできないが，ウイグルの例を參考にすれば，照母と同樣 c- で表記されていたであろう。無論，[ɕ] と [ʂ] の場合と同じように，[tɕ] と [tʂ] の區別はソグド文字ではできなかったであろう[28]。

その他の欄の城 zyn は Ancient Letter の例であり，禪母の無聲化以前の段階を反映するものである。ソグド文字の z は，[ž] も表記できることに留意されたい。639年の契約文書中の壽 cyw の例は難解である。ただし濁音聲母の神・禪・牀母の現代漢語への發展は一樣ではなく，各聲母が [tʂ], [tʂ'], [ʂ] に變化し，しかもその條件が特定できない。チベット文字資料でもまれに期待される摩擦音 (sh-, zh-) ではなく，破擦音 (j-, ch-) が現れる場合がある[29]。壽 cyw も，このような禪母の不安定な發音の一例とみなされるだろう[30]。

日母は TⅡT で ẓ-, Mainz で ẓ- によって表記されている。いずれも [ž] を表し，問題がない。問題はその他の欄の二 šy, šy', ẓ-y である。この聲母が漢語で無聲化していたとは考えられず[31]，この數字の表を書いた者の言語において，二次的に無聲化したものと考えられる。Hamilton は，ウイグル語における ž>š の變化の例を引用し，ソグド語においても同樣の無聲化が起こったのだと考えた[32]。しかし注意すべきは，ž の音素としての地位がソグド語とウイグル語で異なることである。ソグド語では ž は本來の音素であるのに對し，ウイグル語では本來の音素ではなく，借用語にのみ認められる。從って母國語の影響による ž>š の變化は，ウイグル語の場合にはあり易いが，ソグド語を母國語とする者では考えにくい。それ故この資料は，文語であるソグド語に精通したトルコ人によって書かれたものとみなすべきであろう。この點については上記369頁も參照されたい。なおウイグル文獻中の日母の特殊な事例については下記320頁參照。

2.7 牙音（表7）

牙音の表記は複雜である。Mainz では，見・溪・群の3聲母は他の閉鎖音の聲母と同樣に區別がなくなり，しかもウイグルにおけると同じように，3・4等の字は k- (及び ḳ-) によって，1・2等の字は x- (及び ẍ-) によって表記される[33]。迦 k' は例外だが，釋迦 š'k' (<Skt. śākya-) にみられるもので，梵語音譯語の例であり異とするに足りない[34]。ウイグルの k- と x- の使い分けは，漢語の側で軟口蓋閉鎖音（すなわち牙音）が，1・2等と3・4等で相當調音

表7

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
見 k	九* k(y)'w 鬼* kwy ḳwy 敬* ḳ'ynk 逕* ḳ'ynk 境* ḳ'ynk 界 ḳy'y 學 ḳw(x) 觀 x̣w'n 故 x̣w 更 x̣y'nk	九* (ky)[w] 金* kym 敬* ky 境* (k)[y?] 迦 k' 迦 ẍ' 界 x'y 剛 ẍw 功 xwnk	姑 k-(1) 金* km(1) 九* kyw(8) 巳* kyy(6) 癸* kwy(6) 軍* (kwn)(3) gwn(6.1) 官 xw'n(3, 6.1) x'n(6) 公 xwn(5, 6.1) 庚 ẍyy 甲 ẍ'p(6)	堅* kyn 金* kym 璟* kyy 季* kwy 恭* kynk 宮* kwynk 綱 xw 廣 xw 江 xwnk 庚 xy 國 xwx 穀 xwx
溪 k'	恐* kwnk 起* ky 輕* ḳ'ynk	去* kw 空 ẍwnk	康 x'n(5) 開 x'y(5)	卿* ky 窺* kwy 慶* ky
群 g'	懃* 'ḳy(n)	極* kyk 祇* ḳy		極* kyyk 乾* kyn 忌* ky
疑 ng	業* 'nk'yp 疑* 'nky 五 γw 外 γw'y	願* ḳwyn 我 γ'	鄂* 'nkp'(1) 元* 'nkwyn(5) 衙 γ'(6.1) 五 γw(8) γwβ'(8) γwy(8)	堯* kyw 業* kyp 元* kwyn

N.B. *は3・4等字を示す。

位置が異なっていたことによるとする説がある[35]。そのことは否定できないであろうが，この場合には明らかに前舌母音とk，後舌母音とxが結び附くというウイグル語の側の制約が背景にあったと考えるべきであろう[36]。漢語よりも受け入れ側の言語の影響であることは，チベット文字資料やブラーフミー文字資料にこの區別が全くみられないことからも知られる。この點から推測される Mainz の書き手の母國語の問題については下にやや詳しく論じることにする。

Mainz では，1・2等の聲母に x- だけでなく ẍ- も用いている。見母でも功 xwnk と剛 ẍw のように一定せず，同韻の功 xwnk (<kung) と空 ẍwnk (<k'ung) でも一定しないので，有氣・無氣の區別や，前より後ろよりといった調音位置とは無關係だったと考えられる。次の表8から分かるように，摩擦音聲母の曉母や匣母の1・2等字に ẍ- を用いるものは見あたらないので，ẍ- は一部のウイグル文獻におけると同様に，摩擦音と區別して，口蓋垂あるいは後ろよりの軟口蓋の閉鎖音を表記するために用いられていたことが分かる。ただし補助記號の使用に一貫性がなかったようである。

Mainz ではまた ḳ- が群母と疑母で用いられている。上でも述べたように，群母は無聲化していたと考えられ，同じく群母の極が kyk と表記されているので，ḳ は有聲音を表すものとは考えられない。一方，祇 giĕ[37] ky，極 gïək kyk，願 ŋïʷen ḳwyn の表記から判斷して，介母の前舌・中舌の區別（いわゆる重紐2類の區別）とも無關係のようである。今は不明として，解決を今後の研究に委ねたい[38]。

TⅡT でも，見・溪・群の3聲母の表記には k-（あるいは ḳ-）と x̣- が用いられている。群母の懃 'ḳyn に見られる 'ḳ- は，全濁聲母が見・溪とまだ完全には合流していなかったことを示唆する[39]。k-(ḳ-) と x̣- の使い分けは，だいたい Mainz の場合と同じで，1・2等字に x̣-，3・4等字に k-(ḳ-) を用いる傾向が顯著である。しかし TⅡT では，界 ḳy'y や覺 ḳwx のような例外もみられる。從って TⅡT は Mainz に比べて，漢語の音韻體系に忠實であり，ウイグルの音寫システムとは少し異なる。この點については，表8の匣母の4等字である現 x'yn も參照されたい。背景には TⅡT と Mainz の音寫に當たった人間の，音韻體系の違いがあるものと思われる。

ソグド語では，軟口蓋の閉鎖音は /k/ 1種しか存在せず，それと摩擦音の /x, γ/ が對立していた。しかもウイグル語に見られるような，前舌母音と後舌母音との結合上の制約もなかった。ただ /k/ と /x (γ)/ とでは附隨的な音聲特徴として，前者の方が後者より前よりの調音點を持っていた[40]。從って漢語の見・溪・群母の表記に際しては，後ろよりの調音點を持つ1・2等の聲母を轉寫する場合，その閉鎖性を重視して k を選ぶか，調音點が後ろよりであることに配慮して x（あるいは x̣）を選ぶかについて，搖れがあったのであろう。つまり TⅡT の音寫に當たった人間の母國語はソグド語であったのに對し，Mainz の方は，ウイグル語を母國語とする人間が，音寫に關與した可能性が高いといえよう。

なお TⅡT の x̣ は，曉・匣母の表記には用いられておらず，Mainz の ẍ と同様，摩擦音と區別して特に閉鎖音であることを示すための補助記號であったと考えられる[41]。また ḳ の正確な音價が不明なのも，Mainz の場合と同様である。1等字の覺 ḳwx や2等字の界 ḳy'y にもみられるので，3・4等の區別を意圖したものでは有り得ない。また，輕 k'iäŋ[37] ḳ'ynk と敬 kïang ḳ'ynk の比較から，重紐2類の區別とも無關係であったことが分かる[42]。

その他の欄でも k- と x- が現れ，その區別は漢字の３・４等１・２等の區別に並行している。例外は Ancient Letter の姑（藏）k(c'n) であるが，上でも説明したとおり，ソグド語を母國語とする人間は，１・２等の聲母を k- で表記することも有り得た。興味深いのは，開 x'y の例である。これは開元16年（728年）に洛陽で飜譯された佛典の奥書に現れる[43]。この當時には，ソグド語に對する古代トルコ語の側からの組織的な影響があったとは考えにくいので，漢語の見・溪・群母の１・２等字の聲母を x- で表記することが，ソグド語を母國語とする者によっても行われ得た證左である。さらに，韻尾の -ng を -n で寫すことは比較的に古い時代に導入された漢字音の特徴であるから[44]，サマルカンド出身者の姓である康 x'n も，古い時代に成立した表記であると推測される。この例でも溪母は文字 x- によって音寫されている[45]。

疑母でも１・２等と３・４等で扱いを異にする。Mainz では３・４等字に ḳ- を，１・２等字に γ- を用いる。この場合 ḳ は，有聲の閉鎖音 [g] を表していたに違いない[46]。ここでは韻尾に鼻音を持つにもかかわらず，聲母にいっさい鼻音の要素が現れない點で，明母・泥母と際だった相違をみせる。このことはチベット文字資料，ブラーフミー文字資料，ウイグル文獻にも共通している[47]。γ- と轉寫した文字は x- と區別はないが，有聲音であったことに疑いはないので，敢えてこのように轉寫した[47a]。

TⅡT では３・４等に 'nk- を用いる。これは明母・泥母におけると同様，脱鼻音化の一つの段階 [(ə)ᵑg-] に對應するものである。脱鼻音化が問題にならない時代に屬する Ancient Letter の例 'nkp' 鄴も，類似の表記を用いるが，これはソグド語にはない初頭の [ŋ] を寫すための便宜であったのだろう。それに對して TⅡT の 'nk- の k は，有聲の閉鎖音 [g] を特に意圖したものであるに違いない。この點については，韻尾の -ng（つまり [-ŋ]）を表記する TⅡT の -nk も參考になる。なおその他の欄の元 'nkwyn は，上述した佛典の奥書に見られるものである。この當時洛陽で脱鼻音化が始まっていたかどうかは興味深い問題だが[48]，我々の資料はその判斷の材料として使うことができない。どちらの場合にも 'nk- と轉寫されただろうと推定されるからである。

１・２等の聲母には γ を用いる。Mainz と同様字形から γ と x を區別することはできないが，疑母の有聲性を考慮して敢えて γ と轉寫した。３・４等の 'nk- との並行性を考慮すれば，ここで鼻音の要素が見られないのは奇妙である[49]。高田はブラーフミー文字による表記で，疑母の字が摩擦音を表す文字 h'(:)[50] によって寫されることについて次のような説明を與えている：「……恐らくは鼻音を伴った軟口蓋破裂音の疑母の發音がその聞こえにおいて摩擦的に響くのを寫したものであろう」[51]。γ は軟口蓋後部から口蓋垂で調音される摩擦音を表す文字なので，高田の説明はこの場合にも適用されるかもしれない。一方で疑母の初頭音は後に失われるので[52]，ここにその聲母の弱まりの一端を見ることができるかもしれない[53]。注47で論じた疑母の脱鼻音化の特殊性との關連も含めて，この問題は未解決のまま將來の研究に委ねたい。

表8

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
曉 x	悔 xw'y	虛* kw 化 xw' 海 x'y		顯* kyn 許* kww 訓* kwyn 漢 x'n 孝 x'
匣 γ	現* x'yn 護 xw 何 x' 惑 xwk 學 xwγ	行 xy 下 x(') 華 xw[''] 和 w'		夏 x' 恆 xynk 鴻 xwnk 衡 xy 皇 x'w xw 槐 xwy 華 xw' 玄* kwyn 慧* kwy
影 ・	憂 'y'w 於 'w 惡 ''x 益 'yγ 一 'yr	一 'y	阿 '(5) 安 ''n(5) 鸚 'y 乙 'yr(6) 押 ''m(6.1) 一 'yr(8) 'yr'(8)	因 'yn 英 'y 尉 'wyr 雍 'wynk 乙 'yr 安 'n 恩 'yn 益 yyk
喻 (開)	以$_4$ yy	耶$_4$ y' 葉$_4$ yyp	延$_4$ y'n(4)	祐$_3$ yww 融$_3$ ywnk 裕$_4$ yww 姚$_4$ yw 楊$_4$ yww 揚$_4$ yw 瀛$_4$ yy(n) 'y
喻 (合)	遠$_3$ wyn 云$_3$ wyn 爲$_3$ wy	衞$_3$ wy 永$_3$ wy 圓$_3$ w[y]n 維$_4$ wy	王$_3$ w''n(4)	王$_3$ w'nk 院$_3$ wyn 遠$_3$ wyn 永$_3$ wy 域$_3$ wy 于$_3$ 'ww 銳$_4$ wy 兗$_4$ wyn 唯$_4$ βy 維$_4$ βy

*N.B. $_{3,4}$ は各々3等・4等を示す。

2.8 喉音（表8）

曉母・匣母の字は例は少ないが，Mainz ではウイグル同様，3・4等で k-，1・2等で x- を用いて表記している。他の聲母におけるように，本來有聲であった匣母は無聲化して曉母と合流していたと考えられるので，ここでは匣母の字も x で轉寫した。文字の形の上からは x と γ の區別がないことは言うまでもない。和 w'（和尙 w'šw）は明らかに例外である。漢字の比定に誤りがなければ，導入された時代の差異を考慮しない限り説明できない。TⅡT でも曉母・匣母の字は例が少ない。唯一の3・4等字である現 x'yn の例が，漢語の音韻體系に忠實な轉寫である點については上記牙音の項參照(54)。

影母は '- によって表記されている。' は聲門閉鎖音を表していたのだろう(55)。喩母は3等でも4等でも，開口のものは y-，合口のものは w- によって轉寫されている。喩母が開口と合口で扱いを異にすることと，その轉寫の仕方はウイグルと同じである(56)。

TⅡT の憂 'ẏ'w に見られる ẏ の音價は不明である。文字 y は半母音 y 及び母音 ĭ だけでなく，ĕ も表記し得た。憂の再構形 ·i̯ə̯u に則して勘案すれば，ẏ は半母音であることを明確に示し，[ʔeu] ではなく [ʔi̯əu] と發音すべきであることを表そうとしたものかもしれない。

3 韻母

韻母の整理に際しては，母音の音價が問題になる。しかし殘念なことに，ソグド文字は母音を正確に表記するには極めて不都合な文字である。母音を表す文字は '，w，y の3つしかない。概ね ' は [ă, ə] を，'y 及び y は [ĭ, ĕ] を，'w 及び w は [ŭ, ŏ] を表す。なお 'y と 'w が各々 [ăi] 及び [ău] も表すことを除けば，'y と y，'w と w の區別はない。例えば TⅡT では1つの同じ漢字漸に對して，ts'ym と tsym の2種類の表記がある。實際このような表記がまさにソグド的なのであって，語頭以外の位置の [ĕ, ĭ] を 'y で表記することは，ウイグル文字では極めて稀である(57)。この種の表記は，ここで引用したウイグルの資料中には1例も存在しないし，Mainz にも見あたらない。この現象も Mainz が基本的に，ウイグルと同じ表記法を用いていたことを示している(58)。

ソグド文字が母音表記に適していないことから，漢語の側に存在した微細な韻母の發音の區別は，ソグド文字ではとうてい表現しきれなかったであろう。例えば1等字と2等字の主母音の區別などは，漢語には存在したに違いないが，ソグド文字では等しく '(aleph) によって表記されてしまう。從って，『切韻』の韻母のいくつかは，『慧琳音義』では合流していたことが知られているものの，我々の資料の粗雜な表記によってそのことを傍證することはできない。下でソグド文字によって表記された韻母の音價を推定するが，その音價は多少とも異質な要素を含んではいるものの，基本的にソグド語の音韻體系におさまる形式が選ばれている。

3.1 介母の扱い

韻母についての議論を行う前に，ここでは拗音及び合口の介母がどのように現れるかを見ておきたい。まず見・溪・群母の項でみたように，拗音介母の前舌 (i) と中舌 (ï) の區別は，ソグド文字表記には反映されていない。この點はウイグルでも同じである。一般的に言って，拗音介母はソグド文字では表記されにくい。この傾向は主母音が前舌母音であったり[59]，聲母が硬口蓋の子音 (c, š, ž, y) である場合[60][61] に特に顯著である。しかし主母音が廣母音・後舌母音の場合には，六 lịuk rywγ，障 tśịang cy''nk のように y で表記されている。

Mainz では拗音介母が y で表されているのは，九 (ky)[w] と須 sy[w] の 2 例だけである。一方 TⅡT は，はるかに多くの場合に拗音介母が表記されている[62]。このことから判斷すれば，いわいる假 4 等字の現 γien x'yn，逕 kieng ḳ'ynk，切 ts'iei ts'y，念 niem 'nt'ym は拗音介母をまだ析出していない狀態を反映する可能性がある。しかし一方で，拗音介母が前舌の主母音に併呑される傾向があることや，ソグド語では Cyẽ と Cẽ (C はなんらかの子音を示す) が區別されにくいことを考慮すれば[63]，あまりこれらの表記を重要視することはできない。

TⅡT でもう一つ注目すべき點は，牙・喉音の 2 等の界 kăi ḳy'y 及び更 kɐng ẓy'nk に見ら

表 9

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
歌 â	何 x' 他 t' 多 t'	羅 l' 我 γ' 多 t'	阿 '(5) 羅 r'(5) 多 t'(5)	阿 ' 羅 l' 河 x' xy
戈 uâ	魔 'nṗ'	摩 p' 波 p' 和 w'		摩 p' 婆 p' 破 p'
麻 a		迦 k' ẍ' 下 x(')	衙 γ'(6.1) 芭 p'(5)	賈 x' 沙 š' 馬 p'
麻 wa		化 xw' 華 xw[']		華 xw'
麻 ịa	者 c'	若 ẕ' 舍 š'		若 ž' žy 射 y'

れる y である。これは牙・喉音2等の拗音化の先驅けとみなすことができるだろう(64)。

合口の介母は（いわゆる撮口呼も含めて），聲母が唇音でない限り，原則的に -w- によって表記されている。ただし唇音聲母は合口性に關して關與せず，韻書では合口と扱われるものの開口と同じ扱いである。合口の介母は，その後に廣母音が續くときには w' と表記されているが，後舌の圓唇母音や中舌母音が續く場合，表記上兩者は融合し，w のみによって表されている(65)。ただしこの場合にも，TⅡT と Mainz では若干の違いが見られる。罪 dz'uâi は TⅡT では tsw'y, Mainz では tswy と表記されている。後者では介母と主母音が，融合したように見える。

3.2 果・假攝（表9）

兩攝ともに -' と表記され，區別がない。-' は [-a] を表している。これは無論，漢語の側で兩者が合流していたことを示すものではなく，ソグド文字では兩者を區別することができなかったからである(66)。なお若は，梵語音譯語である般若 (<Skt. prajñā-) で用いられるもので，中古漢語では ńźi̯a と再構される(67)。

3.3 蟹攝（表10）

TⅡT では，蟹攝の字はすべて -'y と表記されている。この表記は明らかに二重母音を意圖したものであり，1・2等字では [-ai] を表していたに違いない(68)。ソグド文字の表記からは，1・2等重韻の合流や，1・2等の主母音の區別の有無は知り得ない。他の攝における狀況から判斷して，1・2等の區別は漢語では保持されていたであろう。

3・4等の -'y が [-ai] を意圖したものか，[-ei] を意圖したものかは難問である。ここでは，漢語では3・4等の核母音が1・2等のものより狹かったことから，[-ei] を意圖したものと考えた。なお世 šy'y と切 ts'y は，祭韻と齊韻がまだ合流していなかったことを示唆している。兩韻は『慧琳音義』では合流していたと考えられるので，TⅡT の書寫年代を知る上で參考になる。無論この1例をもって，結論を下すことは早計である。

Mainz では1・2等字を -'y で，3・4等字を -y で表記している。これはウイグルと全く同じである。前者が [-ai] を意圖したものであることは明らかだが，後者が [-e] を表すものか [-i] を表すものかは容易に決められない。ブラーフミー文字で表記されたウイグル語文獻で，齊韻の閉が *pe ではなく pi と綴られていることから(69)，Mainz でも -y は [-i] を表していたと考えることができる。しかし一方で，チベット文字資料やブラーフミー文字資料では，蟹攝の3・4等字と止攝の字が異なる表記を受けているので，[-i] ではなく [-e] を想定する根據もある(70)。いずれにしても二重母音ではなく，單母音が意圖されていることは注目される。罪 tswy は，合口介母が主母音と融合した樣子を示し，[tsoi] のような發音を表すものであろう。

表10

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
泰 âi	外(合) γw'y		大 t̲'y(6.1) ty(6)	大 t'y 太 t'y 泰 t'y
咍 ại	來 ṛ''y 乃 'nt'y 悔(合) xw'y 罪(合) tsw'y 昧(合) 'nṗ'y	來 ṛ'y 海 x'y 罪(合) tswy	開 x'y(5)	才 ts'y 臺 t'y 罪(合) tswy
皆 ăi	界 ḳy'y	界 x'y	齋 c'y	齋 c'y 槐(合) xwy 懷(合) xwy
祭 ạäi	世 šy'y	世 [š]y 衙(合) wy		銳 wy
齊 iei	切 ts'y	體 ty 禮 ṛy	提 δ'y(5)	弟 ty 西 sy 齊 tsy 慧(合) kwy

その他の欄では，大乘 tyšyng に見られる大 t̲y が例外的表記である。借用語が定着する過程で單母音化し，[-ai] から [-e] ないし [-i] に變化したのであろう。菩提 pwδ'y の提 δ'y も，TⅡT の切 ts'y 同樣，假4等の拗音介母析出以前の段階を反映する可能性がある(71)。

3.4 止攝（表11）

TⅡT でも Mainz でも，開口は -y，合口は -wy と表記されている。ただし輕唇音及び喩母の合口では，合口の介母が聲母と融合し，開口と同じ扱いになっている。從って Mainz の微 β(wy) は，もしこれが正しい讀みであるとすれば，說明不可能な例外である。

-y は明らかに [i] を意圖している。一方 -wy は，[-ui] を表すものと考えられるが，ウイグルでこの攝の聲母には，後舌母音と結合する x- ではなく，前舌母音と共起する k- が選ばれていることから，後續する [-i] の影響で前よりになった二重母音 [-üi] を意圖したものとみなす方が良いだろう。もちろんソグド語では，[ü] は音素 /u/ の異音とみなされる。

止攝では，齒頭音を聲母とする字で，韻母が [ɿ] に變化していたかどうかの問題がある。高

表11

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
支 iẹ	離 ṛy 是 šy 此 [t](s)y 爲(合) wy	斯 sy 祇 ḳy		義 ky kyy 智 cy 隋(合) swy 窺(合) kwy
脂 i	利 ṛy 至 cy 二 ẓy 四 sy 死 sy	地 ty 毗 py 累(合) (ṛwy) 維(合) wy	屁 py(5) 師 šy(6.1) 二 ẓ-y(8) šy(8) šy'(8) 四 sy(8) zy(8) s[y]''(8) 癸(合) kwy(6)	師 šy 遲 cy 毗 py 遂 swy 癸(合) kwy 季(合) kwy 維(合) βy 唯(合) βy 水(合) šw
之 i	疑 'nky 起 ky 之 cy 以 yy	之 cy	己 kyy(6) 子 tsy(5) 使 šyy(6.1) 史 šyy(6.1)	慈 tsy 子 tsy sy 記 ky 寺 tsy sy
微 ẹi	誹(合) βy 微(合) βy 鬼(合) ḳwy kwy	微(合) β(wy?)		徽(合) kwy 魏(合) kwy

田は，チベット文字資料には見られないが，ブラーフミー文字資料には觀察されるとしている(72)。ソグド文字による粗雜な母音表記からは，その變化が實際に起こっていたかどうか判斷することはできない(73)。ウイグルではどうであったかについては，下にやや詳しく論ずることにする。

なおその他の欄の己 kyy，使 šyy，史 šyy の3例はすべてマニ文字資料からのものであり，-yy は單なる -y と同價である(74)。

3.5 效攝（表12）

例は少ないが，1等字に -'w，3・4等字に -(')yw を用いる。2等字の例はないが，ウイグル同様 -'w で表記されたであろう。-'w は [-au] を，-(')yw は [-eu] を意圖したものと考えられる。『慧琳音義』では，宵韻と蕭韻は合流するが，零細な資料からその點を確認することができない。その他の欄の蕉 tsy'w は，拗音介母を -y- によって表記している點で，TⅡT の少 š'yw より漢語の發音に忠實な表記である。tsy'w は [tsiau] のような發音を意圖したものと思われるが，Karlgren によって ä と再構された宵韻の主母音を，ソグド文字で表記する際，' を選ぶか (')y つまり [e] を選ぶか2つの方法があり得たのであろう。

3.6 流攝（表13）

TⅡT では尤韻の例のみ在證され，-y'w と表記されている。核母音の ə は ' によって表記さ

表12

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
豪 âu	道 t'w	報 p'(w)		草 ts'w 高 x'w 寶 p'w 道 t'w tw
肴 au				教 x'w 孝 x'w x'
宵 i̯äu	少 š'yw	照 cyw	猫 myw(5) 蕉 tsy'w(5)	晁 cyw 照 cyw 小 syw 逍 c'w 超 c'w 紹 š'w 姚 yyw yw
蕭 ieu			蓼 δyw(5)	蕭 syw 堯 kyw 遼 lyw

表13

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
侯 ə̣u		母 pw	戊 bw(6)	竇 tyw 戊 bww bw 樓 l'w
尤 i̯ə̣u	修 sy'w 九 k(y)'w 憂 'y̤'w	九 (ky)[w]	酒 cw(1) 壽 cyw(4) 九 kyw(8) 副 fw(6.1)	流 lyw 周 cyw 州 cyw cw 祐 yww

れているが，これは *-yw と表記した場合 [-iu] と讀まれることを避けるために選ばれた綴りであろう。一方 Mainz の九 ki̯ə̣u (ky)[w] の讀みが正しいとすれば，この -yw はウイグルと同じで，拗音介母と核母音が融合し單母音化して [-i-] と發音されていたのだろう。從って TⅡT の -y'w は [-iəu]，Mainz の -yw は [-iu] を意圖したものと考えられよう。

『慧琳音義』では，侯韻の唇音字及び尤韻の輕唇音字は，模韻と合流したことが知られており(75)，Mainz の母 pw 及びその他の欄の戊 bw，副 fw はよくこの狀態を反映している。

その他の欄の酒 cw（酒泉 cwcn)は，Ancient Letter 中の地名であり，その表記にあまり拘泥する必要はないだろう。

3.7 遇攝（表14）

例に偏りがある。模韻は TⅡT にのみ在證され，すべて -w と表記されている。この表記から [u] が意圖されたか，[o] が意圖されたかは分からない。

魚韻は Mainz ではすべて -w で表記されている。高田によれば，魚韻は [y]（つまり [ü]）と發音されていたという(76)。-w はこの [ü] を意圖したものだろう。TⅡT の場合は複雑で，諸 cw のように Mainz と一致するもの，如 ẓyw のように拗音介母を表記するものがある。硬口蓋子音を聲母とする如でも -yw と綴られていることから判斷して，TⅡT では拗音介母と主母音の融合 (i＋o＞ü) が起こっていなかったのだろう。眞の例外は TⅡT の所 š である。所は 3 例在證されるが 3 例とも同じ表記なので，誤寫であったとは考えられない。この文字の發音の特殊性であったかもしれないが(77)，今は不明として解決を將來の研究に委ねたい。

虞韻の字は Mainz にしか見られない。輕唇音を聲母とする字では，拗音介母は聲母に吸收され，單に [-u] と發音されていたであろう。住 cw では，硬口蓋子音の後で介母は表記されて

表14

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
模 uo	護 xw 怖 pw 五 γw 菩 pw 故 x̣w		菩 pw(5) 都 t̲w(6.1) 姑 k(1) 五 γw(8) γwy(8) γwβ'(8)	蘇 sw sww 徒 tw 蒲 pw 杜 tww
魚 i̯wo	諸 cw 如 z̧yw 所 š	如 z̧w 去 kw 虛 kw		臚 lw 如 žw 書 šw 呂 lwy 許 kww 褚 cww 序 sww
虞 i̯u		須 sy[w] 住 cw 夫 βw 父 βw 無 βw mw	主 cwyh(5) cwy(6) jwy(6.1) 鵡 m'w(5)	主 cw 武 βw 符 βw 于 'ww 裕 yww

いないが，輕唇音を聲母とする字と違って，-w は前舌の圓唇母音 [-ü] を表していたと思われる。また須 sy[w] の復元が正しければ，この -yw は [-iu] を表すものであろう。高田によれば，當時の漢語では虞韻は [-iu] と發音されていたという(78)。なお無 mw は聲母の項でも述べたとおり，梵語音譯語の南無 (Skt. namo) に見られるものであり，自から例外である。

その他の欄には特殊な表記がいくらかみられる。まず Ancient Letter の姑 k- (姑藏 kc'n) は，地名に見られるものであり，1文字1文字の發音を正確に表記したものではない。五 γwy γwβ' は非常に奇妙な表記である(79)。ウイグル語に導入され定着した漢語の中には，韻尾の -u の後にさらに -β (ウイグル文字の一般的轉寫では -v) を析出しているものや，韻尾の -u が -β に轉じた例がある(80)。文字 y と β は混同しやすいので，γwy はむしろ γwβ と讀むべきであろう。そうすれば *γwβ 及び γwβ' は，ウイグルに見られるこの現象と並行する現象であることになる(81)。上ではこの數字の表は，ウイグル人によって書かれたものと推測したが，その推測は

この例からも支持される。

虞韻の主 cwy は公主 xwncwy に見られるものである。この語はごく早い時期に古代トルコ語に借用されており[82]，トルコ語の音韻體系への同化も著しかったであろう。實際，公 xwn でも漢語の韻尾の -ŋ は後續の c に同化して n になっている。同様に，輕唇音化以前の段階を示す鵡 m'w も，鸚鵡子 'ym'wtsy という借用語に見られるもので，Mainz などの例と同列に扱うわけにはいかない。

表15

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
談 âm 盍 âp	三 s'm	三 s'm	三 s'm(5, 8) s'm'(8) 押 ''m(8)	三 s'm
覃 ậm 合 ập		南 n' [n](')m	簪 s'm(5)	南 n'm 雑 ts'p
銜 am 狎 ap			甲 x̌'p(6)	儀 c'm
鹽 i̯äm 葉 i̯äp	漸 ts'ym tsym	葉 yyp		攝 šyp
業 i̯ɐp 凡 i̯wɐm 乏 i̯wɐp	業 'nk'yp	凡 β'm 梵 β'm 法 β'p	鄴 'nkp'(1)	業 kyp 凡 β'm 法 β'p
添 iem	念 'nt'ym		店 tym(7)	

3.8 咸攝（表15）

1・2等で -'m/p，3・4等で -(')ym/p が現れる。ただし，輕唇音を聲母とする字では，拗音介母が聲母に吸收され，1・2等と同じ扱いになっている。-'m/p は [-am/b] を，-(')ym/p は [-em/b] を意圖したものだろう。3・4等が [-em] であって [-im] でなかったことは，チベット文字資料やブラーフミー文字資料で，深攝の字と異なる表記を受けていることから明かである(83)。

咸攝及び次の深攝の入聲の韻尾 -p の發音としては，[p] あるいは [b] が考えられる。チベット文字資料では常に -b と綴られる。一方ブラーフミー文字では -pä あるいは -bä（まれに -hvä, -vä）と表記されている。マニ文字では -p，ウイグル文字による表記には表に示した -p 以外に，少數ではあるが -β, -w がみられる。このことと，對應する -t 入聲の韻尾がどの資料でも -r と表記されること，そしてその音價としては「onglide だけの semi-rolled r」が推定されていることなどから(84)，總合的に判斷すれば，入聲の韻尾 -p は外破を伴わない，入りわたりだけがある音であったと推測されよう。內破音では外破音ほど有聲・無聲の對立は明瞭ではなく，そのどちらによっても表記され得たのだろう。また外破を伴わないため，その閉鎖性が明瞭ではなく摩擦音のようにも聞こえたのであろう。

なおその他の欄の押 ''m は押衙 ''mγ' に見られるものである。韻尾の -p が後續の字の鼻音性を吸收して -m に變化している。この稱號については，他の言語に導入された形式も同じ變化を示している(85)。また -p が後續の鼻音聲母に同化する現象は，次項の深攝の十 šym にも見られる(86)。

3.9 深攝（表16）

基本的に -ym/p と表記されている。これは [-im/b] を意圖したものに違いない。TⅡT の甚 š'ym は例外だが，'y と y がソグド文字では比較的に自由に交替し得ることについては，既に上で述べたとおりである。Mainz の十 šy は十方 šy βw という表現に現れるもので，入聲の韻

表16

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
侵	深 šym	深 šym	金 km(1)	壬 žym
i̯əm	甚 š'ym	甚 šym	壬 jym(6)	檁 lym
	心 sym	心 sym		林 lym
		林 ṛym		金 kym
		金 kym		
緝	十 šyp	十 šyp	十 šyp(8)	十 šyp
i̯əp		šy	šym(8)	立 lyp

表17

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
寒 ân			安 ''n(5) 壇 δ'n(6)	安 ''n 讚 ts'n 看 x'n
桓 uân	觀 x̣w'n 亂 ṛw'n	滿 m'n 般 p'	官 xw'n(2) xw'n(6.1) x'n(6.1) 判 p'n	觀 xw'n xwwn 館 xw'n 般 p'
曷 ât	薩 s'r		達 t̲r(6.1) tr(2)	達 t'r
册 an			板(合) p'n(5, 7)	
山 ăn 鎋 ăt		山 š'n	八(合) p'r(8) (p'r')(8)	山 š'n
仙 i̯än i̯wän 薛 i̯ät i̯wät	專(合) cwyn 說(合) šw'yr 滅(合) 'np'yr	圓(合) w[y]n 雪(合) swyr	延 y'n(4) 泉 cn(1)	院(合) wyn 兗(合) wyn 傳(合) cwyn 專(合) cwyn 宣(合) tswyn 卷(合) kwyn kwwn 薛 syr
元 i̯wɐn	遠 wyn	願 ḳwyn	元 'nkwyn(5)	遠 wyn 元 kwyn
先 ien iwen 屑 iet		千 tsyn 蓮 ṛyn 邊(合) pyn	節 syr(6.1)	殿 tyn 堅 kyn 顯 kyn 玄(合) kwyn

尾が後續する輕唇音と合した狀況を示すものである。この種の連聲は，一心 'ysym にも見られることで，異とするに足りない。

その他の欄の金 km は Ancient Letter の地名に見られるので，この例に拘泥する必要はないだろう。

3.10 山攝（表17）

1・2等で -'n/r，3・4等で -('')yn/r と表記されている。合口字はさらに w を伴っている。咸攝を參考にすれば，1・2等は [-(u)an/r] を，3・4等は [-(u)en/r] を意圖したものと考えられる。3・4等の主母音に [e] を想定することについては，ブラーフミー文字表記のウイグル語の形式，建 khem 及び蓮 lem も參考になる(87)。またウイグルでは前舌の母音と結合する文字 k が w の前に立つことから(88)，3・4等の合口の介母は [ü] であった可能性が高い。

入聲の韻母 -t は，例外なく -r と表記されている。この音價については高田が詳しく論じている(89)。本稿でも彼が受け入れた有坂秀世の說「onglide だけの semi-rolled r」を採用する。この點については上記3.8節も參照せよ。

般 p' は明らかに例外だが，梵語の prajñā を表記する般若に見られるもので，この表現では般は [pa] のように發音されていたらしい。他の文字による資料でも同樣の現象が觀察される(90)。

その他の欄の例外的表記は，達官 trxw'n trx'n である。この語源が正しいとしても，非常に古い時代にトルコ語に導入され定着したこの形式は，古代トルコ語の音韻體系に同化していたものと考えられる。從ってこの例の例外性を漢字音の表記の側面から議論することは不毛であろう。また Ancient Letter に現れる地名に見られる泉 cn（酒泉 cwcn）に拘泥する必要もないだろう。一方延 y'n の例は，拗音介母が聲母に吸收され，1・2等のように發音されていたことを示す(91)。

3.11 臻攝（表18）

1等では合口字のみが在證される。ただし唇音の後では開口と同じ扱いなので，不 pr は開口の例と見なしてよい。從って，TⅡT では開口で -n/r，合口で -wn/r であった。これは各々 [-ən/r], [-un/r] を意圖したものと考えられる。Mainz では合口の尊 tswn, tsw だけが在證される。tsw は明らかに誤寫であり，tswn では TⅡT 同樣 [-un] が意圖されている。開口字が Mainz でどのように表記されていたかは興味深い問題である。TⅡT と同じなら單に -n と表記されたであろうし，ウイグルと同じであれば -yn と表記されていたであろう。[fər] と發音されていたと考えられる佛 βr を參考にすれば，TⅡT と同樣 -n と表記されていた可能性が高い(92)。

3・4等字では開口字のみ在證され，-yn/r と表記されている。これは [-in/r] を意圖したも

表18

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
痕				根 xyn
ən				恩 'yn
沒	不(合) pr			
ət				
魂	論 ṛwn	尊 tswn		門 myn
uən		tsw		本 pyn
				孫 swn
				敦 twn
				論 lwn
眞	神 šyn	人 ẓyn	辛 syn(6)	仁 žyn
i̯ĕn	信 syn	身 šyn		秦 tsyn
		眞 [cy]n		麟 lyn
				濱 pyn
質	一 'yr	一 'y	一 'yr(8)	乙 'yr
i̯ĕt	七 tsyr	蜜 pyr	'yr'(8)	筆 pyyr
			乙 'yr(6)	實 šyr
			七 syr'(8)	
			syr(8)	
			(c)yr(8)	
諄				舜 šwyn
i̯uĕn				倫 lwyn
				濬 swyyn
欣	懃 'ky(n)			
i̯ən				
文			軍 (kwn)(3)	訓 kwyn
i̯uən			gwn(6.1)	君 kwyn
				文 βyn
				問 βyn
物	佛 βr	佛 βr		尉 'wyr
i̯uət				

のだろう。ただし，輕唇音を聲母とする場合には介母は聲母に吸收され，1等の開口字と同じ扱いになっていたはずで，佛 βr(T II D), βr(Mainz) はそのことを如實に示している。これは現代の北京音と同じであり，ウイグル及びコータンのブラーフミー文字資料とも一致している。一方チベット文字資料では，合口の1等字と同じ扱いになっているという(93)。

Mainz の一 'y は例外だが，一心 'ysym に見られるもので，一種の連聲である。文字一については，同じ現象がチベット文字資料にも報告されており(94)，この例だけから入聲の韻尾の弱化を問題にすることはできない。

その他の欄では，文韻の軍 gwn が注目される。この韻に屬する字はウイグルでは，輕唇音化したものを除けば -wyn と表記されている。これは [-üin] を意圖したものであると考えられる。軍 gwn は，將軍 s'ngwn にみられるもので，古い時代にトルコ語に導入され定着した稱號である。通常の文・諄韻字との扱いの違いを問題にする必要はない。

3.12 宕攝（表19）

宕攝に關して述べる前に，-ng 及び -k を韻尾とする字全體にわたる問題を扱っておきたい。第1に，韻尾の -ng は T II T では例外なく -nk で表記されている。一方 Mainz では，宕攝・梗攝で失われ，通攝では -nk で表記されている。一般に10世紀頃の河西地方では宕・梗攝で韻尾は脫落する傾向があった(95)。Mainz の狀態は，この現象と軌を一にしている。

韻尾の -ng が表記されていない場合，韻尾全體の鼻音性については3種類の說がある。第1は，鼻音性が完全に失われていたとするもの；第2は，摩擦音韻尾 [-γ] に變化したとするもの；第3は，-ng が脫落し鼻母音化していたとするものである。高田は第3の說を支持しているが(96)，當時の漢語の發音としてはこの考え方が妥當であろう。一方庄垣內は，ウイグルに導入された漢字音では，鼻母音が殘っていた可能性はないとした(97)。庄垣內の議論は傾聽すべきものであるが，鼻母音を持たないウイグル語に導入された後の發音に關するものであり，必ずしも漢語の側の發音に鼻音性が完全に失われていたことを示すものではない。從って Mainz でも下敷になった漢語は鼻音性を保持していたと考えられるが，それを受容し讀誦していたこの資料の書き手の發音に，鼻母音があったかどうかは判斷できない。

第2の問題は入聲の韻尾 -k の音價である。チベット文字資料では等しく -g で，ブラーフミー資料では -kä ないし -hä: で，ウイグルでは -k あるいは -x で表記されている(98)。他の入聲の韻尾との並行性を考慮すれば，入りわたりだけの閉鎖音あるいは摩擦音を想定すべきであろう。

ここで扱う資料のうちで T II T では，-x/γ ないし -k で表記されている。すなわち德韻で -k，鐸韻で -x，その他では -γ が用いられている。全ての韻について例が回收できるわけではないので，どのような規則に基づいてこの3種が使い分けられているのか判然としない。上での議論に從えば，-k と -x/γ は各々漢語の閉鎖音及び摩擦音に對應しているように思われる。しか

表19

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
唐	當 t'nk	剛 x̌w	康 x'n(5)	藏 tsw
âng	謗(合) p'nk		藏 c'n(1)	郎 lw
				剛 xw
				廣(合) xw
				皇(合) xw
				x'w
				光(合) xww
				x'w
鐸	惡 ''x			洛 l'x
âk	薄(合) 'p'x			博 p'x
				錯 ts'x
				鶴 x'x
陽	長 c''nk	常 šw	將 s'n(6.1)	尙 šw
ja̯ng	障 cy''nk	尙 šw	sn(3)	襄 sw
	常 šy'nk	方(合) βw	張 c'n(4)	昌 cw
	方(合) β'nk	房(合) βw	長 c'ng(6.1)	良 lw
	網(合) β'nk		王(合) w''n(4)	長 cww
				梁 lww
				lwy
				常 šww
				涼 lwy
				樣 y'nk
				坊(合) βw
				房(合) βww
				王(合) w'nk
藥	若 z̧y'γ			
ja̯k				

し同様に -x と -k で表記するウイグルでは，両者の區別は先行の母音の性質（つまり後舌か，前舌か）によって決まっている[99]。TⅡTの状況は，基本的にこのウイグルの状況と同じであると考えられる。牙・喉音聲母でも k- と x- の區別は後續の母音の音價に依存していたので，この推定は當を得ているであろう。ただウイグルとTⅡTでは，その區別を支配する規則が完全

に同じではなかったのであろう(100)。

Mainz では -k の例しかみつからないが，ここでは例が少なく實際には -x もあったと推定される。實際 -k の例が殘っている韻では，對應のウイグルでも -k がみられるので，ウイグルとほぼ同じ狀況であったと考えられる。

宕攝の字は1等・3等ともに TⅡT では -'nk, Mainz では -w と表記されている。前者は明らかに [-aŋ] を意圖している。後者は1等では [-o] が意圖されていたと考えられる。[-u] ではなかったことは，チベット文字・ブラーフミー文字資料の表記から容易に推測できる。3等では拗音介母が主母音と融合して母音全體は前舌化していたと考えられ，前舌母音の [-ö] を音價として推定できる(101)。もちろん輕唇音を聲母とする字では介母の影響はなかったはずであるから，開口の字と同じ扱いである。入聲の例は TⅡT にしか存在しない。-'x/γ には [-ax/γ] を推定する。

その他の欄には韻尾を -n で表記した例が目立つ。これらは Ancient Letter 及び639年の契約文書に在證されるものであり(102)，他の資料より古い時代に屬する。漢語の韻尾の -ng（つまり [-ŋ]）は，ソグド語では音素としては存在しないので，この音を古くは -n によって表記したのであろう。後に漢語との接觸を深めるに及んで，-n と -ng を區別し後者を -nk で表記するようになったのであろう(103)。將 s'n, sn は，將軍 s'ngwn, snkwn にみえる例で，この形式の例外性を問題にする必要がないことについては上記參照。

3.13 庚攝（表20）

TⅡT では2等で -'nk，3・4等で -(')ynk が見られる。前者は [-aŋ]，後者は [-eŋ] を意圖したものと考えられる。後者の主母音が [i] ではなく [e] であることは，チベット文字・ブラーフミー文字資料の表記，さらには並行する咸攝及び山攝の3・4等に照らして明かである。これに對して Mainz では，ウイグルと同樣に2等にも3・4等にも -y を用いる。ウイグルの3・4等字に對して庄垣內は，ブラーフミー文字表記のウイグル語資料を參考にして [-e] を推定した(104)。この推定は當を得たものであり，Mainz の3・4等に對しても適用されるであろう。2等の -y については，ウイグルで後舌母音と結合する x- が聲母の表記に現れることから，庄垣內は主母音に ï を再構し，これより廣い [ë] を音價として推定した。チベット文字の -e'i ブラーフミー文字の -e なども，半狹ないし半廣の母音を想定させるので，Mainz の2等の -y に對しては中舌の [-ə] を再構しておくことにする。

入聲の字は例が少ない。確實なものとしては，益 'yγ と積 tsyk が各々 TⅡT と Mainz に1例ずつ在證される。どちらも3・4等字で，舒聲字と同樣主母音には [e] を推定できるだろう(105)。韻尾の -γ と -k については上記を參照されたい。釋 š' は例外だが，梵語音譯語釋迦 (<Skt. śākya-) にみえるもので，問題にする必要がない。

表20

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
庚二 ɛng 陌 ɛk	更 x̣y'nk 生 š'nk	行 xy 生 šy 百 (p')[x?]	庚 ẍyy(6)	庚 xy 衡 xy 賾 šyx 百 pyx 宅 cyx 白 p'x 擇 c'x
耕 ɛng			鸚 'y(5)	
庚三 i̯ɛng 庚三(合) i̯wɛng	境 k̦'ynk 敬 k̦'ynk 明(合) m'ynk	境 (k)[y] 敬 ky 永(合) wy	 丙 pyy(6)	京 ky 慶 ky 英 'y 敬 ky(n) 永 wy 明 my 璟 kyy
清 i̯äng 昔 i̯äk	精 tsynk 成 š'ynk 輕 k̦'ynk 益 'yγ	名 my 清 (tsy) 淨 tsy 聲 šy 城 šy 積 tsyk 釋 š'	城 zyn(1) 刺 cyg(6.1)	正 cy 聲 šy 令 ly 瀛 'y yyn 尺 cyx 石 šyk
青 ieng	逕 k̦'ynk		丁 t̲yy(6)	經 ky 定 ty 寧 ny

その他の欄の城 zyn は Ancient Letter の例である。鸚 'y は奇妙だが，鸚鵡子 'ym'wtsy にみえるものでおのずと例外である。

3.14 曾攝（表21）

例は多くない。TⅡT では1等の開口字は -nk(-k) と表記される。宕攝の -'nk と比べれば [-əŋ/-ək] を意圖したものと思われる。一方合口の -wk は [-ug] を表記したものであろう。Mainz の德韻の表記の -'k はこれに對して [-ag] を想定させるが，ウイグル及びチベット文字，ブラーフミー文字の表記と對照して(106)，あまりに奇妙である。恐らくは -'k によって [-əg] を寫そうとしたものと考えるべきであろう。ウイグル文獻でも比較的に古い層に屬するものには，'(aleph) が文字ゼロや y と交替する例が見られる。庄垣内はその音價として [ə] を想定した(107)。Mainz の表記はこの點で，古層のウイグル語の表記と似ていることになる(108)。

3等の入聲字は -yk と表記され，[-ig] を意圖したものと考えられる。色 š'k は例外である。色については，チベット文字資料やブラーフミー文字資料でも類似の現象が報告されている(109)。ここでは佛教徒による特殊な讀み方が反映されたものと考えておく(110)。

その他の欄の墨 mk' は，Ⅰ章でも指摘したように早い時代に借用された語で，その例外性は問題にならない。

3.15 江攝（表22）

ここでも例は非常に少ない。TⅡT に入聲字が2例知られているだけであり，2例とも -wγ と表記されている。核母音が廣めであったことを考慮すれば，[-oγ] を意圖したものと考えられよう。高田はチベット文字資料から，この韻では「少なくとも唇・牙喉音の下ではかなり前

表21

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
登	增 tsnk			層 tsynk
əng	能 nnk			恆 xynk
				弘(合) xwnk
德	得 tk	德 t'k	墨 mk'(5)	德 tyk
ək		北 p'k		
	惑(合) xwk			國 xwx
蒸			乘 šyng(6)	乘 šynk
j̊əng				仍 žynk
職		息 syk		識 šyk
j̊ək		極 kyk		極 kyyk
		色 š'k		域(合) wyk
				wy

表22

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
江 ång 覺 åk	學 xwγ 覺 ḳw(γ)		藐 myx(5)	江 xwnk 雙 šwnk

よりの a であった」としているが，ソグド文字資料は明らかにこれと矛盾する(111)。ウイグルの舒聲字の例も，ソグド文字表記と一致して核母音を w で寫している(112)。ソグド・ウイグル文字による表記と，チベット文字による表記の相違をどのように説明すべきか筆者には分からない(113)。

その他の欄の藐 myx は確かにチベット文字資料の 'meg と一致するが，梵語音譯語に見られる例なので，上述した問題を論じる際には多少値引きして考える必要があるだろう。

3.16 通攝（表23）

1等では東韻の字が Mainz に在證されるだけで，すべてが -wnk と表記されている。これは [-uŋ] を意圖したものだろう。核母音が [u] であったか [o] であったかは，文字の上から判斷できないが，チベット文字，ブラーフミー文字，ウイグルのブラーフミー文字資料における表記を勘案すれば，前者が妥當な推定である(114)。

その他の欄の公 xwn は公主 xwncwyh に見えるものである。古い時代の借用語の中の例外的形式を問題にする必要はないだろう。また啄木 tm'wx の t- についても同じで，借用語中の特殊な例として，その例外性に拘泥するには及ばない。また耨を佛教徒が入聲で發音していたことについては，上記Ⅰ章注27參照。

3等字でも例は多くない。確實なものは，TⅡT にのみ在證される。鐘韻は -wnk と表記され1等と區別はないが，拗音の介母と核母音が融合して，前舌化した母音を伴って [-üŋ] のように發音されていたであろう。一方入聲の六 ṛywγ では介母が融合する以前の狀態を示し，[-iuγ] と發音されていたものと思われる。

その他の欄の六 lwk, lwk', lyγ は，すべて敦煌出土の數字の表にみられるものである。この表記の搖れは，介母と核母音が融合してできた前よりの圓唇母音を，その圓唇性から [ü] で受け入れることも，前よりであることから中舌の [ï] で受け入れることもあり得たことを示しているのだろう。入聲の韻尾はその2つの場合に對應して，各々 -k 及び -γ が選ばれている。この例はまた，入聲の韻尾 -k の表記に，文字 k を選ぶか x(γ) を選ぶかが必ずしも一定していなかったことを示している。

表23

	TⅡT	Mainz	その他	ウイグル
東 ung 屋 uk		同 twnk 功 xwnk 空 ẍwnk	公 xwn(5, 6.1) 啄 t(5) 木 m'wx(5)	東 twnk 鴻 xwnk 公 xwnk xwn 穀 xwx
冬 uong 沃 uok			 耨 n'wγ(5) 督 t̲wx(6.1) t̲wγ(6.1)	悰 tswnk 統 twnk 宗 tswnk 僕 pwx 纛 twwx
東三 i̯ung 屋三 i̯uk	 六 r̥ywγ rywγ	中 [cwn]k	 六 lwk(8) lwk'(8) lyγ(8)	嵩 swnk 中 cwnk 融 ywnk 宮 kwynk 福 βw(x)
鐘 i̯wong	重 tcwnk 種 tcwnk 恐 kwnk			鐘 cwnk cwynk 龍 lwynk lww 用 ywnk
   燭 i̯wok				封 βwnk 雍 'wynk 重 tsw 玉 kwyx

4 資料の時代

上述した漢字音表記についての研究から，TⅡT と Mainz の書かれた時代について考察する。

敦煌出土の資料から，9-10世紀の漢字音を總合的に研究した高田は，次のような結論に達

した。敦煌出土のチベット文字資料には2つの層が見いだされる。それらはおもに宕攝・梗攝において -ng 韻尾が保持されているかどうかと，重紐2類の區別が組織的になされているかどうかの基準によっている。一方は，-ng を保持し重紐の區別を行っているのに對し，他方は兩者を失っている。相對的に前者が古く，後者が新しいことは明かであるが，高田はその違いを單に時代差によるものでなく，言語それ自體の性質の違いによって說明しようとする。すなわち，敦煌がチベットによって支配された頃（786/7-848）は，それ以前の中央集權體制の名殘として，佛典はなお長安の標準音によって讀誦されていた。しかしチベット支配を脫した後の，いわゆる歸義軍時代には，敦煌は漢人によって支配されていたとはいえ，完全な獨立國家になっていた。さらに中原における政情の不安も手傳って，標準的な發音は次第に失われ，代わってこの地方の方言（高田は河西方言と呼ぶ）が用いられるようになった[115]。

上で述べた敦煌資料中の2層は，前者が標準音に，後者が河西音に對應する。そのことの傍證として高田は，822年に建てられた唐蕃會盟碑中に見られるチベット文字表記の漢字音に言及している。この碑文の言語は標準語であったと考えられるが，そこでは韻尾の -ng は完全に保存されている[116]。

唐・五代にトルファンも含め中國の西方で，大ざっぱに言って2種類の漢字音が行われていたとする指摘は，TⅡT と Mainz とを比較するとき當を得たものであることが分かる。ソグド文字の表記から重紐2類の區別の有無を知ることはできないが，-ng の韻尾についてはTⅡTが完全に保存しているのに對して，Mainz は宕攝・梗攝でそれを失っている。從ってTⅡTが高田のいう2層のうちの前者に，Mainz が後者に屬することは明かである。このことからTⅡTは9世紀以前，Mainz は9世紀以後の資料であると推定できる。

TⅡT に見られる漢字音には，他にも古風な點が認められる。第一に鼻音聲母はなお鼻音要素を保持している。例えば明母は 'np- のように表記され，Mainz の p- とは對照的である。第二は Mainz に比べて拗音介母を表記する傾向が强かったにも拘らず，いわゆる假4等韻で拗音介母を表記した例がなく，介母析出以前の狀態を示す可能性があった。これと關連して，祭韻と齊韻の字は各々1例ずつあるが，異なる表記を受けており，『慧琳音義』では合流していたとされる祭韻と齊韻が，TⅡT ではまだ區別されていたように見える。第三に全濁の並母と群母は，まだ全清・次清と完全には合流していなかったことを示唆する表記も見られた。

これらの事象はそれ自體では餘りに零細で，他の解釋の可能性を排除するわけではないが，全體として見るとき互いに補强しあって，TⅡTの基礎にある方言の古さを證明する。『慧琳音義』以前の言語狀態を反映するとすれば，8世紀中ごろをTⅡTの下限とみなすことができるだろう。一方その上限は，輕唇音化や脫鼻音化，さらに全濁の摩擦音聲母の無聲化が完了していることから，7世紀中ごろに設定されるだろう。ところで，ソグド語譯の佛典の絶對年代を知ることは，飜譯あるいは書寫年代を明記した資料が1點しか存在しないため，必ずしも容易

ではない。ただ唯一年代を記した佛典は，上述したように開元16年（728年）のものであり，他の佛典もその前後に飜譯されたものと推定される。この推定はまた，漢文原典の成立年代や，後に紙背に書き込まれた文書の内容の分析，さらには佛典飜譯のスポンサーであったソグド商人の中國での活動の時代を勘案しても妥當である(117)。TⅡT はソグド人佛教徒によるものと考えられるから，他のソグド語佛典同様，8世紀前半に成立したものと考えて大過ないのではなかろうか。

一方 Mainz に見られる漢字音は，上で繰り返し述べたように，ウイグル語譯の『慈恩傳』の中の漢字音と原則として同じである。『慈恩傳』のウイグル語譯は，北庭出身のウイグル人僧侶シンコ＝サリ都統の手になるものである。彼は10世紀末から11世紀にかけて活躍していたことが知られているので(118)，Mainz の年代もそれとあまり異ならない時代に設定できるだろう。

Mainz の時代については，別に内容からも推測が可能である。『金剛五禮』は上述したように，敦煌出土の寫本中に多數見いだされる。敦煌出土の禪宗文獻の時代層位について研究した上山によれば，この文獻は後期（860–1000年頃）のものだという(119)。また Giles が，『金剛五禮』の寫本 S1674，S6173 について，紙質から10世紀のものだとしていることも參考になる(120)。Mainz のテキストはトルファン出土であるものの，系統としては敦煌出土の一グループと一致するので，これらの敦煌寫本と同時代の產物である可能性が高い。實際10世紀に，敦煌とウイグルが支配するトルファンとの關係が密接であったことを裏附ける證據が提出されている(121)。これらを總合すれば，Mainz は10世紀（恐らくは後半）に成立したと考えて間違いないだろう。

Mainz に關するもう一つの重要な問題は，これを生み出した佛教徒集團が，ウイグル人であったかソグド人であったかの問題である。筆者は最近，ウイグル人佛教徒は改宗の後しばらく（たぶん10世紀頃）は，ソグド語でも佛典を書いていた可能性があることを指摘した(122)。10世紀のものと考えられるソグド語佛典に，ウイグル語の要素が含まれていることが理由であった。Mainz にみられる漢字音がウイグルに導入されたものと同じであることから考えて，これがソグド語・ソグド文字に精通したウイグル人佛教徒によって書かれたとする說を，再び强調しておきたい。

Ⅳ　ウイグル語に導入された漢字音に關する2・3の問題

1　資料の問題

前節でソグド文字で表記された漢字音を扱った際，ウイグル語譯の『慈恩傳』の中の漢字音にも言及した。ウイグル語・ウイグル語文獻に門外漢である筆者が，ウイグル語の專門家によ

って提出された資料を利用した際に感じた問題點を，ここではいくつか指摘しておきたい。

第1は，正確な文字轉寫資料の必要性である。この點は既に高田が指摘し，庄垣内は實際に文字轉寫の形で資料を提出している[1]。しかしそれでも十分ではない場合がある。特に文字x（或はγ）の轉寫は深刻である。『慈恩傳』の寫本では文字xに點を附けたẍも使われているが，これが庄垣内の轉寫では完全に無視されている。また上でも觸れたように，この寫本には尻尾の長短による -x と -γ の區別があるらしい[2]。例えば秤量の單位の石は šyγ と綴られているという。入聲の韻尾 -k に對應する文字が，他の漢字音表記において -x であったか -γ あったかは興味深い問題である。

この種の轉寫態度に關する問題以外にも，個々の文字の轉寫が研究者ごとに一致していないという問題もある。例えば綱維寺を，耿世民は qawïsï-ï と轉寫し，庄垣内は qovisi-i と表記する。Röhrborn は kovisi として，同時に文字轉寫として q̈'vysy y をあげる[3]。この場合，綱がẍw と綴られていたのか，ẍ' と綴られていたのか判斷に苦しむ[4]。さらに，Röhrborn の發表した第7卷のテキストとそれに添えられた文字轉寫によれば，院には βyn，wyn，yyn の3種類の表記法がある[5]。一方庄垣内の研究では wyn だけが登錄されている[6][7]。この字の轉寫は，喩母の合口字がどの文字によって轉寫されたかの問題に關わり重要である。その見地から，もう一度寫本に當たって讀みを檢討する必要がある。

第2は，ウイグルに導入され定着した漢語が，前舌の母音を含むのか後舌の母音を含むのか，可能な限り明らかにしておくことである。例えば檁 lym は後舌母音を含む（つまり lïm）ことが，Kara によって明らかにされている[8]。ところが檁が屬する侵韻の韻母 (-i̯əm) は，ウイグルでは一般に -im になっていたと考えられる[9]。核母音の前舌性は，例えば金 kym で k- が選ばれていることからも推測される。從って檁が後舌の扱いを受けていることについては，なんらかの說明が用意されなければならない。この點については下記も參照せよ。

第3には，ウイグルに導入された漢字音研究の基礎資料となる，『慈恩傳』の全テキストを早急に準備することである。例えば從來提出されていたテキストには，泥母の字で脫鼻音化を示すものがなかった。それ故庄垣内は，「『慈恩傳』の接した漢語には脫鼻音化のなかった可能性もある」としている[10]。しかし Röhrborn が最近校訂した第7卷に δyyn が在證され，彼はそれを漢語の年 nien に比定した。この解釋が正しければ，ウイグル語譯の『慈恩傳』の基礎となっている漢語にも，確實に脫鼻音化があったことになる。脫鼻音化の例としては他にも，第5卷に現れる沮末 δyrp'r があげられる。沮（ds ʿi̯wo 或は tsi̯wo）が δyr と綴られるのは，譯者であるシンコ＝サリが涅 niet に讀み誤ったからに違いなく，この例からも脫鼻音化の存在は明かである[11]。

2 不規則な對應

上述したとおり，Mainz にみられる漢字音と『慈恩傳』中の漢字音は基本的に同じである。しかし兩者が一致しない場合や，ウイグルが豫想に反する表記を示すものがある。それらの一部は明らかに誤寫に屬するものであろう。ここでは誤寫とは考えにくいものの一部で，說明が可能と思われるものについて解說する。

2.1 聲母

2.1.1 有聲と無聲の搖れ

端母の帝は豫想される *ty ではなく δy で表記されている。Röhrborn はウイグル語に導入された後，母音間で有聲化したものだとする[12]。帝の場合には常に δy で表記されていて，これがウイグルで字音になっていた可能性が高い。一方借用の後，語中で散發的に有聲化した結果とみられるものがある。皇太子 xwt'yδ'sy (xwt'yδsy の誤寫)の子 *δsy はそのような例である。子は通常 tsy と表記されたが，この場合に限って *δsy で現れる。大毘婆沙論 t'y py p'ž' lwn の沙 ž' もまた，この種の散發的有聲化の結果ではなかろうか[13]。

有聲音が期待されるところに無聲音が現れる例としては，日母が š- で表記される場合をあげることができる。この聲母は本質的に有聲で，通常 ž- で表記されている[14]。この現象には2つの異なる背景を想定する必要がある。第1は，後期のウイグル文獻では ž と š の區別が混亂し二次的に š と表記されるようになったものがあることである[15]。第2は，ž がウイグル語本來の音韻體系に屬さないことから，ž を含む外來語を受容するとき，ウイグル語の音素のうちで ž に最も近い š によって，置き換えられたものがあることである。Maitrisimit のセンギム本のような古い寫本に見られる曆日 lykšyr は[16]，この種の例とみなされよう。どちらの場合にも，ウイグル語の音素體系への同化が問題になっていることは事實である。しかし前者では，大量の漢字音の導入後（つまりウイグル字音の成立後），一旦 ž はウイグル語の中に定着した。その後漢字音が次第に土着化する過程で，再び ž が š と混同された。後者の場合には，大量の漢字音を導入する以前の借用語期に起こった一種の土着化である[17]。

2.1.2 道人 twyyn について

ウイグル語で佛教僧侶を意味する twyyn は，一般に漢語の道人に由來するものと考えられている[18]。道人という漢語は，唐代以前には確かに佛教僧侶を意味していたので，意味の面からは問題がない[19]。問題はこれが，ウイグル文獻中の通常の漢字音からは餘程逸脫していることである。特に人に對應する yyn は奇妙である。なぜなら人 ńźi̯ěn は日母の字であり，日母は上述したように ž ないしは š で表記されるからである。一方道 d'âu が tw と綴られることについては，二重母音の âu がウイグル語の音韻體系に同化して，單母音化したものと說明で

きるので問題がない。期待される δ- ではなく t- が用いられている點については，下記を參照せよ。

庄垣内は，人が yyn と表記されることを，仲介言語の存在を想定して説明しようとする。一方脚注では，筆者の提案を引用し，別の説明の可能性も示唆している[20]。ここでは筆者の提案をやや詳しく論じておきたい。

上でも述べたように，道人が佛教僧侶を意味したのは唐代以前である。從ってこの意味で道人が古代トルコ語に借用されたのは，唐代以前であったと考えなければならない。そのころは脱鼻音化が始まる以前であり，日母の音價は ñ [ɲ] であったことが知られている[21]。それ故道人が借用された當時，人は ñi̯ěn のように發音されていて，古代トルコ語では ñin ないし ñïn のような形式で受容されたであろう。

古代トルコ語には，ñ 方言と y 方言と呼ばれる 2 種類の變種が有ったことが知られている。例えば ñ 方言の añïγ「悪い」は，y 方言では ayïγ となる。この 2 つの變種は便宜上「方言」と呼ばれているが，實際には地域的な意味での方言ではなく，資料の時代差 (ñ>y) と關係があるらしいことが最近明らかにされている[22]。從って古い時代に導入されていた ñin, ñïn は後に yin, yïn に變化したことになり，日母の不規則な對應は説明される。

この説明の弱點の一つは，ñ を含む語には通常 ñ と y の 2 種類の形式が知られていることである[23]。toyïn が本來 *toñïn であったのなら，實際にその形式が在證されることが期待される。にもかかわらず，佛教ウイグル語の基礎語彙に屬し佛典に頻出するこの語に，*toñïn というヴァリアントは 1 例も報告されていない。筆者は，この問題は次のように解決できるのではないかと考えている。通常の ñ を含む語とは異なり，*toñïn の場合には ñ の後にさらに鼻音が續く。それ故 ñ>y の變化が後續の鼻音の存在によって，他より早い時期に徹底して起こったものと考えられる。功德を意味する buyan は並行する例である。筆者がかつて明らかにしたとおり，この語の直接の語源はソグド語の pwny'n(yh) (<Skt. puṇya-) でしかありえない[24]。この場合にも *buñan, *bunyan という形式は全く在證されていないが，ñ から y への變化（異化）は，後續の鼻音によって促進されたのであろう。

もう一つの問題は，古い時代には漢語の全濁聲母の無聲化など考えられず，道 d'âu は *δ'w のように表記されていることが豫想されることである。この點の十分な説明は筆者にはできないが，ソグド文字では文字 δ は本來摩擦音を表すので，有聲の閉鎖音を表記するには文字 t を選ばざるを得なかったのではなかろうか[25]。

2.1.3 喩母の合口と影母

喩母の合口は，TⅡT でも Mainz でも w- で表記されている。ウイグルでも多くの場合 w- が用いられているが，稀に β- で寫されているものがある。ソグド文字の音價の見地からは，β

には有聲の摩擦音 [v] (或は [β]) が想定され，本來半母音であったと考えられる漢語の聲母とは少し異なる。

從來知られている例では止攝 4 等字に β が現れるという[25a]。しかし漢語の喩母の合口で止攝 4 等の聲母の音價が，他の攝のそれと異なっていたとは考えにくい。實際止攝 3 等合口の爲は wy とも βy とも表記されている[26]。また上で言及した院の轉寫 wyn, βyn, yyn も參照されたい[27]。ここで參考になるのは，輕唇音を聲母とする夫や副が，期待される βw ではなく ww と表記される場合があることである[28]。本來ウイグル語には存在しない音である w は，v や f と混同されることがあったのではないだろうか[29]。

同樣に喩母の合口字である于が 'ww と表記されるのも，本來 [wu] であったものが [uu] のように發音されたことによるのだろう。この例によって，于が聲門閉鎖音（つまり影母と同じ扱い）を伴って發音されていたと考えるむきもあるが，類似の現象を示すチベット文字資料でも，高田は喩母と影母の合併には否定的である[30]。實際ウイグル語では，語頭の母音は聲門閉鎖音を伴わなかったと考えられるふしがある。ウイグル語に見られる初頭の i/ï- と yi/yï- の交替は，そのことを考慮すればよく理解できる[31]。從って于 'ww 同樣，喩母と影母の合併を示すように見える喩母の瀛 'y も，*yy の書記上のヴァリアントとみなしてよいと思われる。逆に影母の益が yyk と表記されていることも參考になる[32]。

2.1.4 ts- と s- の交替

精母は ts- と轉寫されるのが普通だが，s- によって表記される場合がある。ウイグル文獻全般を調査してみると，この現象は精母に限られず清母や從母にも認められる。この背景には，ウイグル語にない音 ts が s にとってかわられたことがあったと思われる。ただこの「ウイグル化」は組織的な現象ではなく，s は ts に對する交替形として並存していたらしい[33]。

說明が困難なのは，s と發音されていたはずの心母と邪母の字が，まれに ts- と表記されている事實である[34]。同じ事例は1003年のマニ教ウイグル語のカレンダーにも認められる。そこでは辛 sịěn が tsyn と綴られている[35]。庄垣內はそのうち寺 tsy について，この例が弘福寺 xwnkβwtsy にだけ見られることから，福の入聲の韻尾 -k の脫落の代償として s- が ts- に變化したと考えた。この說明には說得力があるが，宣 tswyn や辛 tsyn には適用できない。さらに『慈恩傳』には弘福寺に對して xwnkβwxtsy も在證され，Röhrborn は -x の脫落を誤寫とみなしている[36]。

筆者はかつて辛 tsyn の問題を扱ったとき，これを一種の過剩矯正の事例とみなした。つまりウイグル語にない漢語の發音 ts を意識するあまり，本來 s で始まる字まで ts で發音したものと考えた[37]。この說明は當面受け入れてよいのではないかと思われる。

2.2 韻

2.2.1 韻母の表記

韻については，母音表記に用いられる y と w の文字の區別が比較的に困難なことと，書寫の際の誤寫の可能性などから，聲母の場合ほど對應の例外を特定しにくい。例えば恭 kiwong が kynk と表記されることに關して，庄垣内は「介母 i を直接反映しており，韻母 iŋ を立てたい」としている。一方 Röhrborn は恭が kynk 以外に kwnk と表記されている例に言及して，kynk を誤寫とみなし，küŋ と轉寫している[38]。

璟 kiwɐng kyy の場合，日本の漢音ケイから，-yy は [-ei] を表すと考えられている[39]。しかし璟は合口字で，この種の撮口呼の介母は前舌化した圓唇母音になる傾向がある[40]。從って璟は *kwy [küe] と表記されていることが期待され，kyy は誤寫ではないかと思われる。[-üe] のような二重母音は後に單母音化して [-ü] に變化する傾向があった[41]。この例をここで特に問題にするのは，下で扱うトルファン出土の漢字の注音資料に見える音注，「頃音强」の背後にあるウイグル音を考えるためである。頃 k'iwäng は庄垣内が考えたように，璟と似た發音を持っていたと推定され，後の時代には單母音化して [kü] と發音されたであろう。一方强 g'iang は陽韻の 3 等字で，[kö] と發音されていたはずである。兩者はそれほど違った發音ではないので，この例が『慈恩傳』にみられる漢字音體系では說明できないとする說は見直されてもよいのではないかと思う[42]。

重 tsw は，本來 -ng が失われることのない通攝の字である。ここで -ng が見られないのは，單に誤寫によって脫落したものか，コータンのブラーフミー文字資料に在證される通攝字の -ṅä=[ŋ] の脫落のように，漢語として一步進んだ狀態を示すものか，にわかには判斷し難い[43]。

2.2.2 入聲の韻尾

入聲の韻尾のうち -t は，一樣に -r と表記されていて問題がない。一方 -p は，『慈恩傳』では例外なく -p で寫されているものの，『慈恩傳』以外の資料では -β で表記されているものがある[44]。庄垣内はこれを「韻尾 b，v，ゼロは丁度 b>v>φ の發展過程を示す」と說明している[45]。この理解はそれ自體としては問題ないが，ウイグル文獻中で -p と -β の例の出現狀況を調べると，必ずしも -p を持つ文獻が -β を示す文獻より古いわけではない。それどころか -β の例を持つ文獻の方が，一般的にいってより古い層に屬するように思われる。

織物の名稱の立機 liəp kjɐi は，敦煌出土のウイグル文書では lyβky，l'wky と表記されている[46]。敦煌出土のウイグル文獻はほぼ10世紀頃のものであり，ウイグル文獻の中では最古層に屬するものといえる。また庄垣内が引用する爛 t'β は Maitrisimit のセンギム本に，甲 x'β は『天地八陽神呪經』の京都本に現れるが，どちらも比較的に古いテキストである[47]。さらに秤量の單位の合 x'β も，尺 cyx などと同樣古い時代の借用語だと考えられる[48]。庄垣内が

引用するもの以外でも例えば粒 lj̣əp lyβ は，10世紀後半の文書に現れるので古い形式である[49]。

無論 -β が -p に變化したのではあり得ないので，このあり方は奇妙でありなんらかの説明を要する。筆者は現在のところ次のように考えている。漢語の入聲の -p は內破音で發音されていたと考えられるので，ウイグル語に導入されたとき，-p で表記されることも -β（あるいは -w）で表記されることも可能であった。實際 lyβky に關しては，同時代のソグド語文獻に lypky という表記が在證される[50]。また京都本より古いとされている『天地八陽神呪經』のロンドン本では，甲に對して x'p を當てている[51]。その後大量の漢字音が導入されるに至って，一種の規範意識が働きこの韻尾はすべて -p で表記されることになった。『慈恩傳』はそのような均質化を經た段階を代表しており，-β で表記されたものはそれ以前に導入され定着していた借用語である[52]。

入聲の韻尾に關するもう一つの問題は，-k が脫落したように見える例の扱いである。庄垣內によれば『慈恩傳』にはそのような事例として，僕 pw と副 βw の 2 例が在證される。上述したように副には βwx という形式もみられるので，βw は單なる誤寫と考えてよい。前者は僕射の場合で，pwxy' と pwšy' の 2 種類の表記があるというが，この問題は射の發音に j̣a と dz'j̣a の 2 種類があるためにさらに複雜になっている[53]。僕射という稱號では，射は j̣a と讀まれていたことが知られている[54]。從って pwxy' にはなんら問題がない。pwšy' の方はこの讀みが正しいならば，pwxy' の誤寫であろう。庄垣內が言うように，文字 x と š はよく似た形をしている。從って少なくとも『慈恩傳』中の漢語には，入聲の韻尾が脫落した例はないことになる[55]。

2.2.3　3・4等字の母音

上で檁 lïm について，同韻（侵韻）の他の字が一般に前舌母音を伴って發音されていたことと矛盾するという問題に言及した。この種の例は他にも存在する。曆 liek は通常 lyk と表記されていて，前舌母音が含まれていたことが分かる。ところが1003年のマニ教ウイグル語のカレンダーでは，曆日が lyxzyr と綴られている。この例では -x- から判斷して，先行の母音は後舌の母音であったろう[56]。並行する例には石 šyx šyk がある。šyx は秤量の單位を示す場合の形式である。また上で言及した尺 cyx も，『慈恩傳』の通常のあり方に從えば，*cyk が期待される[57]。蜜 mj̣ĕt は質韻に屬し，通常は前舌母音を伴ってウイグルに導入されるはずである。しかしウイグル語化した myr は，後舌母音を含んでいる[58]。

上で引用した例がどれも比較的古い時代の借用語であることは注目される。lym は Maitrisimit のセンギム本に既に在證される[59]。lyxzyr は1003年のカレンダーに現れるので，比較的古い文獻中の例と見なし得る。また秤量の單位である石 šyx や尺 cyx が，古い時代の借用語であることは説明を要しないだろう。cïγ は11世紀に遡るカーシュガリーの辭書にもみ

える[60]。さらに蜜 mïr は，明母が脱鼻音化する以前の状態を示している[61]。

この觀察が正しいとすれば，次のような推定が成り立つのではないだろうか。『慈恩傳』の漢字音體系では前舌母音を含むものとして導入される3・4等の字は，比較的に古い時代には後舌母音を持つものとして受け入れられることがあり得た。無論すべてが後舌系として扱われたわけではなかった。例えば Maitrisimit のセンギム本には lykšyr（<曆日），『天地八陽神呪經』のロンドン本でも lykzyr が見られる。さらに稱號の刺史 tś'i̯äk ṣi は，ルーン文字碑文でも čigši のように，前舌母音を伴っていた[62]。入聲の韻尾の -p/β の場合と同じように，本來前舌，後舌のどちらでも導入され得たものが，後に前舌に統一されるようになったのであろう。

弟子 tytsy は早い時期の借用語とみなされるが[63]，後舌母音を含んでいる。子 tsi が tsï と讀まれることは漢語の側の，齒頭音と結合する母音 [i] の [ɿ] への變化の反映であると考えられている[64]。しかし上の議論を參考にすれば，この例を [i] から [ɿ] への變化の證據として使うことは危險である[65]。

2.3 聲調

聲調言語ではないウイグル語に導入された漢字音は，本來の聲調の區別を失っていたと考えられる[66]。ところが『慈恩傳』では，上聲字に二重母音表記が多く現れ，羅常培によって發見されたチベット文字資料の狀況とよく一致することが指摘されている[67]。このことは2つの點で檢討を要する。第一に，高田は羅常培の指摘を再檢討し，次のような否定的な結論を下した。「……母音を重ねるなどの，見かけの上での長母音表記は決して上聲に特徵的なものとすることは出來ず，入聲以外の全ての聲調に現れ得る。恐らくは，外國文字によって漢語を表記しようとする場合の，漢語音節の相對的な長さに由來するものと考えるのが正しいと思われる」[68]。第二に，TⅡT や Mainz などのソグド文字による資料ではこの現象はみられない。

これらの2つの問題は，二重母音表記が漢語の側の音價の違いになんら對應しないことを示唆する。實際同じように -w と -ww の2種類の表記がある陽韻の開口3等字では，次のような分布が見られる[69]：

-w	-ww	-wy
梁（平）lw	梁（平）lww	梁（平）lwy
良（平）lw	張（平・去）cww	涼（平・去）lwy
張（平・去）cw	長（平）cww	
蔣（平・上）cw	相（平・去）sww	
襄（平）sw	常（平）šww	
章（平）cw	楊（平）yww	
璋（平）cw		

昌（平）cw

尙（去）šw

揚（平）yw

この分布から判斷すれば，-w と -ww 及び -wy の違いが聲調に依存しているのではないことは明かである。また去聲字の戊に見られる pww と pw の交替や，去聲字の義の表記 kyy などから考えて，魚韻の上聲字に -ww で表記された例が多いのは單に偶然であろう(70)。母音を重ねることが長母音を示すものなら(71)，この場合も高田が推定したように，漢語の特に介母を含む母音が，ウイグル人には少し長めに意識されたのかもしれない。

3 いわゆる「ウイグル字音」の問題

3.1 高田の「ウイグル字音」說

トルファンで發見された，佛典に對する2種類の注音資料を研究した高田は，その音注の基底にはウイグル語に導入された漢字音があることを明らかにした(72)。その際，この2つの注音資料がモンゴル期のものであることと，ベースになっている漢字音が中古漢語型の言語であることも發見した。古い時代に導入された漢字音が後の時代まで用いられていることから，彼はウイグル語にも，日本語や朝鮮語に導入されたのと同じような性格の漢字音，すなわち字音が存在したと結論した。高田のこの指摘は，ウイグル語中の漢語の要素に關して從來知られていたことを說明する原理を提供したという點で，眞にエポックメーキングな發見である。ウイグル語に字音があったとする彼の主張は，Kara によっても受け入れられ利用されている(73)。

高田のウイグル字音說には，もう一つ重要な主張が含まれている。彼によれば，これら2種類の注音資料から想定される漢字音は，その聲母において大規模な融合が見られるものの，韻母についてはきわめて保守的で，漢語の體系からの逸脫は少ない。特に -ng の韻尾を持つ字が例外なく -ng の韻尾を持つ字によって音注されている事實は，ベースになった漢語が，宕攝・梗攝においても -ng を保持していたことを示唆する。一方ウイグル語に導入された通常の漢字音では，宕攝・梗攝の -ng は脫落しているから，兩者が同一の漢語をベースにしたものとは考えられない。彼の研究によれば -ng の韻尾を組織的に保存するのは，チベット文字資料では第1類で，長安の標準的發音を反映する言語である。從って通常のウイグル語文獻中の漢字音は河西方言をベースにしているのに對し，2種の注音資料のそれは河西方言よりは古い時期（9世紀）に，トルファンで行われていた標準音から，經典讀誦音として導入されたものである。つまりウイグル人は，ちょうど日本人が吳音や漢音などの複數の字音體系を持つように，2種類の字音を使い分けていた(74)。下ではこの高田のウイグル字音說が持つ問題點を扱うことにする。

3.2　字音が存在したことの證明

ウイグル語文獻に見られる，河西方言に基づく通常の漢字音がある時期に導入され定着し，漢語の側の變化にもかかわらず，基本的に導入當時の形式で發音されていたことは，モンゴル期に書かれたものと特定できる文書に，この種の河西方言形が現れることから明かである(75)。高田はさらに，モンゴル期の世俗文書に現れる定惠 tykwy の定 ty が，河西方言形であることも附け加えている。借用語だけでなく，その時々に新しく作られる人名が河西方言形であることがまさしく，字音の存在を推定させるという(76)。

字音を定義することは容易ではないが，字音であることにはいくつかの必要條件がある。その一つは，漢語の音韻變化とは獨立して導入時の漢字音を保持することである。上の議論で用いられた論據は，基本的にこの條件に係わっている。ただしその限りでは，借用語についても同じことが言える。第二の條件は，原則としてすべての漢字に對して，1つ（ないし複數）の漢字音が用意されていることである。これが字音と借用語（いわゆる語音）とを區別する基準になる。とはいえこのことを證明することは容易ではない。上で言及した固有名詞の形式は，借用語ではあり得ないという意味で，第二の條件を滿たすものである。Csongor もまたウイグル語に入った通常の漢字音が，單なる借用語とは異なる點を强調している(77)。

庄垣内は『慈恩傳』の譯者のシンコ＝サリが原文を誤解し，本來固有名詞ではないものまで固有名詞と見なし，對應の漢字音を與えている例をいくつか指摘している。そして次のように結論した。「このような固有名詞に關する誤譯と，その漢語の音寫とは Šiŋqo Säli が飜譯に際して定着していた名稱を用いたのではなく，原典の漢語を當時の發音形式に從って寫し入れたことの證據となる。すなわち，『慈恩傳』中の漢語形式は，基本的には譯出當時の漢語（漢字）の發音形式であったことを示している」(78)。字音が存在すれば，この發音形式は必ずしも當時の漢語の發音である必要はないが，シンコ＝サリが誤って固有名詞と見なした漢字にまで，對應する發音形式を與えることができたという事實は，潜在的に全ての漢字に對してウイグル式の發音が用意されていた證據になるだろう(79)。

3.3　2層のウイグル字音の問題

ウイグルに入った漢字音は，2つの必要條件を滿たしているので，字音であったと考えて間違いないだろう。ではウイグルの字音には，高田の主張するように2種類存在したのだろうか。つまり『慈恩傳』に見られるような通常の漢字音以外に，それより以前に導入され定着した字音が本當に存在したのだろうか。

高田の主張にはいくつかの問題點があることは，誰もが認めるであろう。第一に，彼の言うような漢字音が，ウイグル文字で表記された資料は見つかっていない。高田は『天地八陽神呪經』のロンドン本の，八陽經 p'r y'nk ky の例を引いて，陽が yw ではなく y'nk と表記されて

いることから，この y'nk に古い層の字音の現れを見ようとする(80)。しかしこれには，下で論じるように別の説明が與えられるし，經が *kynk ではなく ky と綴られていることも，彼の説には不利である。

第二は，Mainz の存在である。高田は2種類の字音が存在する背景に，用途の違いを想定している。つまり「一は經典讀誦としてのそれであり，一はそういった制限のない字音である」(81)。彼によれば經典讀誦用には古い層の字音が用いられたことになる。ところが，Mainz は，まさに經典讀誦用に作られたものに違いない。確かに高田は，上で言及した Kara の紹介するウイグル文字表記の漢語佛典の存在に觸れ，「……時の推移にしたがいウイグル文獻に現れるような河西方言型の字音體系もまたそれとは別個の字音として形成されていったのではないかと考えられる節がある」としている(82)。しかしこの説明はモンゴル期のものである當該の資料にはあてはまっても，10世紀(後半)のものと考えられる Mainz には適用できない。10世紀のトルファンで，後のウイグル文獻中に見られるものと基本的に同じ漢字音によって，佛典が讀誦されていたのである。

では高田の主張する古い層の字音は存在しなかったのだろうか。もしそれが存在しなかったとすれば，高田の扱った2種類の注音資料のベースにあった漢語はどんなものであったのだろうか。實際この注音資料で，韻尾に -ng を持つ字が例外なく -ng を持つ字で注音されているという事實は，宕攝・梗攝でも -ng が失われていなかったことを想定させる。例えば「冰音平」から，この漢語の體系では，曾攝の冰 pjəng と梗攝の平 b'i̯wɛng が同じ發音であったことになる。平はウイグル文字では pyy と表記されているし，冰の例はみつかっていないようだが，同じ韻に屬する乘 šynk，仍 žynk の例から，通常のウイグル字音では *pynk と表記されていたはずである(83)。

このような論據があるにもかかわらず筆者は，高田が扱った2種類の注音資料のベースにあった漢字音は，通常のウイグル字音そのものであったと考えている。その根據の第一は，Kara の紹介した資料の存在によって，實際にモンゴル期にこの音で佛典を讀誦していたことが分かることである。問題の2種類の注音資料も，そのような佛典の讀誦を容易にするための便宜であったと考えられる。第二に，高田の主張するように，古い層の字音が9世紀に導入されたとすれば，それらから100年ほどの間に，同じように佛教文化を背景に別の字音の體系が導入されたことになる。一般的に考えてこれはありにくい狀況である。第三に，注音資料中の「炎音嚴」と「鹽音嚴」から，喩母の字である炎 i̯äm と鹽 i̯äm が疑母の嚴 ngi̯ɛm と同音であったことが分かることである(84)。通常のウイグル字音でも疑母と喩母の合流はなかったが，何故か嚴だけは yym と表記されている(85)。2つの注音の背景には，通常のウイグル語文獻におけるように，嚴が yim のように發音されていたことがあったに違いない。

-ng 韻尾が完全に保存されていたようにみえることについては，次のような説明ができるか

もしれない。上でも述べたように -ng が脱落した宕攝の字は -o ないし -ö と發音され，梗攝の字は -e と發音されていたと考えられる。ところが他の攝では -o/ö や -e で終わる字は存在しない。従ってこれらの攝の字が他の攝の字と同音になることはなかった。高田によれば -ng 韻尾の脱落の結果10世紀の敦煌出土の漢文寫本では，梗攝字が蟹攝字としばしば通用する。しかし問題の注音資料ではそのような例が全く見られないことから，-ng が脱落していなかったと結論する。ところがウイグル語では梗攝 3・4等が -e であるのに對し，蟹攝の 3・4等は -i で發音されていたらしい。そのことはブラーフミー文字で表記された資料で，閉 piei が pi，定 d'ieng が dhe，丙 pi̯wɐng が pe と綴られることから容易に推測される(86)。従って -ng が脱落していたとしても，宕攝や梗攝の字は他と區別できたことになる(87)。

確かに上で引用した「冰音平」の例は，この説明では解決できない。しかし字音は定着後，散發的に人爲的改變を蒙った可能性がある。例えば Kara の紹介した資料の中に寶 pâu が pwx と表記された例がある。これは中國語の音韻史の觀點からは全く説明がつかない。この例に關して Kara は，次のような説明を與えている。寶はウイグル語では通常 p'w と表記されそのように發音されていた。ところが中古漢語から近世漢語へ變化する際に入聲の韻尾が脱落し，近世漢語の發音形式からだけでは，その字が本來入聲であったのかどうかは分からなくなった。正統のウイグル字音では入聲の韻尾は保持されるので，モンゴル期のウイグル人が，近世漢語とウイグル字音の違いを强調するあまり，本來入聲ではない寶にまで入聲の韻尾 -x を附加した(88)。「冰音平」の例も，-ng の韻尾が脱落することのない近世漢語に接したウイグル人による人爲的な改變と考えれば説明できよう。

もちろん上で述べたことで高田の論據がすべて覆されたとは考えない。それ故この問題は今後なお檢討されつづけるべきであろう。筆者の説明も可能であり，必ずしも 2 種類の字音を想定する必要がないことが認識されれば，拙論のこの部分の目的は十分達せられる(89)。

3.4 ウイグル字音の成立と變容

本節ではウイグル語には，通常ウイグル文字で表記されるタイプの字音しか存在しなかったという假定に基づいて，その成立と導入後の變容について考察してみたい。

3.4.1 字音の成立

漢語とウイグル語（あるいは古代トルコ語）が接觸した際，最初は借用が行われたに違いない。いわゆる語音の借用である。特にウイグル人がトルファンに定住し佛教化した後，すなわち 9 世紀後半の西ウイグル國の成立後は，中國佛教への依存から漢語の使用が頻繁になったであろう。ウイグル人は佛教及び佛典の導入に際して，トカラ佛教と中國佛教の兩方に依存したようである(90)。このことは西ウイグル國の立地を考慮すれば當然のことであった。従ってト

カラ佛教經由で導入されたインド語の要素と，中國佛教經由で導入された漢語の要素には，ある程度並行する狀況を想定できるであろう。

Röhrborn によればウイグル語におけるインド語の要素は『慈恩傳』の飜譯時には，單に借用語とは見なし難い段階にあったという。つまりすべての佛教梵語の要素が，潛在的にウイグル語の要素となり得る段階に達していた(91)。漢語でも單なる借用の段階を脫すると，すべての漢語すなわち漢字がウイグル語の要素となり得るようになったと思われる。これがとりもなおさず字音の成立である。そしてそれが起こったのは，西ウイグル國の成立から Mainz までの間，言い換えれば9世紀後半から10世紀後半までの間である。

この字音の基礎になったのは，高田のいわゆる河西方言であった。ただ完全に均質なものではなく，新舊の要素が若干は混在していた。例えば王の字は，『慈恩傳』では常に w'nk と表記されている(92)。王は宕攝に屬する字で，河西方言では -ng が失われていたはずである。庄垣内はこれに關して「韻尾 ŋ を脫落する以前に借用され，定着した形式といえる」としている(93)。王は字音借用期に先行する語音借用期に w'nk として借用され，その後字音借用期にも，王＝w'nk の結びつきの强さから新來の *ww によって驅逐されることはなかったようだ。こうして古い要素が字音の中に殘ることになったと考えられる。上で言及した八陽經 p'r y'nk ky の場合も，語音借用期に導入された例えば陰陽 yyn y'nk のような表現から(94)，陽＝y'nk の結び附きが定着していたものと思われる。ところがこの場合には，字音借用期に導入された yw との共存時代の後，y'nk はついには yw によって驅逐されたのであろう(95)。同樣に語音の一部が後に，字音によってとって代わられた場合もあったであろう。道場 t'wc'nk に對して t'wcw をあてることも，借用語の c'nk が後に字音の cw によって置き換えられたものと見なすことができるかもしれない(96)。

これに對して嚴 yym などは明らかに新しい發音である。通常のウイグル字音では *kym と綴られたであろう。疑母が喩母と合流する傾向があったことは確かだが，どのような經緯でこの字音が導入されたのかは今は不明である。

高田が想定したように，通常のウイグル字音はトルファンで話されていた，河西方言型の言語から導入されたと考えるのが最も自然である(97)。しかし筆者は Mainz の樣な資料の存在を見るとき，當時河西の佛教の中心地であった敦煌で行われていた漢語から導入された可能性も否定できないと思う。9世紀以降のトルファンの言語狀況も含めて，この點は十分解明されていない問題として將來の研究に委ねるべきではなかろうか。

3.4.2 字音の變容

他の言語における字音と同じくウイグル字音でも，導入された漢字音には3つの點に注意を拂う必要がある。第1は本來の漢字音が，ウイグル語の音韻體系に順應して變容を受けること

である。第2は變容を受けるものの，完全にウイグル語の音韻體系に合致する形式になるのではなく，ある程度の逸脱が許されるという事實である(98)。第3は導入された字音が，使用者の規範意識から人爲的な形式に變容されることがあることである。上でも述べたように，-p 入聲の韻尾をすべて -p で表記するのは，當時の漢字音がそうであったというより，-p 入聲字は -p で導入しようとする意圖があったものと思われる。同じように3・4等の字の母音を一様に前舌母音として扱うことも，語音借用期には見られなかったことである。

下ではこのうち第2の點を字音導入後の變化という觀點から，やや詳しく論じることにする。導入される漢語の發音に近づけるために，多少ウイグル語の音韻體系から逸脱した形で受け入れられた字音は，その後再びウイグル語の音韻體系に合致するように「土着化」されることがあった(99)。ただし逸脱した要素は完全に驅逐されたわけではなく，兩者が共存している場合も多かったと考えられる。例えば語頭の ts- はウイグル語には存在せず，字音中の聲母の ts- は s- に轉ずることがしばしばあった。しかし兩者は共存し，その現れに資料の時代による偏りは認められないという(100)。

ts- 以外の聲母でこの「土着化」の對象となったのは，喩母の合口の w- 及び日母の ž- であった。上でも論じたように，前者は既に『慈恩傳』中に摩擦音の β- に變化した例があった(101)。半母音の w- はまた母音に變化することもあった。『慈恩傳』中の于 'ww はその例と考えたが，Kara の紹介した資料にも王 'ynkw が見られる(102)。この例は通常の字音の w'nk に比べてあまりにも奇妙な形式なので多少不安が殘るが，語頭の w- が失われていたことは知られる。日母の ž- は後期の文獻ではしばしば š- と表記されている(103)。一方後期の文獻中の壬 'žym は，外來音の ž を敢えて有聲音で發音するために，語頭に母音を附加したものであろう(104)。

泥母の字は δ- で表記されていたと考えられるが，後には t- で綴られることもあった。そのことは注11で引用した涅槃 tyrp'n の例から明かである。δ と t の交替は後期のウイグル文獻に顯著な現象で(105)，泥母の字が t で表記されることも一種の「土着化」と見なし得るであろう。

韻母の「土着化」としては，-u で終わる二重母音の解消があげられよう。この場合 -u が -β に轉ずるものと，單母音化するものの2種類があった。道 t'β，小 s'β，收 šyβ は前者の例であり，州 cw は後者の例である(106)。州 cw は既に『慈恩傳』に，cyw とともに用いられている。なお -wy が -w -ww に變化するのも，二重母音の解消の例と見なすことができるかもしれない(107)。

以上ウイグル字音に係わる諸々の問題を扱ってきたが，未解決の問題も多い。何よりウイグル語・ウイグル語文獻について門外漢である筆者の初步的な誤解や無知から，先學の說明に不當な批判を加えたり，解決濟みの問題に誤った解釋を加えたりしていないかと恐れている。專門家からの御教示を乞う次第である(108)。

V　敦煌出土の俗文書中の漢字音の檢討

最近 Sims-Williams と Hamilton は，敦煌出土のソグド語文書 8 點を校訂出版した[1]。これらは後期の草書體で書かれており，その中には多くの古代トルコ語の要素（借用語，稱號，固有名詞及び透寫表現）が含まれている。著者たちは，9 世紀の終わりから10世紀の間に見られた廣範な民族間の接觸がその背景にあるとしている[2]。

これらの文書の中には漢語の要素も少なからず認められる。本節では Hamilton が比定したそれらの漢語の要素を集め，上のⅢ・Ⅳ章で得られた成果を參考にしてその比定に問題がないかを檢討する[3]。

まず彼らの作成にかかる語彙表の中から漢語の要素を拔き出し，對應の漢字とその中古漢語形を提示する。

1　''mγ' 押衙 ·ap nga

2　''n (cwrt'n) 安 ·ân

3　'nk'' 牙 nga

4　βrt'n (?)

5　βwcyn (βwšyn βwsyn) (?)[4]

6　c'nkl'γ[5] 常樂 źi̯ang lâk

7　cw (kymš'n)[6] 張（金山）ti̯ang

8　cwn 傳 d̂ʿi̯wän

9　[γ](')nš'm 汗衫 γân ṣam

10　γynk 杏/硎? γɐng/γieng

11　kw 虞/瞿？ ngi̯u/gʿi̯u

12　kwrpyγ 屈伏/服 kʿi̯uət bʿi̯uk/bʿi̯uk

13　kymš'n[6] 金山 ki̯əm ṣăn

14　kynlwnk (?)

15　ky twnk (?)

16　ly 李 lji

17　lypky 立機 li̯əp ki̯ei

18　pyšw (or pysw) (?)

19　s'nkwn snkwn 將軍 tsi̯ang ki̯uən

20　syncyn 信眞 si̯ĕn tśi̯ĕn

21　š'γ 石 źi̯äk

22 š'mtsy 衫子 ṣam tsi

23 šnkw 升 śi̯əng

24 t'k 翟 d'iek (or d̂'ɐk)

25 tnk 定 d'ieng

26 trx'n 達官 d'ât kuân

27 twtwx 都督 tuo tuok

28 tym(cy) 店 tiem

29 tyn 田 d'ien

30 tynk 丁 tieng

31 x'～ẍ' 家 ka

32 x' 何/賀 γâ

33 xwt' (?)

34 ẍyγ 國 kwək

35 ywzy 諭示/旨 i̯u dź'i/tśi

この種の表記から對應の漢字を捜すことは至難である。漢語であるかさえ定かではなく，難解な文書においては文脈すらも明かではないからである。従って上記の例の中には，漢語でないものが含まれている可能性すら存在する。

確實と見なせるのは，Nos. 1, 2, 7, 13, 16, 17, 19, 22, 23, 26, 27, 28, 31 である。このうち Nos. 1, 2, 19, 23, 26, 27, 28 は既に上に論じた[7]。張金山 (Nos. 7, 13) という名前は，敦煌出土の漢文文獻に實際に在證される[8]。李 (No. 16) は敦煌文書中に姓として普通に見られるもので，この比定は妥當である。また文書の文脈を勘案すれば，lypky (No. 17) と š'mtsy (No. 22) を各々布地の名稱である立機と衣裝の名稱の衫子に同定することにも問題がない[9]。x'～ẍ' が家に由來することについても，説得力ある説明が與えられている[10]。なお x 上に 2 點を施した文字は，軟口蓋（ないし口蓋垂）の閉鎖音を表すためのものであろう[11]。

これら以外でも姓の tyn (No. 29＜田) や x' (No. 32＜何/賀) も文脈や表記の面から問題がなく，ほぼ確實な比定である。

cwn (No. 8＜傳) や syncyn (No. 20＜信眞) は發音の面からは問題がないが，意味の面から問題が殘る。同様に，敦煌出土文書では虞や翟 (No. 11 kw) という姓は一般的ではなかったようなので[12]，表記に問題はないが確實な比定とは考えられない。

c'nkl'γ (No. 6＜常樂) は敦煌の東北東 100 km のところにあった集落の名前である。この地名はコータン語の文書では śālahä と綴られている[13]。常は禪母の字なので，コータン語の形式は韻尾の脱落も含めて河西方言形として期待されるものである。禪母はソグド文字でも š と表記されるのが普通なので，この地名の c はいかにも奇妙である。さらに10世紀の文書に現れ

るのにもかかわらず，韻尾の -ng は保存されている。しかしこのことから c'nkl'γ＝常樂の比定そのものを疑う必要はない。上でも述べたように神 (dź') ・禪 (ź) ・牀 (dẓ') の發展は一様ではなく，各聲母が [tʂ], [tʂ'], [ʂ] に變化ししかもその條件が特定できない。禪母の壽 cyw はよい例である。實際チベット文字資料でも，常の聲母を破擦音として jang のように表記する例が存在する。しかもこの例では韻尾の -ng を保存している(14)。從って長安の標準音では常の聲母は破擦音で發音されていた可能性が高く，c'nkl'γ はこの標準音を反映したものと考えられる。一方コータン語の śālahä の方は，同じ地名を河西方言で發音した形式である(15)。ちなみにハミ地方にあった地名の納職 nâp tśi̯ə̯k についても類似の現象が見られる。ウイグル語の文書では n'pcyk と綴られているのに對し，コータン語文書では dapäcī と表記されている。ウイグル語文書中の例は脱鼻音化以前の古い形式に遡るのに對して，後者は脱鼻音化以後の狀態を示すだけでなく，職の入聲の韻尾をも失っている點で，同時代の漢字の發音を傳えている(16)。

これら以外の比定には意味の面だけでなく，表記の點でも何らかの問題がある(17)。

'nk'' 牙 (No. 3) の場合には，疑母の 1 ・ 2 等の字で，聲母には γ が期待される。また γynk (No. 10) では，杏あるいは硎はどちらも梗攝に屬し，河西方言では韻尾の -ng が脱落していたと考えられる。同じことは定 tnk (No. 25) 及び丁 tynk (No. 20) についても言える。前者に關して筆者は，等 təng に比定することを提案した(18)。tynk に關しては成案がないが，中國人の姓なので曾攝の字の鄧 d'əng を想定できるかもしれない。翟には d'iek と d̂'ɐk の 2 種類の發音があった。敦煌では少なくとも姓の翟は後者であったことが知られている(19)。從って cyγ あるいは c'γ と綴られていたはずである。Hamilton は tnk と讀んで鄧 d'əng の可能性も示唆するが，この比定が正しいかもしれない。その場合には上の tynk には別の姓を想定しなければならない(20)。

kwrpyγ (No. 12) の場合 -pyγ を，伏あるいは服に當てるのは不可能である。輕唇音化した聲母を p で表記することはかろうじてあり得たとしても，核母音の u を y で寫すことは無理である(21)。同様に ẋyγ を國に當てることにも無理がある。ウイグル文字による轉寫では xwx と綴られている(22)。

ywzy (No. 34) を諭旨に比定することの問題點，すなわち旨 tśi が zy に對應し難いことは既に Hamilton 自身が指摘している。そのため彼は交替案として示 dz'i を提案した。示は zi を經て現在の shih に變化したので，zy と表記されることに問題がないとした(23)。しかし上述したように神母の字は通常 š で表記され，破擦音化した場合には c で表記されたので，z で綴られることもありにくい。

š'γ を石に比定する際，Hamilton はウイグル語の šyγ に言及し，その形式よりトカラ語 B の cāk に近いとしている。トカラ語の形式は中古漢語の再構形の źi̯äk からは説明しにくく，š'γ のような表記があり得なかったと言うことはできない。しかし昔韻の核母音は，ソグド文字で

もウイグル文字でも等しくyによって表記されていたので，意味の明かではないこの語を敢えて石に比定する理由はないだろう。

上のⅢ節での議論から明らかなように，匣母は無聲化して曉母と合流したので，No. 9を汗衫に比定するなら[x](')nš'mと復元するべきであろう。ちなみに表音の見地からは，x'nš'mを汗衫に比定することに問題はない。(24)。

Ⅵ　おわりに

最初にも述べたように，ソグド語に導入され定着した漢語からの借用語は非常に少ない。殘された資料の多くが中國語圈で書かれていたことを考慮すれば，これは意外な事實である。一方ウイグル語は漢語の影響を強く受け，多くの借用語を導入しただけでなく字音まで發達させた。ソグド語と漢語及びウイグル語と漢語ではその威信 (prestige) のあり方が餘程異なっていたと考えざるを得ない。この問題は中國國内におけるソグド人の社會的地位や活動という點から，別に研究を要する問題であろう。

ソグド語と漢語の關係という點では，漢字で表記されたソグド語の問題も扱われなければならない。代表的な資料としては，敦煌やトルファンで出土した文書中にあらわれるソグド人名がある(1)。他には史書などの典籍中の名詞や固有名詞も見逃せない(2)。さらには墓誌銘中にも若干の人名が見られる(3)。これらを集めて，對應するソグド語形を復元する作業が次の課題である。

注

はじめに

(1) 護　雅夫 (1976) 169頁；林　梅村 (1992) 49-50頁參照。

(2) ソグド語では，cyn (複數形 cynty)「中國人」，cynstn「中國」，cyn'ncknδ「高昌」，cyn'w「中國語で」が知られている。出典については GMS §§1040，1118及び吉田　豐他 (1988) 11頁參照。古代書簡 (Ancient Letters) 中の cynstn は，中國全體ではなく中原地域のみを示すという，W. B. Henning, 1948, 606 n.7 參照。

(3) 'xwmt'n (Ancient Letter II, cf. xwmt'ncw, P2 1233) を，「咸陽」から導き出そうとするのは，Haloun のアイデアである，H. Haloun, *apud* Henning, 1948, 608參照。他の語源については H. Schaeder, 1934, 48-50 參照。

(4) 出典については下記參照。他の語についても同樣である。

(5) 各々 G. Clauson, 1972, 766, 503, 346 參照。なお tym 及び p'n については N. Sims-Williams and Hamilton, J., 1990, 30 も參照。近世ペルシア語に入った tym の例は Henning, 1939, 94 及び O. I. Smirnova, 1970, 132-34 に詳しい。

(6) P. Poucha, 1933, 88–90 及び H. B. Bailey, 1937, 915 参照。

(7) Sims-Williams and Hamilton, 1990, 32–33 参照。

(8) H. Lüders, 1933, 1021 参照。

(9) Bailey, 1937a, 929及び Bailey, 1979, 335 参照。最近では Harmatta が Bailey の説に従っている, Harmatta, 1989, 301 参照。

(10) Sims-Williams and Hamilton, 1990, 54 参照。

(11) 姜伯勤は, pny の語源を文であるとする, 姜伯勤 (1986) 35頁参照。文の中古音 *mjuən から考えて, 分以上に受け入れ難い。

(12) Henning, 1946, 723 参照。pny の用例についてはさらに, M. N. Bogoljubov and Smirnova, O. I., 1963, 56 も参照せよ。ちなみに, pny が頻出するムグ文書 (Б-27) では, 日附がソグドのカレンダーによる日の名稱ではなく, 1–30までの數字で表されている。他のムグ文書では, 日附は日の名稱によって指定されているので, この點は注目に値する。この文書は漢文の地籍の紙背を利用して書かれており, 地籍自體は中國國內で書かれたものである。一般には廢紙を紙の材料として輸入したものとされているが (岩佐精一郎 (1935) 137–38頁参照), 日附のあり方と考えあわせれば, 裏のソグド語文書も中國國內で書かれたものと推測される。この推測が正しければ, Б-27 は 8 世紀初めソグド商人が, 中國とソグドを行き來していたことの直接の證據になる。なお同樣に中國國內で書かれた古代書簡でも, 日附は數字で表記されている。

(13) 下でも述べるように, 個別の形式や, 特定の文獻についての研究はあった。しかしそれらには, 全體像についての視點は缺けていた。

I

(1) 古くから議論されてきた古代書簡の年代については F. Grenet and Sims-Williams, N., 1987, 101–22 参照。Harmatta は最近この論文に對する反論を發表した, J. Harmatta, 1992 参照。

(2) Henning, 1948 及び Harmatta, 1979 参照。なお, 古代書簡全體については Sims-Williams, 1985 が便利な解説である。また最近の研究として Sims-Williams, 1991 をあげることができる。

(3) B. Karlgren, 1957 によって再構成された中古漢語の形式を掲げておく。以下同樣。

(4) この比定は Harmatta, 1979 によって行われ, Grenet and Sims-Williams, 1987 によって採用された。古代書簡中の酒泉の表記についての古い説に關しては下記参照。

(5) H. Reichelt, 1931, 4 参照。

(6) Henning, 1948, 610–11 参照。

(7) Harmatta, 1979, 162 参照。以下 Harmatta が現代の北京音で表記している地名に對應する漢字の比定は, 榎 一雄 (1980) に引用された蔀 勇造による古代書簡の日本語譯を參考にした。

(8) Grenet and Sims-Williams, 1987, 109, n. 33 参照。

(9) 榎は, 薊城 kiei źiäng にあて, 疑問符號を添えている。

(10) Henning, 1948, 611 参照。

(11) Harmatta, 1979, 164 頁参照。

(12) 榎 一雄 (1980) 271頁参照。

(13) Grenet and Sims-Williams, 1987, 115 参照。

(14) この資料については, Sims-Williams, 1989 及び idem, 1989a; idem, 1992 参照。

(15) Sims-Williams, 1989a, 19 及び idem, 1992, 58 参照。

(16) S. G. Kljaštornyj and Livšic, V. A., 1972 参照。

(17) 例えば, B2-5 で彼らが xšywny "ruler" と讀む部分は, 寫眞版 (あまり質が良くない) で見る限り,

xšy' ZY「彼は支配した。そして」と讀める。さらに k'w βγy s'r pwrsty (B2-1) を彼らは「神に尋ねる」と譯した。しかし，(')prs-「尋ねる」が pwrs- と綴られることはないので，むしろ (')pw'rt「轉ずる，振り向く，返る」の3人稱單數過去形と見なし，「神 (tängri) のほうへ返った」と譯すべきかもしれない。なおこの碑文では文字 x と γ が語末以外の位置でも區別されている點に關しては，吉田 豐 (1990) 76頁參照。

(18) 破損部にしか現れない：s(nk)[wnt] (B2-2), (snk)[wn]t (B2-8)。

(19) トルコ民族に早い時代に借用されたと考えられるこの語は，稱號としても人名としても頻繁に用いられた。7－8世紀に吐火羅にいて，突厥と見なされていた人々にもこの語が知られていたらしいことは，Rājataraṅginī 中に見られるトルコ人名 caṅkuna- からも知られる，A. Stein, 1900, vol. 1, 143–44, n. 211 參照。この caṅkuṇa- は，トルコ語文獻で s(')nkwn と表記されている語と同源で，西突厥の言語に借用された將軍を梵語化したものと考えられる。

(20) Kljaštornyj and Livšic, 1972, 89；護 雅夫 (1972) 83–84頁參照。

(21) 森安孝夫 (1990–91) 195–96頁參照。

(22) 吉田 豐他 (1988) 參照。

(23) (丸括弧) 内は文書中の行數。以下同樣。

(24) 最近荒川正晴は，c'n 姓の問題を再びとりあげ，歷史的背景及び墳墓の所在地の點から，張に當てることが十分可能である旨述べている，荒川正晴 (1989) 138–40頁參照。一方林梅村は，吉田 豐他 (1988) を批判する論文において，c'n は c'z の畧ではないかとし昭武九姓のうちの石に對應するものと考えた，林梅村 (1992) 51頁參照。これは明らかに牽强附會であり，反論の必要もないであろう。また彼は，この同じ文書中の cwy'kkh-kwtr'nch の cw- は同じく昭武九姓の曹に對應するとした。彼は kwtr「氏，族」に先行する要素が漢語の姓でなければならないと考えているようだが，それが必ずしもそうではなかったことは，キリスト教文獻中の glyl'yq qwtry「ガラリヤの一族のもの，キリスト教徒」から知られる，O. Hansen, 1941, 9 參照。それ故 cwy'kkh は -kk で擴張された典型的な hypocoristic name として何の問題もない，Sims-Williams, 1992, 34 參照。

(25) 池田溫氏は筆者への私信において，「y'nsy'n は延順といった法名が豫想されます。ほぼ同年代の弘寶寺僧及奴婢名籍斷卷（『吐魯番出土文書』第4册收）などには，この名は見あたりませんが，どこかに殘っているかもしれません」と言っておられる。可能性だけなら，延相などもあげることができ，この方が y'nsy'n にはぴったりと對應する。むしろ可能性が多すぎて，どれかに限定することができないのである。一方林梅村は「上揭論文」のなかで，y'nsy'n は梵語の yānasena-「乘軍」轉寫であるとしている。梵語の表記に問題があるだけでなく，yāna-「乘り物」と sena-「軍隊」の組合せは，僧侶の名前としてはありにくいのではないだろうか。

なおムグ文書 (A9 recto 3) に p'xš'y と讀める語があり，Livšic, 1962, 206 は漢語の博士 pâk dẓ'i からの借用語ではないかと考えた。しかしこれについては，動詞 pxš(n)「退く」の3人稱單數未完了希求法形 (p'xšny 或は p'xš'y と讀む) であろうとする Gershevitch の說を採用しておく，Gershevitch, 1962, 86 參照。

(26) ソグド佛典の絕對年代は，開元16年 (728年) に譯されたという奧書をもつ1點を除いて不明である。しかし，他の佛典も大概これと同じ頃に譯されたと考えてよいだろう，吉田 豐 (1991) 參照。

(27) 耨は佛教徒の間では入聲で讀まれていた，R. Gauthiot and P. Pelliot, 1926–28, 94–97 參照。

(28) この語の比定は必ずしも確實ではない，Gauthiot and Pelliot, 1926–28, 57 參照。

(29) この比定は Henning, 1948, 603, n. 2 による。

(30) この種の例は他にも知られている，吉田 豐 (1989) 95頁參照。敦煌出土の8世紀の漢文文書に見

えるソグド人の人名中に，明らかにトルコ語の人名がみつかることについては，梅村　坦 (1980) 204頁も参照せよ。

(31) D. N. MacKenzie, 1970, 59 参照。

(32) 出典については MacKenzie, 1976, 201 参照。なお 'nwtr'y'n は，梵語の形容詞 anuttara- の活用形 (f. loc. sg.) anuttarāyāṃ に對應している。

(33) 下記Ⅲ章参照。

(34) P. Pelliot, 1934, 32; MacKenzie, 1976, 55 参照。

(35) 音譯語に用いられた漢字の發音が，個別に發音される場合と異なる現象は，ソグド語文獻に限らず，チベット文字やコータンのブラーフミー文字によって漢語を表記した資料にもしばしばみられる，高田時雄 (1988) 58頁注 1 等及び同 (1988a) 86頁等参照。

(36) ソグド語に導入されたインド語の借用語について，筆者は別に論文を準備中である。

(37) ''m't' (P2, 1193) は單に ''myt' の誤寫であろう。

(38) sypwδy (STii 8, 5) は，sywpwδy の誤寫である可能性もある。

(39) Sims-Williams, 1983, 138 参照。

(40) Benveniste, 1940, 240 は，梵語に amita- という名前が存在したように書いているが，この如來が梵語で amita- と呼ばれることはない，中村　元 (1981) 9 頁参照。

(41) Sims-Williams, 1983, 137; J. Brough, 1962, 50 参照。

Benveniste, 1933, 231 も Brough と同じ說である。Brough は閻 (jäm) に對應する cn-[jan-] は，閻の上古音 *diɛm を反映したものだとしている。しかしソグド語形が，それほど古い漢語の發音を寫していたとは考えにくい。上でも述べたように，この場合にも梵語音譯語の特殊性が jäm と cn との乖離の背後に存在するのだろう。つまり，ソグド語譯者は，閻浮檀が梵語を音譯したものであり，その原語の初頭音が j-[j-] であることをある程度知っていたのであろう。

(42) Sims-Williams, ibid; F. W. K. Müller and Lentz, W., 1934, 551 参照。

(43) 漢字閻に對應する cym-[jim-] については上記注40参照。

(44) Benveniste, 1933, 231; J. P. Asmussen, 1965, 141 参照。

(45) 赤沼智善 (1986) 52頁参照。

(46) Benveniste, 1933, 225 が引用する gauyāṃni はその locative 形である。

(47) 百濟康義・Zieme (1985) 157–58頁参照。ただしウイグル語形が，ソグド語に由來するかどうかは別に議論を要する。なお百濟・Zieme がソグド語形 k'wy'ny に言及するのは適切ではなく，むしろ kwy'n' と比較すべきであろう。

(48) MacKenzie, 1976, 55 参照。

(49) 佛教梵語には mañjuśirī- という形式も知られている，F. Edgerton, 1953, 414 参照。從って，-šyry だけを根據とすることには愼重でなければならない。

(50) ウイグル語では，前舌母音 ü, ö を表記するのに文字結合 -wy- を用いることはよく知られている，Sims-Williams, 1981, 359 参照。

(51) vidyādhara- に對する βytty'tr (Padm) 及び βyty'δr (P15) などの例から知られているとおり，梵語の母音に後續する -dh- は，ソグド語では -t- とも -δ- とも表記されるので，この點から pwδ'y の梵語起源を排除することはできない。

(52) Benveniste, 1933, 225; Asmussen, 1965, 141 参照。

(53) Benveniste, 1933, 225 参照。

(54) MacKenzie, 1976, 55 参照。

(55)『慈恩傳』のウイグル語譯では purwadïš(<pūrvadeśa-) は，「東の國」という意味で中國をさす言葉として用いられている，A. von Gabain, 1935, 165 参照。

(56) MacKenzie, 1976, 55; Müller and Lentz, 1934, 551 参照。

(57) この種の例は，表の中にあげたもの以外にも存在した可能性が高い。竹園の名前である迦蘭陀 ka lân d'â (<Skt. kalandaka-, karandaka-, kalaṇḍaka-, karaṇḍaka-) に對應する k'r'ynk' のような，漢語からも梵語からも，あるいはまた中期インド語からも說明できない形式については，ソグド語譯者の誤解によって成立した可能性を考慮すべきであろう。この語について Kudara and Sundermann, 1987, 345 は，あくまでもソグド語形に類似する實在したインド語形に基づくものと考えようとするが，むしろ kaliṅga- との混同があったのではないだろうか。kalandaka-, etc. と kaliṅga- との混同に關しては『普曜經』第8卷（『大正』vol. 3, 533c)の迦陵 (ka lịəng) 竹園も參考になるだろう。

(58)この佛はウイグル語でも abita という漢語に由來する名前で呼ばれている，K. Röhrborn, 1976-, 37；百濟・Zieme (1985) 53-54頁參照。

(59) Clauson, 1972, 369; Gabain, 1974, 332；庄垣內 (1986) 28頁など枚擧にいとまがない。奇妙なことにこれらのトルコ語學者の語源說の中で，ソグド語形が言及されたことがない。筆者の知る限り唯一の例外は P. Laut, 1986, 144 である。

(60) Benveniste, 1942-45, 189; Laut, 1986, 144 参照。

(61) 庄垣內 (1986) 28頁參照。

(62) Bailey, 1967, 242 参照。ソグド語の -w- は，先行する兩唇音の影響で成立したのかもしれない。p と齒音にはさまれた母音の唇音化については Sims-Williams, 1985a, 61 参照。

(63) 上記注59參照。

(64)その場合にはトカラ語 (A ptāñkät, B pudñäkte "buddha-god") と類似の構成になる，P. Aalto, 1964, 71 参照。

(65) 古くは Pelliot が佛＝bur 說には懷疑的であった，Pelliot, 1929, 216 参照。また Laut, 1986, 144 は佛教ウイグル語に常用の語彙を集めているが，burxan は揭げられていない。從來の說は採用し難いという Laut の見識を示したものだろう。同樣に森安孝夫 (1985) 33頁注31も burxan, bursang の漢語起源說に對して愼重である。

(66) Henning, 1940, 2 参照。

(67) トルファンのマニ教史全般については，森安孝夫 (1990-91) に詳しい。

(68) Henning, 1945, 472 が [p]wšy (布施) と讀んだ語は，實際には [j]wšy と讀むべきである，Benveniste, 1951, 119 参照。

(69)これはトルコ語を仲介してソグド語に入った語であると考えられている，Sims-Williams, 1981a, 236 参照。この語の意味と語源に關しては Asmussen, 1965, 227 及びそこに引用された参考文獻参照。

(70) Maḫrnāmag の該當部分は，最初の校訂者である F. W. K. Müller の說に從って，一般に殘りの部分に先行するものとされてきた，Müller, 1912, 5-7; M. Boyce, 1975, 52 参照。しかしこの考え方は正しくなく，問題の部分が奧書であることは Sundermann によって最近指摘されている，Sundermann, 1992, 71-73 参照。ちなみにこの點については筆者も獨自に同じ結論に到達していた。

(71) J. Hamilton, 1955, 111；森安孝夫 (1979) 211-12頁參照。ただし，Müller 自身は昭禮可汗 (824-32) の時代のものと考えており，この說に從う人もいる，Müller, 1912, 29; Boyce, 1975, 52 参照。

(72) Müller, 1912, 5; Zieme, 1992, 326 参照。なお IB6371 のテキストは Müller, 1912a, 207-13 を参照した。

(73)この種の稱號に關しては Ecsedy の研究が便利である，Ecsedy, 1965, 83-91 参照。ただし彼女は M1

中の稱號は引用するものの IB6371 のものは扱っていない。

(74) Sims-Williams and Hamilton, 1990, 29 参照。

(75) Müller 自身が認めるとおりこの比定は確實ではない。

(76) Ecsedy が引用する šyl'ng は存在しない。

(77) この比定は筆者によるものである，吉田　豐（1988）42頁注29参照。なお47行目の syrtwš は行末形であり，-yy を缺くことに問題はない。

(78) t̲'ys'ngwn, t̲'ymγ't̲rx'n の結合の中に見いだされる。

(79) 筆者による比定。

(80) 上記370頁参照。

(81) Ecsedy, 1965, 86 は，カラバルガスン碑文のソグド語版に twtwk'n が在證されるとするが，これは Hansen の古いテキストに依ったもので，現在では受け入れられない。

(82) Müller, 1912, 34 参照。

(83) Henning, 1937, 87; Henning, 1940, 17 参照。

(84) Sims-Williams, 1981a, 236 参照。この機會に中世ペルシア語文書 M74 のキャプションに現れた f'mšyy nw'q の f'mšyy について論じておきたい。この語は一般に漢語の法師からの借用語と考えられている，H.-J. Klimkeit, 1989, 203 参照。しかも Klimkeit は後續の nw'q を「新しい」を意味するパルティア語形であるとしている。しかし漢語の發音からはこの說は支持されない。法師の法が f'm で表記されることは，ありえないことであるからである。nw'q は無論「新しい」を意味する語ではない。これはこのような場所にしばしば用いられ，通常 nw'g と綴られる語であり，その意味は「メロディー」である。このことからも f'mšyy を法師に比定することに問題があることが分かる。筆者は後續の「メロディー」を考慮して，この語を佛教用語の梵聲からの借用語ではないかと考えている。

(85) Bulayïq 出土のソグド語文獻全體及びその歷史的背景については，Sims-Williams, 1991a; idem, 1992 a 参照。

(86) 上記「はじめに」注 5 参照。

(87) Hamilton, 1981 参照。

(88) 前者は Sims-Willams, *apud* Hamilton, 1981, 298；高田時雄(1988)45頁に，後者は Sims-Williams, 1991, 186 に見える。今，發音に忠實なキリスト教ソグド語文獻中の數詞 7 を例にとれば，7: bt', 'bt'; 17: btts となっている。またソグド文字による 27: 'βtwysth（吉田他(1988) 5 頁テキスト 2 行目参照）を参考にすれば，數詞 7 は，獨立して用いられる場合と，複合された場合では形式が異なり，後者では語末の -' を缺いている。これはおそらく，8，9 についても同樣であったと考えられるので，漢語の數詞に附加された -' をこのことと關係附けることができるかもしれない。

(89) ソグド語の數詞に觸れた機會に，『宿曜經』にみられる曜日の名稱中の數詞の問題を取り上げたい。この經典にイラン語起源の 2 種類の曜日の名前が現れることはよく知られている。それらのうち胡名，すなわち日曜日を蜜で呼ぶ系列が，ソグド語に定着した西イラン語（中世ペルシア語あるいはパルティア語）形に由來することは既に證明されている，Henning, 1936, 85 参照。しかし波斯名と呼ばれる他の一方，つまり 1 から 7 までの數詞と sabbath を意味する森勿 s̬iəm mj̬uət（おそらく šambaδ を寫している）の組合せで表現されている方の數詞が，ソグド語に由來するものか，中世ペルシア語に由來するものかについての問題は未解決のままである。Müller, 1907, 459, n. 1 はソグド語であるとし，Chavannes and Pelliot, 1913, 174–76, n. 1 は Müller の考えを否定し中世ペルシア語形だと考えた。問題の形式は矢野道雄によってまとめられており便利である，矢野道雄（1986）20頁参照。今便宜のために，矢野の表の一部を採錄する（なお不適切と思われる箇所は適宜改めておいた）：

	波斯名	中古音	中世ペルシア語形	ソグド語形
1	曜	j̧äw	ēw	'yw
2	婁(禍)	lo̧u (γuâ)	dō	'δw(')
3	勢	śj̧äi	sē	'δry (Chr. šy)
4	掣	tś'j̧ät	čahār	ctβ'r
5	本	puən	panǰ	pnc
6	數	ṣj̧u	šaš	wxwšw (Chr. xwšw)
7	翕	xj̧ap	haft	'βt(')

Müllerは1・2・6はソグド語でしか説明できないとし，殘りについてはどちらの言語か決められないとした。從って全體はソグド語とみなされることになる。これに對して Chavannes and Pelliot は，1はどちらの言語にもあてはまる；2の形式は確かにソグド語形に近いが，中世ペルシア語形とそれほどかけ離れていない；3についてはソグド語の 'δry からは説明できず，中世ペルシア語形である；4の掣は發音[čar]を表記したものであり，これも中世ペルシア語形に近い；5の本はどちらの言語のものか決定できない；6の數はソグド語形とは程遠く，中世ペルシア語形の轉訛した形式 *ššambah (<šaššambah) の *š- に對應している；7の翕も初頭の x- から判斷して，中世ペルシア語形としか合致しない。從って全體は中世ペルシア語の數詞であるとした。現在の我々の知識で兩者の説を檢討すると，どちらか一方の説だけが正しいというわけではない。1・5は兩言語の形式が類似していて，どちらの言語の音寫形か決定できない。2では，來母 (l-) の字を用いており，これは摩擦音の δ を寫すものであり得ても，閉鎖音には對應し得ない。從ってソグド語形を寫したものである。音寫形にみられるヴァリアントの婁と婁禍のうち，後者は 'δw' [(ə)δwa] にぴったり對應するので，こちらの形式のほうが正しいであろう。ただしソグド語には 'δw [əδuw] という形もあり，婁はそちらを表記した可能性もある。

3についても漢字の書母 (ś-) から判斷して，ソグド語の šy に近く，中世ペルシア語の sē とは合わない。なおソグド文字の 'δry は歴史的書記法であり，實際の發音はシリア文字の綴り šy から知られる。4を表す掣は確かに，[čVr]（Vはなんらかの母音を表す）を音寫したものと考えられ，その限りでは中世ペルシア語形に近い。しかし，Müller も述べているように，漢字の音寫形はしばしば短縮されるので，掣はソグド語形の最初の音節 [čat-] に對應しているとも考えられる。6を表す數は，[šū] を音寫したものと考えるのが最も自然である。これはどちらの言語とも合わない。Müller はこれも短縮形であるとし，ソグド語形の語末の音節 -šw に對應する部分が殘ったものと考えた。7については，Chavannes and Pelliot の言うとおり，中世ペルシア語形のほうに似ている。

つまり，2・3（さらに6も？）がソグド語形，7が中世ペルシア語形，殘りはどちらとも決定できないということになる。この矛盾はどのようにしたら解決できるだろうか。波斯名という表現は，文字どおりには「ペルシアの名前」を表す。しかし實際には明らかにソグド語の要素も含んでいる。それ故この表現の中の波斯は，言語（あるいはそれが話されている國）を表すものでは有り得ない。筆者はこの波斯は宗教の名前ではないかと考える。

波斯の名前で呼ばれる宗教は，ネストリウス派のキリスト教であることが知られている，姜伯勤 (1990) 6－8頁參照。ここでも波斯名とは，ネストリウス派のキリスト教徒が使う名稱という意味ではなかろうか。彼らは中央アジアではシリア語及び中世ペルシア語を教會の典禮言語とし，日常は各自の母國語（ソグド語あるいは古代トルコ語）を使っていた，Sims-Williams, 1992a 參照。本來中世ペルシア語で呼ばれていた曜日の名前に，次第にソグド語の要素が入りこんでいったのであろう。ちなみにソグド人のキリスト教徒もマニ教徒も，數字と šmbδ を組み合わせた曜日の名前を使っていたことが知られている，Henning, 1945a; Sims-Williams, 1985a, 236 參照。

(90) Sims-Williams and Hamilton, 1990, 9–11 参照。

(91) この2點の部分的解讀については，吉田　豐（1984）83頁注8参照。

(92) Sims-Williams, 1981a, 235 及び Sims-Williams and Hamilton, 1990, 32–33 参照。

(93) W. Sundermann and Zieme, P., 1981, 190 参照。

(94) MacKenzie はコレズム語にみられる čk「證文」は，漢語の册 tṣək がソグド語を仲介して借用されたものだとしている，MacKenzie, 1990, 90 参照。ソグド語文獻に在證される形式ではないので，今はこのリストに含めない。

II

(1) この斷片とは別にウイグル語の極小斷片が，同じガラス板に挾み込まれていて，同じ番號を持っている。

(2)『金剛五禮』については，川崎ミチコ（1980）307–16参照。さらに上山大峻（1990）401–23頁も參考になる。

(3) Müller and Lentz, 1934, 508 参照。まれに β の上に1點を施した文字が見うけられる，Müller and Lentz, 1926, plate 2 (TM351) 参照。これは β を y と區別するためのものであるに違いない。

(4) de La Vallée Poussin and Gauthiot, R., 1912 参照。

(5) A. von Le Coq, 1919, Tabelle 参照。注意すべき點は，x の下に1點を附ける方式は，いわゆる「ソグド文字」（すなわち正書體のソグド文字）で表記されたウイグル語文獻に限定されることである，A. von Gabain, 1974, 17 参照。なおこの種の資料については，最近の研究である D. Fedakar, 1991 が参考になる。

(6) 閉鎖音を示すことについては Hamilton, 1986, xxii 参照。無聲音を表すことに關しては D. Maue, 1983, 91 及び n. 7 参照。なお Maue によれば，x に補助記號を附けた文字の音價についての全體像はまだ不明であるという。閉鎖音に補助記號を附けるか，無聲音に記號を附けるか文書ごとに異なっていたことと，一つの寫本内部でも補助記號の使用は首尾一貫していなかったことを想定すれば，多くの事例は説明できるかもしれない。ウイグル語の專門家からの教示を待ちたい。

(7) Sims-Williams and Hamilton, 1990, 37–38 参照。

(8) Sims-Williams, 1989b, 176 参照。1點を附けた文字は Waldschmidt and Lentz, 1926, Tafel II (TM 351, verso 1) に見られる。

(9) Sims-Williams, *apud* MacKenzie, 1976, 9 参照。

(10) Müller and Lentz, 1934, 507–8 参照。

(11) Sims-Williams, 1978, 257–58 参照。

(12) 吉田　豐（1989）98–99頁参照。

(13) No. 2525 の裏もソグド文字で表記された漢文佛典かもしれない。ただし No. 1123 などとは別の文書である。なお大谷探檢隊將來の全イラン語資料は，龍谷大學善本叢書として近い將來寫眞版とともに發表される豫定である。

III

(1) D. Sinor, 1939; B. Csongor, 1952, 1954, 1962；庄垣内正弘(1986)；高田時雄(1985)；同(1990); Kara, 1991 参照。

(2) ウイグル譯の『慈恩傳』には5種類の寫本が殘っている，K. Kudara and Zieme, P., 1984 参照。その中でここで問題にするのは，最も量が多く古くから研究されている寫本で，パリ，舊レニングラード，北京，ベルリンに分藏されているものである。最近見つかったベルリンの斷片については Zieme, 1990 参照。なおこの論文では（94頁），漢語の遏部多（實際には梵語の adbhuta-)に對應するウイグ

ル語形として，arbut[i] が引用されている。ここでは -r- の代わりに -t- 或は -δ- が期待されるが，-r- になっているのは漢字音に引きずられたからであろう。従って Zieme が並行例とした samar (<Sogd. s'm'r < Skt. samādhi) とは本質的に異なる。本論文執筆中に，『慈恩傳』の校訂本が新たに 3 點公刊された：K. Röhrborn, 1991; L. Ju. Tuguševa, 1991; Kahar Barat, 1992。これらはどれも相當量のウイグル語のテキストを含んでいる。しかも Röhrborn と Kahar Barat のものは文字轉寫まで提出しているので，庄垣内の讀みを確認するには便利である。しかし一方で，庄垣内の漢語のリストには，漢語形の現れる卷數は示すものの，行の指定がなされていないために，問題の形式がテキストのどの部分に對應するのか決定できない場合がある。それ故，本稿では庄垣内の讀みをそのまま引用することにした。ウイグル語のテキストを扱う際の問題點については，下記Ⅳ章も參照されたい。

(3) 従って寫本には存在する文字 x と ẋ の區別は無視せざるを得ない。また森安によればここで扱う『慈恩傳』の寫本には，語末の -x と -γ は尻尾の長短によって字形が區別されているという，森安孝夫(1990–91) 179–80頁參照。殘念ながら，この指摘に從って語末の x と γ の區別を確認することもできなかった。

(4) Karlgren, 1957 參照。

(5) 羅常培 (1933) ；高田時雄 (1988) 參照。10世紀のものと考えられるコータンのブラーフミー文字で表記した漢字音資料も同樣に重要である。それについては高田時雄 (1988)，同 (1988a)，R. E. Emmerick, 1992 を參照せよ。なお Emmerick と E. G. Pulleyblank による新研究 *A Chinese text in Central Asian Brahmi script, new evidence for the pronunciation of Late Middle Chinese and Khotanese* (=Serie orientale Roma LXIX), Rome, 1993 が豫告されている。

(6) 高田時雄 (1988) 107–09頁參照。

(7) 高田時雄 (1988) 98–99頁參照。

(8) ḳ については下記參照。

(9) TⅡT の漢語は Mainz に比べてやや古風である。そのことは下に說明されることから次第に明らかになるだろう。ちなみに高田時雄 (1988) 107–09頁によれば，全濁聲母は全清あるいは次清聲母と融合したが，より古い層では他の聲母と比較的明瞭に區別されている，高田時雄 (1988) 69–74頁參照。

(10) 高田時雄 (1988) 86–93頁參照。

(11) この種の聲母はチベット文字では 'b- のように表記されており，その表記から弱い鼻音要素が殘っていたことが推測されてきた，高田時雄 (1988) 88–93頁參照。TⅡT の表記は，その推測が正しかったことを證明している。

(12) 高田時雄 (1985) 140頁；庄垣内正弘 (1986) 26頁參照。

(13) ブラーフミー文字資料の，m- と b- 及び n- と d- の區別が後續の鼻音要素の有無に依存するかどうかについて，水谷眞成(1959)75–6頁及び庄垣内正弘(1986)26，30頁は否定的であり，高田時雄(1988a)87頁は肯定的である。高田の說の方が適切であろう。

(14) ウイグル語でも類似の現象が報告されている，庄垣内正弘 (1986) 26–27頁參照。從って高田時雄 (1985) 140頁が「必ずしも (m- と p- の區別は) 規則的に寫されない」とするのは，正しい表現とはいえない。

(15) 高田時雄 (1988) 97–98頁參照。

(16) 高田時雄 (1988) 96–97頁參照。

(17) 庄垣内正弘 (1986) 121頁注79で，TⅡT には舌頭音・齒頭音で，有聲・無聲の對立があるとするのは誤解である。庄垣内が言及する筆者の未定稿でもそのような記述はない。

(18) 高田時雄 (1988) 89頁參照。

(19) Sims-Williams, 1983, 135, n. 26 参照。

(20) 高田時雄 (1988) 76-78頁参照。

(21) 庄垣内正弘 (1986) 121頁注79参照。ウイグルの重 tsw は，その比定が正しいとすれば，聲母だけでなく韻尾も，-nk を失っている點で例外的であり，この例をあまり重要視することはできない。この表記の暫定的な説明については下記Ⅳ章注37を参照せよ。

(22) もう一つの可能性は，文字 s あるいは c によって [ts] を表記しようとしたものと考えることである。まれに文字 c が [ts] を表す場合がある e.g. mc'「こちらに」(Fragment 36, *apud* Sims-Williams and Hamilton, 1990, plate 39a) < mrts'r, Yoshida, 1993 参照。マニ文字の例については GMS §72 参照。

(23) 庄垣内正弘 (1986) 34頁参照。

(24) 下記Ⅳ章参照。Hamilton, 1981, 300 は先行の šyp [šib] の -b に同化したものだと考えている。一方高田によれば，チベット文字の九九表では，四を一貫して zi と表記して，si と書くことはないという，高田時雄 (1988) 82頁注1参照。高田はこの現象を聲調の影響として説明しようとしている。筆者にはチベット文字表記の zi と我々の資料の zy の關係は不明である。

(25) マニ文字でもソグド文字でも，文字 c は [j] も表記することができるので，xwncwy の c も [j] と發音されていた可能性は高い。

(26) 高田時雄 (1988) 76-81, 83-86頁参照。

(27) 庄垣内は，ウイグル文字の表記から5聲母は合流していたとしている，庄垣内正弘 (1986) 35頁参照。無論ウイグル文字でも [ɕ] と [ʂ] の區別はできなかったと考えられるので，この表記から漢語の側の發音の區別の有無について議論することはできないだろう。

(28) 高田時雄 (1988) 77頁参照。庄垣内はこの場合も，ウイグルの表記をもとに，この系列は合流してしまっていたと考えている，庄垣内正弘 (1986) 35頁参照。

(29) 高田時雄 (1988) 85-86頁。

(30) 壽 cyw についてのこの解釋は，高田時雄氏に負うところが大きい。記して謝意を表す。

(31) 高田時雄 (1985) 134頁注36は，チベット文字資料では日母の無聲化の兆しがみえるとするが，高田時雄 (1988) 101-2頁は暗にその主張を撤回している。ちなみにそこでは，日母が無聲の sh- で表記される例として，人 shin (TD 61. 15) が脱落している。

(32) Hamilton, 1981, 298-99 参照。

(33) Csongor, 1952, 86 ; 庄垣内正弘 (1986) 37-38頁参照。

(34) なお迦には3等の kja̯ の讀みもある。

(35) E. G. Pulleyblank, 1965 参照。

(36) 高田時雄 (1985) 140-1頁参照。なおウイグルでもまれにこの原則に従わないものがある。それらについては，下記Ⅳ章注37参照。

(37) 介母の區別が明らかになるように，ここでは高田時雄 (1988) による再構形を引用した。

(38) 暫定的な解決案については下記注42も参照せよ。

(39) この點については上記重唇音の項を参照せよ。

(40) Sims-Williams, 1981, 355 参照。

(41) 疑母の1・2等には x̯ が用いられないことから，x̯ と x (すなわち補助記號を附けない文字) は各々無聲と有聲に對應すると見なすことができるかもしれない。しかし無聲の摩擦音であったと考えられる曉母・匣母の表記に x̯ が使われないことから，この考えは容易に否定される。

(42) 曉母・匣母の3・4等字は現1字しか見あたらないので速斷はできないが，もしこれらの3・4等字の表記にも k が用いられたのなら (Mainz やウイグルではそうなっている)，閉鎖音を意圖した k̯

と，摩擦音（つまり[ç]）を意圖したkの區別であった可能性もある。その場合恐kwnkなどの例外は，補助記號の使用が一貫性を缺いていたことによるものだと解釋されるだろう。いずれにしてもḳの使用に一貫性がないことは，鬼kwy，ḳwyの例から明らかである。

(43) MacKenzie，1976，10–11 參照。なおこの奥書を林梅村（1992）52頁が「洛陽城之神，天子開元十六年」とするのは，完全に誤譯である。この部分はMacKenzieが譯すとおり，「洛陽城で神なる天子の開元十六年であった」を意味する。從って彼が，ここでは洛陽をもって中國を呼んでいるとするのは全くの誤解である。またこの奥書がP2，1234にあるとするのも初歩的なミスである。

(44) 下記328頁參照。

(45) 開も康も有氣音を聲母とするので，x- は有氣性を表すめたに選ばれたのではないかという疑いは殘る。

(46) ḳが有聲，kが無聲に對應するということではないことに留意されたい。疑母の轉寫用に用いられたḳが，他の聲母を表記するkやḳとは異なり，有聲音を表すという意味である。

(47) 高田はチベット文字資料に見られるこの現象を取り上げ，チベット文字の音價の特殊性によって說明しようとしている，高田時雄（1988）90頁參照。一方ブラーフミー文字資料については，特に取り上げて論じてはいない，高田時雄（1988a)93頁參照。ウイグル文字の表記に鼻音性が現れないことは庄垣内が指摘し，同時にブラーフミー文字資料にも言及している，庄垣内正弘（1986）39頁參照。これらの狀況を勘案すれば，漢語の側で疑母の脫鼻音化の進行狀況は，明母・泥母の場合とは必ずしも同じではなかったのであり，單なる表記上の制約によるものではなかった可能性が高いのではないだろうか。

(47a)龍谷大學圖書館所藏の西域文化資料No. 1129（上記357頁參照）には，γ-' のように，文字γを分綴した例が見える。文字xとγを區別するために，γを後續の文字と分かち書きすることがあるので，この表記は明らかに有聲音を意圖している，Sims-Williams, *apud* Sundermann，1981，194–98 參照。從ってγ-' も疑母の字を寫したものであろう。

(48) 脫鼻音化の進行過程については水谷の專論がある，水谷眞成（1957）參照。彼によれば，唐初には洛陽までこの現象がみられたという。なお筆者は『大唐西域記』の音譯字の中に，既に脫鼻音化現象の兆しが見えるとする水谷の說に異を唱えたことがある，桑山正進（1992）136頁參照。

(49) ウイグルの我 nγ'（あるいは 'γ'）については下記Ⅳ章注104參照。

(50) 例：我 ha':，ha';義 hī':。

(51) 高田時雄（1988）91頁參照。

(52) 高田時雄（1988）90–91頁參照。

(53) 水谷は，ブラーフミー文字の h':は疑母の摩擦化の傾向を示すものと考えている，水谷眞成(1959)759頁參照。一方高田は，摩擦音化については疑問視している，高田時雄（1988a)93頁參照。

(54) 3・4等字の例が多ければ，その聲母をk-で表記したものもあったであろう。

(55) 漢譯マニ教文獻では，影母の字は例外なくイラン語の初頭の母音を寫すために用いられている，吉田　豐（1986）15頁參照。このことから，イラン語でも漢語でも，初頭の母音が際だった聲立てを持っていたことが知られる。

(56) 庄垣内正弘（1986）41–42頁參照。庄垣内は，チベット文字資料，ブラーフミー文字資料でも基本的に同じであったとしている。しかしソグドとウイグルでは開口と合口に對して常にy-とw-を當てるのに，チベット文字とブラーフミー文字では表記にかなりの搖れが見られる，高田時雄（1988）102–7頁；高田時雄（1988a)100–1頁參照。

(57) 例えばGabain，1976，71; Fedakar，1991，92–94 參照。

(58) 'y と y の區別はないとしたが，實例に則してみれば，前者が後者より廣い母音を寫す傾向があったようにも見える。

(59) 例：宵 śi̯äu š'yw，積 tsi̯äk tsyk。

(60) 例：者 tśi̯a c' (T II T)，舍 śi̯a š' (Mainz)。

(61) チベット文字資料に見られる類似の現象については，高田時雄（1988）115頁參照。なお輕唇音の場合には例外がない。輕唇音化とともに拗音介母が失われた結果であり，漢語自體の音韻變化であるから，ここでは問題にしなかった。

(62) 例：世 śi̯äi šy'y (T II T)，[š]y (Mainz)。

(63) Sims-Williams, 1979, 343 參照。借用語では Skt. pratyeka-buddha- > prt'ykpwt をあげることができる。また TⅡT でも拗音介母を y で表記した 3 等字の例が非常に少ないことも參照されたい。

(64) 高田時雄（1988）121頁參照。

(65) 例：觀 kuân x̣w'n，化 xwa xw'，論 luən r̥wn，尊 tsuən tswn。

(66) 高田時雄（1988）113頁參照。

(67)「人者切」(『廣韻』) 參照。

(68) 來 r̥''y の表記は例外だが，[e] ではなく [ai] であることを明確に示そうとしたものであろう。

(69) 庄垣內正弘（1986）69頁注52參照。

(70) 高田時雄（1988）119–32頁；高田時雄（1988a)106–10頁參照。

(71) まれにみられる綴字 pwδy は，pwδ'y が定着した後で成立したヴァリアントであろう。

(72) 高田時雄（1988）129–30頁參照。

(73) 10世紀のものと考えられるコータンのブラーフミー文字資料に確實に觀察されるなら，この當時の漢語一般にこの變化が起こっていた可能性は高い。しかしソグド文字同樣，チベット文字による表記からも，そのいずれであったか判斷できないというのが實狀であろう。

(74) GMS §76, n. 1 參照。

(75) 高田時雄（1988）144頁及び注 3 參照。

(76) 高田時雄（1988）118參照。

(77) チベット文字資料では，所は他の魚韻の字と比べて，不安定な表記を受けている，高田時雄（1988）314–15參照。このことから，チベット文字資料や TⅡT は，漢字 1 字 1 字の發音を表記したものではなく，佛典が連續して發音された樣子を表していたのではないかと推測される。このような發音を，語音（つまり借用語の發音）及び字音と區別して文音と呼んではどうだろうか。ブラーフミー文字表記の資料も，明らかに文音によるものである。この種の資料では個々の字の發音の搖れは，字音や語音におけるよりもはるかに大きくなることは容易に想像できる。

(78) 高田時雄（1988）119參照。

(79) 高田は γw を正しい例であるとし，γwy や γwβ' の形式の說明を行わない，高田時雄（1988）117參照。

(80) Hamilton, 1981, 300；庄垣內正弘（1986）65, 68參照。最近，多魯坤・梅村・森安（1990）は，ウイグル語の čuv（すなわち cwβ)の語源として，抄 tṣ'au を提案した。これが正しいとすれば，ここでも -u の後に β が析出している。これらの例に照らして考えれば，Hamilton が最近發表した文書の中の語 ngi̯wo kwy は，やはり kwβ と讀むべきであろう，Hamilton, 1992, 116 參照。

(81) Hamilton は正しくその並行性を指摘している，Hamilton, 1981, 300 參照。

(82) 8 世紀前半の突厥語の碑文にも旣に現れている。

(83) 高田時雄（1988）143–49；高田時雄（1988a)112–14參照。

(84) 高田時雄（1988）155-56 及び下記山攝の項參照。

(85) 高田時雄（1988a)113頁參照。

(86) Hamilton, 1981, 300；高田時雄（1988）148-49參照。

(87) 庄垣内正弘（1986）62頁參照。

(88) 例：卷 kwyn。

(89) 高田時雄（1988）155-56參照。

(90) 庄垣内正弘（1986）61頁；高田時雄（1988）156-57；高田時雄（1988a)116頁參照。

(91) 延はソグド語の語 y'n「恩惠」を寫すために用いられることがある，Yoshida, 1984, 149 參照。

(92) 高田は，痕韻の母音がチベット文字では i で表記されていることから，實際の音價は [i] ではなかったかと考えている，高田時雄（1988）158頁參照。庄垣内もウイグルの綴り字 -y- から母音 ï を想定した，庄垣内正弘（1986）58頁參照。

(93) 高田時雄（1988）158-59參照。ちなみに庄垣内は，この種の -y- の音價として [i] を想定するが，彼のシステムに従うならばむしろ [ï] を想定すべきではないだろうか，庄垣内正弘（1986）59頁參照。

(94) 高田時雄（1988）159-60參照。

(95) 韻尾 -ng の脱落に關する従來の說も含めて高田時雄（1988）161-64參照。

(96) 上記注95參照。

(97) 庄垣内正弘（1986）93-95頁參照。

(98) ウイグル文字の語末の -x と -γ の區別は考慮していない。この點については上記注 3 を參照せよ。

(99) Csongor, 1952, 106 n. 28 參照。庄垣内はこの區別は漢語の 2 種類の韻尾，前舌の -k′ 及び後舌の -k に對應するものと考えた，庄垣内正弘（1986）95頁參照。しかし庄垣内自身も認めているように，一般に再構されている -k′ と -k にウイグルの -k と -x は必ずしも對應しているわけではないので，筆者はこの說は採らない。

(100) TⅡT の -x と -γ の違いが，何に依存していたか全く不明である。ソグド文字としては無聲と有聲の區別だが，漢語の側にそのような違いがあったことは知られていない。

(101) 音價の推定にはウイグルの表記と，それに基づいた庄垣内の議論を參考にした，庄垣内正弘（1986）52-53頁參照。

(102) さらに次の梗攝の城 zyn の例も參照せよ。

(103) この點については，吉田　豐他（1988）11頁も參照されたい。

(104) 庄垣内正弘（1986）56頁參照。

(105) 主母音には [i] を想定する根據もある。實際この攝の 3・4 等字は對應する咸攝及び山攝の 3・4 等字とは異なり，チベット文字資料でも i が用いられている。同じようにコータンのブラーフミー文字でも ī によって表記している。庄垣内はこれらを勘案し，ウイグルに導入された漢字音には [i] を再構した，庄垣内正弘（1986）80頁參照。ソグド文字轉寫料，特に TⅡT で [i] を想定すべきか [e] を想定すべきかについては，未解決の問題として將來の研究に委ねたい。

(106) 高田時雄（1988）166-67頁；高田時雄（1988a)121-22頁；庄垣内正弘（1986）81頁參照。

(107) 庄垣内正弘（1982）參照。庄垣内は陌韻の字が -yx と -'x の 2 種類の表記を受けていることに關して，前者に -ïγ を，後者に -aγ を想定するが，彼の [ə] 說に従えば，兩者に -əγ を想定し，-yx と -'x の交替は表記上の問題とすることもできよう。

(108) ウイグルの德韻の表記 -yk をどのように解釋するかは難問である。庄垣内は音價として [-ig] を想定したが，漢語の側からは [-ïγ] が期待される，庄垣内正弘（1986）81頁參照。y が [ə] を表記したと考えれば核母音に問題はないが，韻尾の -k は前舌の母音が先行していることを想定させる。上記注107

ではウイグルに導入された陌韻に -əγ 推定したが，この場合 ə は後舌母音の扱いを受けていることになる。德韻に [-əg] を想定すると，ə はウイグルでは前舌母音としても，後舌母音としても扱われたことになり矛盾する。しかしウイグルには玉 kwyx のように核母音と聲母及び韻尾が調和していない例もあり，この點にあまり拘泥する必要はないのではないだろうか。實際刻 k'ək のような牙音を聲母とする字がウイグルに導入された場合，*xyk と表記されたと推定せざるを得ないであろう。

(109) 高田時雄（1988）167頁；高田時雄（1988a)122頁參照。

(110) この例だけなら，聲母が拗音介母を吸收して，全體が德韻と同じ扱いになっていたと考えることもできる。實際この種の聲母の後では，核母音は他の同じ韻の字より廣めの母音が現れる場合がある，高田時雄（1988a)114，116，118頁參照。しかしこの聲母の後でも期待どおりの表記が行われている例も多く，漢語の側で組織的な音韻變化があったとは考えにくい。

(111) 高田時雄（1988）165頁參照。

(112) ウイグルの入聲字でも -wx と表記されていた，Csongor，1952，118，no. 185；庄垣內正弘(1986)126頁；高田時雄（1990）336頁參照。

(113) この點については庄垣內正弘（1986）49頁注31も參照。ブラーフミー文字資料には，この韻に屬する字は少ない，高田時雄（1988a)121頁參照。しかし降 haṃ:ṅä などから判斷して，チベット文字資料と同じであると考えて良いだろう。

(114) 高田時雄（1988）177頁；庄垣內正弘（1986）49頁參照。

(115) 高田時雄（1988）179-80，186-87頁；高田時雄（1990）337-38頁參照。

(116) 高田時雄（1988）34-36，163頁參照。

(117) ソグド佛典一般については吉田　豐（1991）參照。敦煌において8世紀後半以降，ソグド人の商業活動が衰微することに關しては，池田　溫（1965）及び池田　溫（1980）331-32參照。

(118) 森安孝夫（1985）58-60頁參照。

(119) 上山大峻（1990）401-23參照。

(120) L. Giles，1957，194 (no. 6184)，199 (no. 6331) 參照。

(121) 森安孝夫（1985）36頁；森安孝夫（1987）66-69頁；森安孝夫（1990-91）145，181頁參照。

(122) 吉田　豐（1991）103頁參照。

Ⅳ

(1) 高田時雄（1985）135頁注23參照。

(2) 上記Ⅲ章注3參照。

(3) 庄垣內正弘（1986）20頁注6；K. Röhrborn，1991，221 參照。

(4) Röhrborn は，x̌' (つまり q̌')が正しいとし，庄垣內の讀みは漢字音に引かれたものだとする。

(5) Röhrborn，1991，218 參照。

(6) 庄垣內正弘（1986）41-42參照。

(7) 彼自身は Röhrborn が yyn と讀む箇所を y'n と讀んでいる，庄垣內正弘（1986）20參照。

(8) G. Kara，1983，45 參照。

(9) 庄垣內正弘（1986）64-65頁參照。ちなみに彼は檁を一貫して lim で表記している。

(10) 庄垣內正弘（1986）30頁參照。ただし彼は別の箇所で（47頁）では，ウイグル譯の『慈恩傳』の漢語に，泥母の脫鼻音化が存在した可能性も示唆している。

(11) 年の例は，Röhrborn，1991，235 參照。δyrp'r の例は高田時雄氏からの教示による。記して謝意を表したい。この部分を校訂した Tuguševa はこの點に氣附いていない，Tuguševa，1991，298 參照。なおウイグルには涅槃 tyrp'n が在證される，Zieme，1988，449，idem.，1991，317 參照。

事程左様に『慈恩傳』のテキストの校訂は容易ならざるものらしい。庄垣内はその困難さを，既に校訂・發表されたテキストの讀みと譯を批判するという形で如實に示してくれている，庄垣内正弘（1986）18–21參照。また彼が引用する部分では「敕西京留守左僕射……」kidinki kycyw balïq bäg-i soltïnqï puγy-a は，「背後（留守）の kycyw 城の役人僕射……」と譯されているが，「西京」に對應するのは kidinki kycyw balïq「西の kycyw 城」であり，kycyw は Tuguševa が考えたとおり京兆に由來する。從って全體は「西の首都の役人である左の僕射……」と譯されるだろう。

(12) Röhrborn, 1991, 189 參照。

(13) 庄垣内正弘（1986）32, 35頁；Röhrborn, 1991, 196 參照。

(14) 庄垣内正弘（1986）37頁；Hamilton, 1981, 299 參照。

(15) Hamilton, 1981, 299 があげるのは，そのような例である。この現象については下記も參照せよ。

(16) 高田時雄（1985）134頁注35參照。

(17) ちなみに Müller が默然からの借用であるとした p'kc'n「夏坐，夏安居」は，庄垣内が指摘したとおり漢語からの借用語ではありえない，庄垣内正弘（1986）37頁注23參照。ただしその原語は Tezcan が想定した Skt. *bhakta-chinnaka- ではなく，トカラ語 A の pākäccāṃ "Aufenthalt für die Regenzeit" である，L. Isebaert, 1983, 40 參照。

(18) Clauson, 1972, 569 參照。

(19) Hamilton, 1986, 25 參照。

(20) 庄垣内正弘（1986）36頁注22參照。

(21) 高田時雄（1988）49–50參照。

(22) この問題に關しては森安孝夫（1989）1－5 參照。

(23) 例：añïγ: ayïγ, qañu: qayu「誰」, etc.

(24) Yoshida, 1990, 179, n. 9 參照。

(25) ソグド文字で有聲の閉鎖音 [d] を寫す場合には，實際に文字 t が選ばれることは既に上で論じた。ウイグル文字でも古い時代には文字 δ は摩擦音を表していた可能性がある，Sims-Williams, 1981, 354 參照。

(25a)庄垣内正弘（1986）42頁參照。

(26) この問題は，ウイグル學者がしばしば w- と β- を區別せず v- と轉寫するために，必要以上に複雑になっている。さらに厄介なことに，y- と β- は字形がそっくりで，語源を考慮しなければ區別できない場合がある。

爲 wy の例は S. Tezcan, 1974, 48, l. 484 に見られる。彼は tï と讀んでいるが誤讀である，Zieme, 1988, 449 參照。βy の例は庄垣内正弘（1991）212, 336頁に見られる。

(27) yyn は βyn の誤讀か誤寫の可能性が高い。同樣に Röhrborn が yw と轉寫する永の初頭の y- も β- と讀むべきか，Röhrborn, 1991, 235 參照。ちなみに庄垣内は wy と飜字している，庄垣内正弘(1986)41頁參照。

(28) Zieme, 1985, 243 參照。

(29) ここには漢語の韻尾の -u が -β で表記される例も加えられるかもしれない。この種の例については上記Ⅲ章注80及び Röhrborn, 1991, 211 參照。

(30) 庄垣内正弘（1986）42頁；高田時雄（1988）102–5頁參照。

(31) von Gabain, 1972, 52 參照。

(32) 庄垣内正弘（1986）40參照。

(33) Csongor, 1952, 88–89；高田時雄（1985）139頁；高田時雄（1990）340頁；庄垣内正弘（1986）33頁

参照。

(34) 庄垣内正弘 (1986) 33-34頁参照。

(35) 吉田 豐 (1988a)173-74頁，注 5 参照。

(36) Röhrborn, 1991, 215 参照。

(37) 吉田 豐 (1988a)173-74頁，注 5 参照。c と表記されるべき澄母の重が，tsw と轉寫される（上記296頁参照）ことに對しても，同じ説明が可能かもしれない。なお澄母の字が ts- で表記された例には，他に仲尼 tsw'nny が知られている，庄垣内正弘 (1986) 32頁注15参照（そこで tuänni とするのは誤値である）。これら以外の若干の例外的事例についてもここで觸れておきたい。數詞の八は多くの場合，期待どおり p'r と表記されている。ところが『慈恩傳』以外の資料には，β'r と綴られている場合がある。漢語の音韻史に照らして八が輕唇音化することは全く考えられず，庄垣内は正しくこれをウイグル語内部の發展形と考えた，庄垣内正弘 (1986) 25頁参照。ただしウイグル語内部でも p が f に變化することは考えにくく特別な説明を要する。筆者はこれも一種の過剰矯正ではないかと考える。モンゴル時代の漢語では，八は pa と發音されていた。ウイグル語では par と發音されていたのだから，兩者は十分異なる發音であるが，一部のウイグル人は初頭の p- をさらに f- に變えることによって，その差異を强調しようとしたのではなかろうか。

飯 xw'n では，比定そのものが誤っている，庄垣内正弘 (1986) 28頁注12；森安孝夫 (1990-91) 71頁参照。また褐子 qarz qars（庄垣内正弘 (1986) 16頁注16参照）は，單なる借用の問題ではない，J. Hamilton and Beldiceanu, N., 1968, 330-46 参照。なお牙・喉音の 1 等の闊 kwn 及び 3 等の鬼 xwy は例外であるが，適切な説明ができない，高田時雄 (1985) 135頁注28参照。

(38) 庄垣内正弘 (1986) 50頁；Röhrborn, 1991, 211 参照。

(39) 庄垣内正弘 (1986) 54-55頁参照。

(40) 例えば止攝の合口字の例を参考にされたい，庄垣内正弘 (1986) 73-74頁参照。

(41) 下記302頁参照。

(42) 庄垣内正弘 (1986) 122-23頁；高田時雄 (1990) 355頁参照。

(43) 高田時雄 (1988a)126頁参照。ちなみに庄垣内が柳中の上古音を寫したものとする地名の lükčüŋ は，漢字では六種と表記されることもある，高田時雄 (1988a)81頁参照。lükčüŋ はむしろ六種に近いが，六種のほうは lükčüŋ という當時の地名を漢字で表記したものでしかない。なお lük の k が上古音に由來するとする考えは，Bailey, 1982, 59 にも提案されている。

(44) 入聲の韻尾が完全に失われたものは，中古漢語以降のより新しい漢字音に由來するもので，ここでは問題にしない，Csongor, 1952, 104, n. 4；庄垣内正弘 (1986) 115頁参照。

(45) 庄垣内正弘 (1986) 85頁参照。なお彼の b, v は本稿の p, β に對應することは言うまでもない。

(46) Hamilton, 1986, 131 参照。

(47)『天地八陽神呪經』の京都本がやや古いテキストであることは，菩薩を表す語が pwδysβt と綴られていることからも知られる，吉田 豐 (1988a)175頁注30参照。

(48) 尺 cyx については庄垣内正弘 (1986) 80頁参照。

(49) これは森安が最近校訂したマニ教ウイグル語の文書に現れる，森安孝夫 (1990-91) 59頁参照。

(50) Sims-Williams and Hamilton, 1990, 57-58 参照。

(51) 庄垣内正弘 (1986) 98頁参照。

(52) Csongor, 1952, 108, n. 60 は -b と -v の區別の由って來るところは不明であるとしている。

(53) 庄垣内正弘 (1986) 35, 78頁参照。

(54) Röhrborn, 1991, 246 参照。

(55)同様に -k が脱落した例だとする副 ww は,副使 wwšy に見られるものである,庄垣内正弘(1986)78頁参照。副にも入聲の p'jək 以外に去聲の p'jəu の讀みがあり,副使では去聲で讀まれていた。それ故,副使 wwšy が入聲の韻尾が組織的に脱落した後の漢語から導入されたものか,それ以前に導入されたものかは速斷出來ない。

(56) lyk の例は庄垣内正弘 (1986) 80頁参照。lyxzyr については Hamilton, 1986, xvii, n. 28; Hamilton, 1992a 参照。

(57) 庄垣内正弘 (1986) 79-80頁参照。なお -x で轉寫した文字は,少なくとも石の場合には -x ではなく -γ である。しかしここでは便宜上すべて -x で轉寫した。

(58) 質韻の他の文字については庄垣内正弘 (1986) 83-84頁参照。myr が後舌母音を含むことは格語尾等から明かである,Clauson, 1972, 771 参照。ただし前舌母音を含む mir の讀みもあったらしい,G. R. Rahmati, 1932, 432, 443 参照。いずれにしても蜜の讀みとして mir だけをあげるのは適切ではない。

(59) Kara, 1983, 45 参照。

(60) Clauson, 1972, 404 参照。

(61) 庄垣内正弘 (1986) 26-27頁参照。

(62) Clauson, 1972, 417 参照。この稱號についてはマニ文字による cygšyy も参照されたい。マニ文字の資料は 8 世紀後半のものである。

(63) 庄垣内正弘 (1986) 69頁中52参照。

(64) Csongor, 1952, 101 ; 庄垣内正弘 (1986) 72頁参照。

(65) kwn (<閫 k'uən)も早い時期の借用語であるが,逆に後舌母音が期待されるにも拘らず,前舌母音が立っている。これも並行する現象かもしれない。なお甲はウイグルのブラーフミー文字資料では,qyap と表記されている,庄垣内正弘 (1986) 85頁参照。2 等の字が -y- を伴っていることから Csongor は,牙・喉音聲母の 2 等字に散見する拗音化の 1 例とみなした,Csongor, 1962, 52-53 参照。この説明は確かに魅力的だが,問題がないわけではない。下で述べるように,多くの場合ウイグルの漢字音は字音となっていて,個々の漢字に一個の定着した發音形式が對應していたと考えられる。それらがウイグル語内部で變化することはあり得ても,漢語の側の變化に對應して變化することは原則としてなかった。甲の字音はウイグル文字の表記の x'p から推測して,qab であったと考えられる。從って qyap は,單なる誤寫でなければ,説明が困難である。今は不明の例として解明を將來の研究に委ねたい。

(66) 高田時雄 (1988) 146-47頁 ; 高田時雄 (1990) 329-30頁参照。

(67) 例 : 許 (上) kww, 庄垣内正弘 (1986) 95-96頁参照。

(68) 高田時雄 (1988) 185頁参照。

(69) 例は庄垣内正弘 (1986) 127-28頁から採った。ただし『慈恩傳』中のものだけを對象とした。

(70)ちなみに,魚韻の除がブラーフミー文字で čö と表記されていることから,魚韻の韻尾の音價として -ö が推定されている,庄垣内正弘 (1986) 76頁参照。しかし實際には,除は cyu と綴られているので čü と轉寫されるであろう,Gabain, 1954, 74; Csongor, 1962, 51 参照。從って魚韻の音價としては,-ü を想定するのが適切である。この音價はまた,チベット文字資料から想定されたそれとよく一致する。

(71) Gabain, 1974, 45-47 参照。

(72) 高田時雄 (1985) ; 高田時雄 (1990) 参照。

(73) Kara, 1991, 129-33 参照。

(74) 高田時雄 (1990) 337-42頁参照。

(75) Csongor, 1952, 104–5, nn. 4, 8；庄垣内正弘（1986）117–21頁；Kara, 1991, 130 参照。なお庄垣内正弘（1986）36頁の成 če は，Csongor, ibid. に従って，*če[ŋ]（あるいは *či[ŋ]）に改められるであろう。

(76) 高田時雄（1990）337–42頁参照。

(77) Csongor, 1952, 76, 105, n. 8 参照。ただし彼が借用語との差異を強調するあまり，これらの漢字音を "foreign form" とみなし，きわめて定着度の低い形式とみなすのは適切ではない。字音はいずれにしても，定着したものであるからである。

(78) 庄垣内正弘（1986）21頁参照。シンコ＝サリの『慈恩傳』の飜譯の特殊性については Röhrborn, 1990 も参照せよ。

(79) Kara が紹介している佛教漢文の韻文をウイグル文字で轉寫した資料も，組織的に漢字音を用いているという點で，字音の存在を證據附けるものである，高田時雄（1990）339–40頁及び Kara, 1991 参照。

(80) 高田時雄（1990）338–39頁参照。

(81) 高田時雄（1990）342頁参照。

(82) 高田時雄（1990）339頁参照。

(83) 庄垣内正弘（1986）122頁の議論を引用した。

(84) 高田時雄（1985）139頁参照。

(85) 華嚴經を表す x'yymky がそれである，Zieme, 1981, 387, n. 13 参照。yym という字音はこの經典名に由來しているのかもしれない。それにしてもこの名前がどのようにして成立したかは不明のままである。

(86) Csongor, 1962, 51 頁参照。

(87) 高田はさらに，注音資料では敦煌文書と異なり魚韻が止攝の開口字と混同されないことから，この資料のベースにある漢語は，魚韻が -u の音價を持っていた當時の長安の標準音と一致するという，高田時雄（1990）338頁参照。しかしこの點も通常のウイグル字音で說明が可能である。すなわちウイグル語には /ü/ と /i/ の對立があり，魚韻は前者，止攝の開口字は後者の母音を含むものとして受け入れられていたので，兩者は全く混同されることがなかったと考えられる。

(88) Kara, 1991, 130–31 参照。

(89) なお TⅡT に見られるような漢字音は，決してこれらの注音資料のベースにあったとは考えられない。なぜなら明・泥・疑の鼻音聲母は，TⅡT では脫鼻音化現象を示すものの，まだ鼻音要素を失わず他の非鼻音聲母とは異なる表記を受けている。一方注音資料では，脫鼻音化した聲母と非鼻音聲母の通用が見られるからである，高田時雄（1985）140–41頁参照。

(90) この間の事情は，最近の森安の論文に依據している，森安孝夫（1989）15–21頁参照。

(91) Röhrborn, 1988, 232–33 参照。

(92) 庄垣内正弘（1986）52頁参照。さらに Csongor, 1952, 116, no. 128 も参照。

(93) 庄垣内正弘（1986）52頁参照。

(94) 陰陽 yyn y'nk の例については，Röhrborn, 1991, 251 参照。

(95) y'nk についての高田の考え方については，高田時雄（1990）339頁参照。

(96) t'wcw の例については，Zieme, 1985, 106, 232 参照。ただし彼は t'wc'nk の方が t'wcw より新しく，モンゴル期に借用されたものと考えている，Zieme, 1985, 154 参照。t'wc'nk という形式は『慈恩傳』にも現れるので（Röhrborn, 1991, 225 参照），彼の說は受け入れられない。

(97) 高田時雄（1990）338–39頁参照。

(98) これらの2點は庄垣内によって明解に述べられている，庄垣内正弘（1986）123頁參照。

(99) この點は借用語についてもあてはまり，字音に限られたことではない。

(100) 高田時雄（1985）139頁；庄垣内正弘（1986）33頁參照。

(101) 語頭のβ-もまたウイグル語本來の音ではなく，「土着化」することがあったようだ。Kara が紹介した資料では聞が 'wn と表記されている，Kara, 1991, 131 參照。この字は『慈恩傳』の體系では，βyn と表記されていたであろう。

(102) Kara, 1991, 131–32 參照。

(103) 庄垣内正弘（1986）37頁參照。

(104) この說明は庄垣内によるものである，庄垣内正弘（1986）119頁及び注74參照。Zieme はいわゆる Insadi-sutra の中に我を nγ' と表記する例をあげている，Zieme, 1991, 317 參照。しかしこれも 'γ' と讀んで，有聲の摩擦音を正しく發音するために敢えて語頭に母音を添えていたと考えるべきであろう。

(105) この現象に關する最近の解釋については D. Doerfer, 1991, 176–77 參照。

(106) 庄垣内正弘（1986）65–68頁參照。Hamilton が校訂した敦煌出土の10世紀頃の文書では，沙州は š'cyw, š'c'w, š'cw と表記され，後舌の格語尾をとる。一方モンゴル期の文書では š'cw と表記され，前舌の語尾をとっている，Hamilton, 1986, 250；森安孝夫(1985a)84, 98頁；Hamilton, 1992, 120 參照。前者では二重母音としての發音から後舌とみなされ，後者では母音の融合により前舌母音として扱われたのであろう。ただし地名の構成要素である州 cyw は，介母を失って後舌の單母音に變化する場合も多かったようだ，庄垣内正弘（1986）68頁；G. Kara and Zieme, P., 1986, 354 參照。上の後舌の š'cw はそのような例であろう。これは語音借用期の「土着化」の例である。

(107) 例：癸 kwy kww, 卷 kwyn kwwn。庄垣内は卷 kwwn の例をチベット文字資料の kwon と結び附け，漢語の側の發音に由來するものと考えている，庄垣内正弘（1986）62–63頁參照。これに對して高田は，卷 kwon の特殊性は漢語の發音とは無關係でチベット文字 w の影響によるものとしている，高田時雄（1988）153頁參照。

(108) 新資料の出現によっても，本稿の記述は改善されることになるだろう。例えば1992年の夏 S. Raschmann 女史と森安孝夫氏はベルリンの資料の中に，漢文のテキストにウイグル文字で發音を記入した斷片 (Ch 2921＝TⅡT 1506) を發見した。この資料については Raschmann 女史と高田時雄氏が共同で論文を發表する豫定であると聞く。森安氏の傳えるところによれば，そこには願 ngi̯wɐn を 'wkwn と音注している例があるという。この字は『慈恩傳』のシステムでは *kwyn と綴られているはずである。wy が w に單純化されることは豫想されるとおりである。一方初頭に 'w- が立つのは，我 'γ' の場合と同樣有聲音の發音を容易にするための便宜であろう。

V

(1) Sims-Williams and Hamilton, 1990 參照。

(2) Sims-Williams and Hamilton, 1990, 9–12 參照。

(3) この本に對する書評において，筆者は既にいくつかの例について檢討を加えておいた，Yoshida, 1993 參照。ただそこでは書評という性質から，特に問題があると思われる比定だけしか扱うことができなかった。

(4) 文書では βwšyn あるいは βwsyn と書いてあったものを βwcyn に改めてある。

(5) 文書では斜格形 c'nkl'γy で現れるので，γ と轉寫した文字が x か γ かは不明である。

(6) この人名は Sims-Williams and Hamilton が校訂した文書に現れるものではなく，敦煌出土のコータン語文獻の欄外に書かれたものである，Bailey, 1969, 104 及び M. Dresden, 1955, 446 參照。

(7) ''n cwrt'n にぴったり對應する人名の安拙單が，敦煌出土の漢文文書に現れることが最近明らかにな

った，吉田　豐（1993）113頁參照。

（8）熊本　裕（1985）122，138頁參照。出土文書から推定すれば，張金山はコータン出身の貴族（あるいは富裕な商人）で，壬午年（982年）には敦煌において，寫經や燃燈の功德を施したらしい。彼自身はトルコ系であったからか，自分の名前をソグド文字で書いている。10世紀の敦煌とコータン出身のトルコ人が何らかの關係を有していたことは，敦煌出土のトルコ語文書からも知られる，Hamilton, 1986, 103–5 參照。

（9）Sims-Williams and Hamilton, 1990, 34–35, 57–58 參照。

(10) Sims-Williams and Hamilton, 1990, 27–28 參照。

(11) Sims-Williams and Hamilton, 1990, 23, 64 は，漢語に由來する語にのみこの補助記號が用いられているとする。補助記號を伴う語は，これと No. 34 の 2 例しか存在しないので，性急な判斷は避けるべきではなかろうか。

(12) 土肥義和（1980）253–58頁所收の敦煌文書に現れる人名の表を參考にした。

(13) Hamilton, 1958, 122–23 參照。

(14) 高田時雄（1988）85–86頁參照。

(15) c'nkl'γ と śālahä の差異についてのこの說明は，高田時雄氏によるものである。氏の快諾を得てここに引用した。なお Hamilton 自身はこの聲母に關する矛盾については言及していない。

(16) この例は森安孝夫（1989a)72–80頁から引用した。ソグド商人やウイグル商人は，この地名を古い時代に彼らの言語に定着した發音で，しかも背後にある漢字を考慮せず使っていたのに對し，コータン人は敦煌やハミの周邊の地名を當時の漢字音で發音していたことになる。

(17) これらにはどれもクエスチョンマークが附けられており，Hamilton 自身自分の比定に問題があることは承知している。また -ng 韻尾の脫落のように，どの時代の漢語から借用されたか不明の場合には，必ずしも比定そのものを排除することができない。例えば下に論じる杏 γynk が古い時代の借用語であれば，形式そのものには問題がない。ただこの場合には，借用語であったとすればもう少し多くの事例が，中央アジア出土の諸言語文獻に在證されたはずである。

(18) Yoshida, 1993 參照。

(19) 高田時雄（1991）261頁參照。

(20) t'k と讀んで德韻の姓（例えば德など）を比定すべきだろうか。

(21) 輕唇音化すると介母は失われるので，敦煌出土の數字の表の六 lyγ (～lwk, lwk') と比較することはできない。

(22) この點は既に書評の中で指摘しておいた，Yoshida, 1993 參照。

(23) Sims-Williams and Hamilton, 72 參照。

(24) リストの中の（？）を附けたもの (Nos. 4, 5, 14, 15, 18, 33) は，漢字 2 字から成り立った漢人の名である，Sims-Williams and Hamilton, 1990, 26, etc. 參照。これらについては可能性が多すぎて，確實な比定ができない。

Ⅵ

（1）それらについての代表的な研究は池田　溫(1965)及び Weber, 1972 である。他には筆者による「ソグド語の人名を再構する」『三省堂ぶっくれっと』(1991年 1 月號）66–71頁もある。そこでは人名の再構成の手法・問題點・意義をまとめておいた。散發的な人名比定は Yoshida, 1984; idem, 1991, 237–44 にも提案されている。また未發表ながら，作　功一氏が平成元年度に大阪大學文學部に提出した卒業論文「トルファンのトルコ人」も參考になる。

（2）最近比定されたものに『通典』に引用された杜環の「經行記」中の，康國の神祠の名稱の拔 b'wât

がある。M. Schwartz はこれをソグド語で寺院を意味する 'pw'δ'k の轉寫であると考えた, Schwartz, 1974, 261 参照。この語に附いての從來の説については桑田六郎 (1961) 383–98頁を參照せよ。古くから議論されてきた薩寶に關しては筆者の研究 (吉田 豐 (1988a)165–76) を見られたい。

(3) この種の資料は向達『唐代長安與西域文明』北京 (1957) 1–116頁に引用されている。これ以後も資料は發見されているらしい。例えば超振華・朱亮「安菩墓志初探」『中原文物』(1982) 第3期參照 (筆者未見)。

(本稿は平成5年度科學研究費 (一般 C)による研究成果であり, 共同研究「4–8世紀の中央アジアとインド」(班長 桑山正進) の成果『慧超往五天竺國傳研究』附論の一部に相當する。)

附錄1 TⅡT の漢字音 (ソグド文字表記のアルファベッド順)

	中古音/現代音	ソグド文字	行數
惡	·âk/o	''x	4, 6
懃	g'i̯ən/k'in	'k̤y(n)	2
業	ngi̯ɐp/ye	'nk̤'yp	6
疑	ngji/yi	'nky	6
魔	muâ/mo	'nṗ'	4
昧	muâi/mei	'nṗ'y	3
滅	mi̯ät/mie	'nṗ'yr	6
乃	nâi/nai	'nt'y	1
念	niem/nien	'nt'ym	4
薄	b'âk/po	'p'x	6
於	·uo/wu	'w	7(bis)
憂	·i̯ə̯u/yu	'y'w	7
益	·i̯äk/yi	'yγ	2, 3
一	·i̯ět/yi	'yr	3, 6
網	mi̯wang/wang	β'nk	6
文	mi̯uən/wen	βn	2
微	mjwe̯i/wei	βy	6
方	pi̯wang/fang	β'nk	4
佛	b'i̯uət/fu	βr	1(bis), 4
誹	pjwe̯i/fei	βy	5
者	tśi̯a/chê	c'	2, 3(bis), 4(bis), 5, 6, 7(bis)
長	d̂'i̯ang/ch'ang	c''nk	7
諸	tśi̯wo/chu	cw	4(bis), 6
專	tśi̯wän/chuan	cwyn	2
至	tśi/chï	cy	1
之	tśi/chï	cy	4, 5
障	tśi̯ang/chang	cy''nk	6
境	ki̯ɐng/king	k̤'ynk	7
輕	k'i̯äng/k'ing	k̤'ynk	1

逕	kieng/king	ḳ'ynk	1
敬	kiɐng/king	ḳ'ynk	1
恐	k'i̯wong/k'ung	kwnk	4
覺	kåk/küe	ḳw(γ?)	6
鬼	kjwe̯i/kuei	ḳwy	4; (kwy) 5
界	kăi/kie	ḳy'y	7
九	kji̯ə̯u/kiu	k(y)'w	5
起	k'ji/k'i	ky	2
明	mi̯wɐng/ming	m'ynk	2
能	nəng/neng	nnk	2, 4
謗	pwâng/pang	p'nk	5
不	puət/pu	pr	1(bis), 4(bis)
菩	b'uo/p'u	pw	1
怖	p'uo/p'u	pw	4
來	lâi/lai	ṛ''y	1, 7
亂	luân/luan	ṛw'n	5
論	luən/lun	ṛwn	2
利	lji/li	ṛy	3
離	ljie̯/li	ṛy	5, 7
六	li̯uk/lu, liu	ṛywγ	7; ṛywγ 5
三	sâm/san	s'm	3, 4
薩	sât/sa	s'r	1
四	si/sï	sy	5
死	si/sï	sy	1
修	si̯ə̯u/siu	sy'w	2
心	si̯əm/sin	sym	2
信	si̯ĕn/sin	syn	2, 7
所	ṣi̯wo/so	š	4(bis), 5
生	ṣɐng/sheng	š'nk	1
甚	źi̯əm/shen	š'ym	5
成	źi̯äng/ch'eng	š'ynk	1
少	śi̯äu/shao	š'yw	2
說	śi̯wät/shuo	šw'yr	2
是	źie̯/shï	šy	1
常	źi̯ang/ch'ang	šy'nk	3
世	śi̯äi/shï	šy'y	3
深	śi̯əm/shen	šym	5
神	dź'i̯ĕn/shen	šyn	5
十	źi̯əp/shï	šyp	3, 4, 5
多	tâ/to	t'	2
他	t'â/t'o	t'	1

當	tâng/tang	t'nk	1, 3
道	d'âu/tao	t'w	2, 5
種	tśi̯wong/chung	tcwnk	3, 5
重	ɖ'i̯wong/chung	tcwnk	6
得	tək/tê	tk	2, 3, 7
切	ts'iei/ts'ie	ts'y	6
漸	tsi̯äm/chien	ts'ym	6; tsym 6
	(dz'i̯äm/tsien)		
增	tsəng/tseng	tsnk	7
罪	dz'uâi/tsuei	tsw'y	6
此	ts'iẹ/ts'ï	[t](s)y	3
精	tsi̯äng/tsing	tsynk	2
七	ts'i̯ĕt/ts'i	tsyr	7
爲	jwiẹ/wei	wy	3(bis), 4, 5
云	ji̯uən/yün	wyn	3
遠	ji̯wɐn/yüan	wyn	5, 7
何	γâ/ho	x'	3
現	γien/hien	x'yn	3
護	γuo/hu	xw	4
五	nguo/wu	γw	2, 6
外	nguâi/wai	γw'y	5
悔	xuâi/huei	xw'y	7
學	γâk/hüe	xwγ	3
惑	γwək/huo	xwk	5
故	kuo/ku	x̧w	1
觀	kuân/kuan	x̧w'n	7
更	kɐng/keng	x̧y'nk	1
以	i/yi	yy	1
二	ńźi/er	ẓy	4
若	ńźi̯ak/jo	ẓy'γ	2
如	ńźi̯wo/jo	ẓyw	2, 7

附録 2　Mainz の漢字音

一	·i̯ĕt/yi	'y	2, 5, 8
凡	b'i̯wɐm/fan	β'm	V3
梵	b'i̯wɐm/fan	β'm	9
法	pi̯wɐp/fa	β'p	4, 7, V4 β('p), V7 β(')[p]
房	b'i̯wang/fang	βw	V6
夫	pi̯u/fu	βw	V3

父	b'ɨu/fu	βw	9
方	pɨwang/fang	βw	3
無	mɨu/wu	βw	2(bis), 6(bis), V3(bis)
微	mjwɛ̨i/wei	β(wy?)	V2
佛	b'ɨuət/fu	βr	5
住	d̂'ɨu/chu	cw	3
中	tɨung/chung	[cwn]k	V5
之	tśi/chī	cy	8
眞	tśɨěn/chen	[cy]n	2
場?		cw	V8
照	tśɨäu/chao	cyw	7
境	kɨɐng/king	(k)[ ]	3
迦	ka/kia	k'	V1
去	k'ɨwo/k'ü	kw	2
虛	xɨwo/hü	kw	7
願	ngɨwɐn/yüan	ḳwyn	6
祇	g'jiɛ̨/k'i	ḳy	6, V5 ky
敬	kɨɐng/king	ky	V5
極	g'ɨək/ki	kyk	6
金	kɨə̯m/kin	kym	V2, V4, V7
金?		ky(m)	V8
九	kɨə̯u/kiu	(ky)[w]	9
滿	muân/man	m'n	7(bis)
無	mɨu/wu	mw	4, 7, V1, V4, V7
名	mɨäng/ming	my	9, 9 (m)[y], V1
?		my	1
南	nậm/nan	n'	7, V1, V4
		[n](')m	V5
?		ny	V1
般	puân/pan	p'	V4, V6, V8
波	puâ/po	p'	V2, V4, V6, V8 (p)[']
摩	muâ/mo	p'	9
百	pɐk/po	(p')[x]	V1
北	pək/pei	p'k	8
報	pâu/pao	p'(w)	7
母	mə̯u/mou	pw	9
毗	b'ji/p'i	p(y)	5
邊	piwen/pien	pyn	6
蜜	mɨět/mi	pyr	V2, V4, V6 p(y)[r]
羅	lâ/lo	ṛ'	V2, V4, V6
來	lậi/lai	ṛ'y	9, 2 (ṛ)['y], V6 ṛ(')[y]

累	lj̯wi/lei	(rwy)	6
禮	liei/li	ṛy	V5, 5, 8 [ṛ]y
?		ṛy	1
林	lj̯əm/lin	ṛym	V5
蓮	lien/lien	ṛyn	5
三	sâm/san	s'm	6
雪	sj̯wät/süe	swyr	8
須	sj̯u/sü	sy[w]	V5
斯	sję/sï	sy	V6
息	sj̯ək/si	syk	V4
心	sj̯əm/sin	sym	2, 8, 5 s[ym]
舍	śj̯a/shê	š'	V5
釋	śj̯äk/shï	š'	V1
色	ṣj̯ək/se	š'k	V3
山	ṣǎn/shan	š'n	6, 8
尙	źj̯ang/shang	šw	0
常	źj̯ang/ch'ang	šw	3
生	ṣɐng/sheng	šy	8
世	śj̯äi/shï	[š]y	V7
城	źj̯äng/ch'eng	šy	V5
聲	śj̯äng/sheng	šy	V3
十	źj̯əp/shï	šy	3
深	śj̯əm/shen	šym	V2, V4, V7
甚	źj̯əm/shen	šym	V2, V4
身	śj̯ěn/shen	šyn	4, V1, 7 (š)[yn]
十	źj̯əp/shï	šyp	9
多	tâ/to	t'	V2, V4, V5
德	tək/tê	t'k	4, 6
道?		t'w	V8
尊	tsuən/tsun	tsw(?)	3
		tswn	V7
罪	dz'uâi/tsuei	tswy	V3
淸	ts'j̯äng/ts'ing	(tsy)	4
淨	dz'j̯äng/tsing	tsy	4, 9 [t](s)y
積	tsj̯äk/tsi	tsyk	6
千	ts'ien/ts'ien	tsyn	V1, 5 [tsy](n)
同	d'ung/t'ung	twnk	3, V1, 4 (t)[wnk]
地	d'i/ti	ty	8
體	t'iei/t'i	ty	7
?		(t)y	V9
和	γuâ/ho	w'	0

維	j̧wi/wei	wy	9
永	jj̧wɐng/yung	wy	V4
衞	jj̧wäi/wei	wy	V5
圓	jj̧wän/yüan	w[y]n	7
?		x’	V9
?		ẍ(’)[ ]	V7
下	γa/hia	x(’)	V5
我	ngâ/wo	x’	V3
迦	ka/kia	ẍ’	9
海	xâi/hai	x’y	6
界	kăi/kie	x’y	7
剛	kâng/kang	ẍw	V2, V4
?		xw	1
化	xwa/hua	xw’	V1
華	γwa/hua	xw[’]	5
功	kung/kung	xwnk	4
空	k’ung/k’ung	ẍwnk	7, V3(bis)
?		xw(nk)	V9
行	γɐng/hing	xy	6
耶	j̧a/ye	y’	9
葉	j̧äp/ye	yyp	5
若	ńźj̧a/jo	z̧’	V4, V6, V2 [z̧]’, V8 [z̧](’)
如	ńźj̧wo/ju	z̧w	2, 8, V6
人	ńźj̧ĕn/jen	z̧yn	V3

附錄 3 (1) ソグド語の音韻體系と文字

ソグド語の音韻體系

子音			唇	齒	齒莖	硬口蓋	軟口蓋／口蓋垂	聲門
	閉鎖・破擦音	無聲	p	t	(t͡s)	č	k	
		有聲	(b)	(d)		(j)	(g)	
	摩擦音	無聲	f	θ	s	š	x	(h)
		有聲	β	δ	z	ž	γ	
	鼻音		m	n				
	半母音		w	y				
	流音			(l)	r			

母音(2)

i, ī, ü	(ɨ)(3)	u, ū
e, ē, ȫ	(ə)(3)	(o) ō
	a, ā	

文字と音價

文字轉寫	ソグド文字	マニ文字	シリア文字
ʼ	ǎ (ə, ɨ)	ǎ (ə, ɨ)	ǎ (ə, ɨ)
ʻ	ʻ(4)	ɨ	
b	B(4)	(b)	β (b)
β	β	β	
β	f		
c	č (j, t͡s)	č(j)	č(j, t͡s)
d	D(4)	(d)	δ
δ	δ, θ, (l)(5)	δ, θ	
f	(=β, p̈)	f	f
g		(g)	(g)
γ	γ	γ	γ
h(6)	-ǎ, ゼロ	(h)(7)	(h)(7)
h̲(8)		ゼロ	(h)(7)
j		ž(j)	
k	k(g)	k	k
l	L(4)	(l)(5)	(l)(5)
m	m	m	m
n	n, ṁ(9)	n, ṁ(9)	n, ṁ(9)
p	p(b), f	p(b)	p(b)
p̈(10)	f		
q	Q(11)	=k(12)	k(g)
r	r, l(5), r(13)	r, r(13)	r, r(13)
s	s	s	s
š	š	š	š
t (tau)	t(d)	t(d)	
ṭ (teth)	—(14)	=t(15)	t
θ			θ
x(16)	x(h)(7)	x	x
w(17)	w, ǔ, ǒ	w, ǔ, ǒ	w, ǔ, ǒ
y	y, ǐ, ě	y, ǐ, ě	y, ǐ, ě
z	z, ž	z	z
ẓ/z̤(18)	z, ž		
ž			ž

（注）（1）Sims-Williams, 1981, 1984, 1989a を参考にした。なお表中の（丸括弧）内のものは，周邊的な音素或いは異音である。

（2）單母音のみ。他に二重母音 aṁ[=aā], etc. 及びそり舌母音 iʳ, etc. がある。

（3）音素 /a/ の異音。

（4）ideogram にだけ使われる。

（5）l はほとんど借用語に限られる。

（6）ソグド文字では語末にしか現われない。

（7）h はほとんど借用語に限られる。

（8）マニ文字では語末にしか現われない。

（9）ṁ は二重母音の後分となる鼻音要素。上記注 2 参照。

（10）この文字はマニ教ソグド語文書にのみ現われる。その他の p に補助記號を附した文字については，本文358-357頁参照。

（11）Q と文字轉寫され100を表わす數字として使われる。

（12）文字 k と同じ音價。

（13）そり舌母音を示す。

（14）この文字が使用された例は見つかっていない。

（15）文字 t と同じ同價。

（16）x に補助記號を附けた文字の音價については本文358頁参照。

（17）wy は ü, ō̄ を表わす。

（18）z に補助記號を附けた文字の音價については本文357頁参照。

参考文獻

和文・中文

赤沼智善（1986）『印度佛教固有名詞辭典』（再版）、京都

荒川正晴（1989）トゥルファン出土「麴氏高昌國時代ソグド文女奴隷賣買文書」の理解をめぐって。『内陸アジア言語の研究』V、137-53頁

池田　溫（1965）8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落。『ユーラシア文化研究』1，49-92頁

池田　溫（1980）敦煌の流通經濟。『講座敦煌 3　敦煌の社會』、東京、297-343頁

岩佐精一郎（1935）唐代ソグド城塞の發掘と出土文書。『東洋學報』22-3，129-39頁

上山大峻（1990）『敦煌佛教の研究』、京都

梅村　坦（1980）住民の種族構成—敦煌をめぐる諸民族の動向—。『講座敦煌 3　敦煌の社會』、東京、197-223頁

榎　一雄（1980）ソグド商人の手紙。『講座敦煌 1　敦煌の自然と現狀』、東京、263-75頁

川崎ミチコ（1980）禮讚文・塔文。『講座敦煌 8　敦煌佛典と禪』、東京、307-16頁

姜　伯勤（池田　溫譯）（1986）敦煌・吐魯番とシルクロード上のソグド人（二）。『季刊東西交涉』第 5 卷 2 號、26-36頁

姜　伯勤（1990）敦煌與波斯。『敦煌研究』1990年第 3 期、1-15頁

百濟康義・Zieme, P.（1985）『ウイグル語の觀無量壽經』、京都

熊本　裕（1985）コータン語文獻概說。『講座敦煌 6　敦煌胡語文獻』、東京、101-40頁

桑田六郎（1961）校勘杜環經行記。『和田博士古稀記念東洋史論叢』、東京、383-98頁
桑山正進（1992）『慧超往五天竺國傳研究』、京都大學人文科學研究所、京都
庄垣内正弘（1982）古代トルコ語 n 方言における i/ï の低母音化について。『神戸外大論叢』、第33巻第3號、39-57頁
庄垣内正弘（1986）ウイグル文獻に導入された漢語に關する研究。『内陸アジア言語の研究』Ⅱ、17-156頁
庄垣内正弘（1991）『古代ウイグル文阿毘達磨倶舍論實義疏の研究』Ⅰ、京都
高田時雄（1985）ウイグル字音考。『東方學』70，134-50頁
高田時雄（1988）『敦煌資料による中國語史の研究』、東京
高田時雄（1988a）コータン文書中の漢語語彙。『漢語史の諸問題』、京都大學人文科學研究所、京都、71-128頁
高田時雄（1990）ウイグル字音史大概。『東方學報』京都、第62册、329-43頁
高田時雄（1991）五姓を說く敦煌資料。（國立民族學博物館研究報告別册14號）、249-68頁
土肥義和（1980）歸義軍（唐後期・五代・宋初）時代。『講座敦煌 2　敦煌の歷史』、東京、235-96頁
多魯坤＝闕白爾・梅村　坦・森安孝夫（1990）ウイグル文佛教尊像受領命令文書研究—USp. No. 64 などに見える“čuv”の解釋を兼ねて—。『アジア・アフリカ言語文化研究』40，13-34頁
中村　元（1981）『佛教語大辭典』（縮刷版）、東京
水谷眞成（1957）唐代に於ける中國語語頭鼻音 Denasalization の進行過程。『東洋學報』39-4，1-31頁
水谷眞成（1959）Brāhmī　文字轉寫羅什譯金剛經の漢字音。『名古屋大學文學部十周年記念論集』、749-74頁
護　雅夫（1972）突厥帝國內部におけるソグド人の役割に關する一資料—ブグト碑文。『史學雜誌』81-2，77-86頁
護　雅夫（1976）『古代遊牧帝國』、東京
森安孝夫（1979）增補：ウィグルと吐蕃の北庭爭奪戰及びその後の西域情勢について。『アジア文化史論叢』3、東京、199-238頁
森安孝夫（1985）チベット文字で書かれたウィグル文佛教教理問答 (P. t. 1292) の研究。『大阪大學文學部紀要』25，1-85頁
森安孝夫（1985a）ウイグル語文獻。『講座敦煌 6　敦煌胡語文獻』、東京、1-98頁
森安孝夫（1987）敦煌と西ウイグル王國—トゥルファンからの書簡と贈り物を中心に—。『東方學』74，58-74頁
森安孝夫（1989）トルコ佛教の源流と古トルコ語佛典の出現。『史學雜誌』98-4，1-35頁
森安孝夫（1989a）ウイグル文書箚記（その二）。『内陸アジア言語の研究』Ⅴ、69-89頁
森安孝夫（1990-91）『ウイグル＝マニ教史の研究』『大阪大學文學部紀要』31・32合併號
矢野道雄（1986）『イスラム初期の天文學・占星術書に見られるインド要素の研究』昭和60年度科學研究補助金（一般 C）研究成果報告書、京都產業大學國際言語科學研究所
吉田　豐（1984）ソグド語研究文獻目錄（1974-1984）。『西南アジア研究』23，81-87頁
吉田　豐（1986）漢譯マニ教文獻における漢字音寫された中世イラン語について（上）。『内陸アジア言語の研究』Ⅱ、1-15頁
吉田　豐（1988）カラバルガスン碑文のソグド語版について。『西南アジア研究』28，24-52頁
吉田　豐（1988a）ソグド語雜錄　Ⅱ。『オリエント』31-2，165-76頁
吉田　豐（1989）ソグド語雜錄　Ⅲ。『内陸アジア言語の研究』Ⅴ、91-107頁

吉田　豐（1990）新疆維吾爾自治區新出ソグド語資料。『内陸アジア言語の研究』Ⅵ、57-83頁
吉田　豐（1991）ソグド語佛典解說。『内陸アジア言語の研究』Ⅶ、95-119頁
吉田　豐（1993）書評：森安孝夫（1990-91）。『史學雜誌』102-4, 105-115頁
吉田　豐・森安孝夫・新疆維吾爾自治區博物館（1988）麴氏高昌國時代ソグド文女奴隸賣買文書。『内陸アジア言語の研究』Ⅳ、1-50頁
羅　常培（1933）『唐五代西北方音』、上海
林　梅村（1992）粟特文買婢契與絲綢之路上的女奴貿易。『文物』1992年第9期、49-54頁

歐文

Aalto, P. (1964) Word-pairs in Tokharian and other languages. *Linguistics* 5, 69–78.
AoF: *Altorientalische Forschungen*.
AOH: *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*.
APAW: *Abhandlungen der Preussischen Akademie der Wissenschaften*.
Asmussen, J.P. (1965) *Xᵘāstvānīft. Studies in Manichaeism*, Copenhagen.
Bailey, H.W. (1937) Ttaugara. *BSOS* 4, 883–921.
Bailey, H.W. (1937a) Hvatanica. *BSOS* 4, 923–36.
Bailey, H.W. (1967) *Prolexis to the book of Zambasta. Khotanese texts VI*, Cambridge.
Bailey, H.W. (1969) *Khotanese texts I–III*, 2nd ed., Cambridge.
Bailey, H.W. (1979) *Dictionary of Khotan Saka*, Cambridge.
Bailey, H.W. (1982) *The culture of the Sakas in Ancient Iranian Khotan*, Columbia lectures on Iranian studies, No. 1, New York.
BBB=Henning (1936).
Benveniste, E. (1933) Notes sur les textes sogdiens bouddhiques du British Museum. *JA* 223, 193–245.
Benveniste, E. (1940) *Textes sogdiens*, Paris.
Benveniste, E. (1942–45) Review of R. Bleichsteiner et al., *Wörterbuch der heutigen mongolischen Sprache mit kurzem Abriss der Grammatik und ausgewählten Sprachproben*, Wien-Peking, 1941. *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 42, 188–89.
Benveniste, E. (1951) Notes sogdiennes. *JA* 239, 113–24.
Bogoljubov, M.N. and O.I. Smirnova (1963) *Sogdijskie dokumenty s gory Mug* III, Moscow.
Boyce, M. (1975) *A reader in Manichaean Middle Persian and Parthian*, Acta Iranica 9, Tehran-Liège.
Brough, J. (1962) *The Gāndhārī Dharmapada*, London.
BSO(A)S: *Bulletin of the School of Oriental (and African) Studies*.
Chavannes, E. and P. Pelliot (1913) Un traité manichèen retrouvé en Chine (deuxième partie). *JA*, 99–199, 261–394.
Cadonna, A. (ed.) (1992) *Turfan and Tun-huang the texts*, Florence.
Clauson, G. (1972) *An etymological dictionary of pre-thirteenth-century Turkish*, Oxford.
Csongor, B. (1952) Chinese in the Uighur script of the T'ang-period. *AOH* 2, 73–121.
Csongor, B. (1954) Some more Chinese glosses in Uighur script. *AOH* 4, 251–57.
Csongor, B. (1962) Chinese glosses in Uighur texts written in Brahmi. *AOH* 15, 49–53.
Dhu: see MacKenzie (1976), 33–51.
Dhy: see MacKenzie (1976), 53–77.

Doerfer, D. (1991) Bemerkungen zur chronologischen Klassifikation des älteren Türkischen. *AoF* 18, 170–86.

Dresden, M. J. (1955) *The Jātakastava or "praise of the Buddha's former births.* (Transactions of the American Philological Society, N. S. Vol. 45, Part 5), Philadelphia.

Ecsedy, H. (1965) Old Turkic titles of Chinese origin. *AOH* 18, 83–91.

Edgerton, F. (1953) *Buddhist Hybrid Sanskrit grammar and dictionary*, Vol. II: Dictionary, New Heaven.

Emmerick, R. E. (1992) The Dunhuang MS. Ch 00120: its importance for reconstructing the phonological system of Khotanese. in: Cadonna (1992), 145–70.

Fedakar, D. (1991) Das Alttürkische in sogdischer Schrift. Textmaterial und Orthographie (Teil I). *Ural-Altaische Jahrbücher* 10, 85–98.

Gabain, A. von (1935) Die uigurische Übersetzung der Biographie Hüen-tsangs, I. Bruchstücke des 5. Kapitals. *SbPAW*, 151–80.

Gabain, A. von (1954) Türkische Turfan-Texte VIII, *Abhandlungen der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin*, Jahrgang 1952, Nr. 7.

Gabain, A. von (1974) *Alttürkische Grammatik*, 3rd ed., Wiesbaden.

Gabain, A. von (1976) Alt-türkische Texte in sogdischer Schrift. *Hungaro-Turcica. Studies in honour of J. Németh*, Budapest, 69–77.

Gauthiot, R. and P. Pelliot (1926–28) *Le Sûtra des Causes et des Effets du Bien et du Mal*, Tome II, Paris.

Gershevitch, I. (1954) *A grammar of Manichean Sogdian*, Oxford.

Gershevitch, I. (1962) The Sogdian word for "advice", and some Muγ documents. *Central Asiatic Journal* 7, 77–95.

Giles, L. (1957) *Descriptive catalogue of the Chinese manuscripts from Tunhuang in the British Museum*, London.

GMS: Gershevitch (1954).

Grenet, F. and N. Sims-Williams (1987) The historical context of the Sogdian Ancient Letters. *Transition periods in Iranian history*, (Studia Iranica. Cahier 5), Paris, 101–22.

Hamilton, J. (1955) *Les ouïghours à l'époque des Cinq Dynasties*, Paris.

Hamilton, J. (1958) Autour du manuscrit Staël-Holstein. *T'oung Pao* 46, 115–53.

Hamilton, J. (1981) Les nombres chinois de un à trente en transcription sogdienne. Soymié, M. (ed.), *Nouvelles contribution aux études de Touen-houang*, Genève, 295–301.

Hamilton, J. (1986) *Manuscrits ouïgours du IXe-Xe siècle de Touen-houang*, Tome I, Paris.

Hamilton, J. (1992) Étude nouvelle de la lettre Pelliot ouigour 16 bis d'un Bouddhiste d'époque mongole. in: Cadonna (1992), 97–121.

Hamilton, J. (1992a) Calendriers manichéens ouïgours de 988, 989 et 1003. Bacqué-Grammont, J. L. et al. (eds.), *Mélanges offerts à Louis Bazin par ses disciples, collègues et amis*, Paris, 7–23.

Hamilton, J. and N. Beldiceanu (1968) Recherches autour de *qars*, nom d'une étoffe de poil. *BSOAS* 31, 330–46.

Hansen, O. (1941) *Berliner soghdische Texte I. Bruchstücke einer soghdischen Version der Georgspassion* (C1), *APAW*, Nr. 10.

Harmatta, J. (1979) Sogdian sources on the history of Pre-Islamic Central Asia. Harmatta, J. (ed.), *Prolegomena to the sources on the history of Pre-Islamic Central Asia*, Budapest, 153–65.

Harmatta, J. (1989) The language of the Southern Sakas. *Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae* 32, 299–307.

Harmatta, J. (1992) Origin of the name Tun-huang. in: Cadonna (1992), 15–20.

Henning, W. B. (1936) Ein manichäisches Bet- und Beichtbuch. *APAW*, Nr. 10 (published in 1937).

Henning, W. B. (1937) A list of Middle Persian and Parthian words. *BSOS* 9, 79–92.

Henning, W. B. (1939) Sogdian loan-words in New Persian. *BSOS* 10, 93–106.

Henning, W. B. (1940) *Sogdica*, London.

Henning, W. B. (1945) Sogdian tales. *BSOAS* 11, 465–87.

Henning, W. B. (1945a) The Manichaean fasts. *Journal of Royal Asiatic Society*, 146–64.

Henning, W. B. (1946) The Sogdian texts of Paris. *BSOAS* 11, 713–40.

Henning, W. B. (1948) The date of the Sogdian Ancient Letters. *BSOAS* 12, 601–15.

Intox: see MacKenzie (1976), 7–10.

Isebaert, L. (1983) Der Beitrag der indischen Lehnwörter zu Problemen der tocharischen Phonologie. Röhrborn, K. and W. Veenker (eds.), *Sprachen des Buddhismus in Zentralasien*, Wiesbaden, 35–43.

JA: *Journal Asiatique*.

Kahar Barat (1992) The Uighur Xuanzang biography, volume III. *Journal of Turkish Studies* 16, 5–65.

Kara, G. (1983) Sino-uigurische Wortereklärungen. Röhrborn, K. and W. Veenker (eds.), *Sprachen des Buddhismus in Zentralasien*, Wiesbaden, 44–52.

Kara, G. (1991) Mittelchinesisch im Spätuigurischen. Klengel, H. and W. Sundermann (eds.), *Ägypten Vorderasien Turfan*, Berlin, 129–33.

Kara, G. and P. Zieme (1986) Die uigurische Übersetzung des apokryphen Sūtras 'Fo ding xin da tuo luo ni'. *AoF* 13, 318–76.

Karlgren, B. (1957) *Grammata Serica Recensa*, Stockholm.

Klimkeit, H.-J. (1989) *Hymnen und Gebete der Religion des Lichts. Iranische und türkische liturgische Texte der Manichäer Zentralasiens*, Opladen.

Kljaštornyj, S. G. and V. A. Livšic (1972) The Sogdian inscription of Bugut revised. *AOH* 26, 69–102.

Kudara, K. and W. Sundermann (1987) Zwei Fragmente einer Sammelhandschrift buddhistischer Sūtras in soghdischer Sprache. *AoF* 14, 334–49.

Kudara, K. and W. Sundermann (1988) Fragmente einer soghdischen Handschrift des *Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitā-sūtra*. *AoF* 15, 174–81.

Kudara, K. and P. Zieme (1984) Fragmente zweier unbekannter Handschriften der uigurischen Xuanzang-Biographie. *AoF* 11, 136–48.

L: Sogdian fragment of the Leningrad collection, see Ragoza, *Sogdijskie fragmenty central'noaziatskogo sobranija Instituta vostokovedenija*, Moscow, 1980.

La Valée Poussin, L. de and R. Gauthiot (1912) Fragment final de la Nilakanthadharani en Brahmi et en transcription sogdienne. *Journal of the Royal Asiatic Society*, 629–45.

Laut, P. (1986) *Die frühe türkishe Buddhismus und seine literarische Denkmäler*, Wiesbaden.

Le Coq, A. von (1919) Kurze Einführung in die uigurische Schriftkunde. Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen. *Westasiatische Studien* 22, 93–109.

Livšic, V.A. (1962) *Sogdijskie dokumenty s gory Mug* II, Moscow.

Lüders, H. (1933) Zur Geschichte des Ostasiatischen Tierkreises. *SbPAW*, 998–1022.

M 1: see Müller (1912)

M 115: see Müller (1907)

MacKenzie, D.N. (1970) *The 'Sūtra of the causes and effects of actions' in Sogdian*, London.

MacKenzie, D.N. (1976) *The Buddhist Sogdian texts of the British Library*, Acta Iranica 10, Tehran-Liège.

MacKenzie, D.N. (1990) *The Khwarezmian element in the Qunyat al-Munya*, London.

Maue, D. (1983) Vorläufige Bemerkungen zu den Gutturalgraphemen. *Ural-Altaische Jahrbücher* 3, 90–96.

Müller, F.W.K. (1907) Die "persischen" Kalenderausdrücke im chinesischen Tripiṭaka. *SbPAW*, 458–65.

Müller, F.W.K. (1912) *Eine Doppelblatt aus einem manichäischen Hymnenbuch (Mahrnāmag), APAW*, Nr. 5 (published in 1913).

Müller, F.W.K. (1912a) Der Hofstaat eines Uiguren-Königs. *Festschrift Vilhelm Thomsen*, Leipzig, 207–13.

Müller, F.W.K. and W. Lentz (1934) Soghdische Texte II, *SbPAW*, Nr. 21, 504–607.

P: Pelliot sogdien, in: Benveniste (1940).

Padm: see MacKenzie (1976), 12–17.

Pelliot, P. (1929) Neuf notes sur des question d'Asie Centrale. *T'oung Pao* 26, 201–66.

Pelliot, P. (1934) Tokharien et koutchéen. *JA* 224, 23–106.

Poucha, P. (1933) Tocharica VI. *Archiv Orientální* 5, 88–90.

Pulleyblank, E.G. (1965) The transcription of Sanskrit *k* and *kh* in Chinese. *Asia Major* (N.S.), 11, 199–210.

Rahmati, G.R. (1932) Zur Heilkunde der Uiguren. II. *SbPAW*, 401–48.

Reichelt, H. (1931) *Die soghdischen Handschriftenreste des Britischen Museums*, Heidelberg.

Röhrborn, K. (1976–) *Uigurisches Wörterbuch*, Wiesbaden.

Röhrborn, K. (1988) Zur Darstellung der Gutturale in den indischen Fremdwörtern des Uigurischen. *Central Asiatic Journal* 32, 232–43.

Röhrborn, K. (1990) Zur 'Werktreu' der alttürkischen Übersetzung der Hsüan-tsang-Biographie. Laut, P. and K. Röhrborn (eds.) *Buddhistische Erzählliteratur und Hagiographie in türkischer Überlieferung*, Wiesbaden, 67–73.

Röhrborn, K. (1991) *Xuangzangs Leben und Werk*, Teil 3. *Die alttürkische Xuangzang-Biographie VII*, Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica, Wiesbaden.

SbPAW: *Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften, phil.-hist. Klasse.*

SCE: see MacKenzie (1970).

Schaeder, H. (1934) *Iranica*, Berlin.

Schwartz, M. (1974) Sogdian fragments of the *Book of Psalms*, *AoF*1, 257–61.

Sims-Williams, N. (1978) Review of Mackenzie (1976). *Indo-Iranian Journal* 20, 256–60.

Sims-Williams, N. (1979) On the plural and dual in Sogdian. *BSOAS* 42, 337–46.

Sims-Williams, N. (1981) The Sogdian sound-system and the origins of the Uyghur script. *JA* 269, 347–60.

Sims-Williams, N. (1981a) The Sogdian fragments of Leningrad. *BSOAS* 44, 231–40.

Sims-Williams, N. (1983) Indian elements in Parthian and Sogdian. Röhrborn, K. and W. Veenker (eds.) *Sprachen des Buddhismus in Zentralasien*, Wiesbaden, 132–41.

Sims-Williams, N. (1984) The Sogdian 'rythmic law'. Skalmowski, W. and A. van Tongerloo (eds.) *Middle Iranian studies*, Leuven, 201–15.

Sims-Williams, N. (1985) Ancient Letters. Yarshater, E (ed.) *Encyclopaedia Iranica*, Vol. II/1, London, Boston and Henley, 7–9.

Sims-Williams, N. (1985a) *The Christian Sogdian manuscript C2*, Berliner Turfantexte XII, Berlin.

Sims-Williams, N. (1989) The Sogdian inscriptions of the Upper Indus. A preliminary report. Jettmar, K. (ed.) *Antiquities of Northern Pakistan*, vol. 1, Mainz, 131–37.

Sims-Williams, N. (1989a) *Sogdian and other Iranian inscriptions of the Upper Indus* I, (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II, Vol. III/II), London.

Sims-Williams, N. (1989b) Sogdian. Schmitt, R. (ed.), *Compendium Linguarum Iranicarum*, Wiesbaden, 171–92.

Sims-Williams, N. (1991) A Sogdian greeting. Emmerick, R.E. and D. Weber (eds.), *Corolla Iranica*, Frankfurt am Main/ Bern/ New York/ Paris, 176–87.

Sims-Williams, N. (1991a) Die christlich-sogdischen Handschriften von Bulayïq. Klengel, H. and W. Sundermann (eds.) *Ägypten Vorderasien Turfan. Probleme der Edition und Bearbeitung altorientalischer Handschriften*, Berlin, 119–25.

Sims-Williams, N. (1992) *Sogdian and other Iranian inscriptions of the Upper Indus* II, (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II, Vol. III/II), London.

Sims-Williams, N. (1992a) Sogdian and Turkish Christians in the Turfan and Tunhuang manuscripts. Cadonna (1992), 43–61.

Sims-Williams, N. and J. Hamilton (1990) *Documents turco-sogdiens du IXe-Xe siècle de Touen-houang*, (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II, Vol. III/III), London.

Sinor, D. (1939) A propos de la biographie ouigoure de Hiuan-tsang. *JA* 1939, 543–90.

Smirnova, O.I. (1970) *Očerki iz istorii Sogda*, Moscow.

STi: F.W.K. Müller, *Soghdische Texte* I, (*APAW* 1912), Berlin, 1913.

STii: Müller and Lentz (1934).

Stein, A. (1900) *Kalhaṇa's Rājataraṅgiṇī*, Westminster.

Sundermann, W. (1981) *Mitteliranische manichäische Texte kirchengeschichtlichen Inhalts*, Berliner Turfantexte XI, Berlin.

Sundermann, W. (1992) Iranian Manichaean Turfan texts concerning the Turfan region. Cadonna (1992), 63–84.

Sundermann, W. and P. Zieme (1981) Soghdisch-türkische Wortlisten. *Scholia. Beiträge zur Turkologie und Zentralasienkunde, Annemarie von Gabain ... dargebracht ...*, Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica 14, Wiesbaden, 184–93.

Tezcan, S. (1974) *Das uigurische Insadi-Sūtra,* Berliner Turfantexte III, Berlin.

Tuguševa, L. Ju. (1991) *Ujgurskaja versija biografii Sjuan'tszana*, Moscow.

Vim: see MacKenzie (1976), 18–31.

Waldschmidt, E. and W.Lentz (1926) *Die Stellung Jesu im Manichäismus, APAW,* Nr. 4.

Weber, D. (1972) Zur sogdischen Personennamengebung. *Indogermanische Forschungen* 77, 191–208.

Yoshida, Y. (1984) Sogdian miscellany. *Studia Iranica* 13, 145–49.

Yoshida, Y. (1990) On a Manichaean Middle Iranian fragment lost from the Otani collection. Sakiyama, O. and A. Sato (eds.), *Asian languages and general linguistics*, Tokyo, 175–81.

Yoshida, Y. (1991) Sogdian miscellany III. Emmerick, R.E. and D. Weber (eds.), *Corolla Iranica*, Frankfurt am Main/ Bern/ New York/ Paris, 237–44.

Yoshida, Y. (1993) Review of Sims-Williams and Hamilton (1990), to be published in the *Indo-Iranian Jour-*

nal.

Zieme, P. (1981) Bemerkungen zur Datierung uigurischer Blockdrucke. *JA* 269, 385–99.

Zieme, P. (1985) *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren*, Berliner Turfantexte XIII, Berlin.

Zieme, P. (1988) Das *Pravārṇa-Sūtra* in alttürkischer Überlieferung. Sundermann, W. et al. (eds.), *A green leaf: papers in honour of Professor Jes P. Asmussen*, Acta Iranica 28, Leiden, 445–53.

Zieme, P. (1990) Xuanzangs Biographie und das *Xiyuji* in alttürkischer Überlieferung. Laut, P. and K. Röhrborn (eds.) *Buddhistische Erzählliteratur und Hagiographie in türkischer Überlieferung*, Wiesbaden, 75–107.

Zieme, P. (1991) *Die Stabreimtexte der Uiguren von Turfan und Dunhuang*, Budapest.

Zieme, P. (1992) Manichäische Kolophone und Könige. Wiessner, G. and H.-J. Klimkeit (eds.), *Studia Manichaica*, Wiesbaden, 319–27.